

增補 明治文學史

東京 育英舎

文學博士 井上哲次郎

文學博士 坪井九馬三

文學博士 芳賀矢一

監修

文學士 岩城準太郎

著





### 明治文學史序

明治維新以來僅々三十九年を経過すと雖も、此間に於ける我邦の大變化は、實に世界の人目を眩するに足る。政治に法律に外交に教育に將た又兵制に非常の改革を成し、殆ど國家の組織を根柢より一變せんとするものゝ如し。是に於てか文學美術宗教風俗等も亦一般の趨勢に伴つて全く面目を刷新し來るの狀あり。此の如き偉大の社會的變化は、我邦に於て未だ曾て有らざる所なり。大化の改革の如きは固より大變化には相違なきも、維新以來の大變化には比較すべくもあらざるなり。殊に維新以來の大變化は、實に大變化と云ふのみならず、又同時に大進歩なり、大發展なり。此の如き大進歩大發展を齎したる大變化は、世界の歴史に於てすら尙ほ且つ其類例を發見すること能はず。



歐米の學者或は以て一種の奇跡となすもの、亦以なきにあらざるなり。此點より之を觀れば、維新以來三十九年の歴史は研究すべきもの、多々之あるは、言ふ迄もなきことなり。試に之を徳川時代と對照して之を考ふるに、徳川時代は成數を擧げて三百年と云ふと雖も、其實二百六十五年なるが故に、三十九年は已に其七分の一以上に居る。果して然らば慶長八年より寛永の末に至る迄の歴史に相當す。此の如くなれば、三十九年の歴史も、我邦の歴史の一部分として十分に研究を値するものあるを知る。況や維新以來の三十九年は徳川氏初期の三十九年より迥に大變化に富めるに於てをや。是を以て余嘗て坪井芳賀の兩博士と相謀り、明治歴史全集の編纂を企畫し、各専門家を以て之を分擔せしむ。乃ち明治教育史は文學士野田義夫氏に、明治

宗教史は文學士加藤玄智氏に、明治美術史は文學士富尾木知佳氏に、明治文明史は文學士小林郁氏に、明治文學史は文學士岩城準太郎氏に、明治外交史は文學士大塚武松氏に、明治政治史は文學士大塚久、文學士上原益藏、文學士齋藤隆三三氏に、明治殖産史は文學士水谷猶象、文學士芝葛盛二氏に、明治交通史は文學士水谷猶象氏に、明治軍制史は文學士松井等氏に、明治財政史は文學士阿部秀助氏に、明治戰史は文學士陸軍士官栗林己巳藏氏に編纂を委託する事となれり。然るに偶々日露戰爭の起るに際し、事業の進行はかくしからざりしと雖も、今や已に其緒に就き、明治教育史、明治文學史等相繼いで脱稿するに至れり。書肆育英舎先づ明治文學史を印刷に付し、將に之を世に公にせんとし、再三使者を遣はして序を余に屬す。余乃ち筆を執りて直に此文



を草し、明治歴史全集の來由を述べ、以て明治文學史の序となす。

明治三十九年十二月十三日

文學博士 井上哲次郎識

## 序

徳川の學者は知徳を重んじて情を輕んじ、文藝の暗黒面を認め、その價值の至大なるを忘れたるが如し。新井白石は猿樂の流行を見て、政綱紊亂の兆として苦言を將軍に進め、山本北山は淨瑠璃の文を愛讀しながら、尙之を廁中のみ繕讀せりといふ。曲亭馬琴の如き、生涯を小説の述作に委ねたる人すら、言ふところには有用の書を購はんが爲に無用の書を著すといふに在り。何ぞその文藝に對するの冷淡にしてこれを輕侮したるの甚きや。日露戰爭の捷利は古來武士道の教訓に原因すとは道學者の言にして、維新の鴻業は水戸學に胚胎し、學者の論議よく天下の大勢を左右したりとは史家常套の説なれども、その武士道を宣傳し、忠君愛國の思想を國民一般に浸染せしめたるものは



實はかの士君子の見るを陋とし、耻としたる小説淨瑠璃演劇等  
いはゆる平民文學の功勞によらずんばあらず。狂言の吉例と  
せられたる曾我兩孝子の名は草刈童にも知れ渡り、忠臣藏の幾  
幕かは津々浦々の村芝居にも演せられざる無かりしを思へば  
無用の書は却つて有用の功を齎らし、戯作の影響は甚だ眞面目  
なるものありしにあらずや。

純文學の士君子間に尊重せられざりし結果は、精神界第一流の  
人物をして筆を斯方面に執らしむるをなく、小説戯曲の如き眞  
箇に生命あり、活氣ある文學を擧げて、嗜好低き中流以下の社會  
に委ぬるに至り、爲に文學も亦鄙陋淫猥の域を脱する能はざり  
しは、我徳川文學史上の一大遺憾といふべし。文藝を尊重する  
風の盛なること歐洲諸國の如くなりしならんには、白石の如き

は蓋し世界に雄視する一代の大文豪たりしならん。

然れどもかくの如き時代にありて、いはゆる平民文學の發展の  
さはかりに顯著なりしをおもへば、亦自ら人意を強うするもの  
あり。凡そ國家の隆昌なる、必ず文學の見るべきものあり。國  
民の意氣銷沈するや、文學も亦委靡して振はず。支那朝鮮等近  
世文學の甚だ寂寥なるをおもへば、我國が東洋の覇者たるべき  
形勢は已に徳川文學を以て豫言し得べかりしなり。

吾人はこゝに舊來の文學を繼承して、新に西洋の文化を受け、今  
よりは東西を融合渾化せる新國文學の發生を希望する地位に  
立てり。純文學に關する見解は一大變遷をなして、今や徳川時  
代に士君子の繙讀するを憚りし無用の書は多數の學者により  
て研究せられ、徳川時代に士君子の列に伍する能はざりし戯作



者は詩人、文學者を以て社會の上流に遇せらるゝに至れり。文學に對する尊重の此の如きをおもひ、國家の隆運前古其比なく、國民の發展亦益際涯なからんとする今日の狀勢を念ふに、國文學の前途に向つて赫灼たる光明の閃影を認め得たる感なき能はず。

今日は正にこれ過渡の時代なり。音樂に於て、繪畫に於て、尙蔚然たる大家の輩出せざる限り、國文學に於ける偉人の發現も亦未たしかるべし。たゞこの過渡の時代が如何に經過し、如何に變遷し來れるかを見んば、將來の希望と理想とを満足せしむる上に於て幾多の興味を感ずべきのみならず、將來に起るべき新國文學の先驅たるべき現代文學を現今の人の手に叙述し、評論せる本書は後人の目より見ば亦如何に多大の興味を惹起すべ

きならんと信じ、本書の刊行を喜悅するの情に禁へず。

明治三十九年十二月

芳賀 矢一 するす



## 緒言

一 明治維新は本邦文明史に於ける空前の事件なり。東西の文明相交りて茲に一新文明を現出し、社會百般の事象悉く新彩を帶ふるに至れり。然れども明治の文明は、年を閱する事四十に満たず。譬へば、青春の人、經驗未だ足らず、思慮未だ熟せず、勇往の氣徒に盛にして未だ調和の妙境に達せざるか如く、新舊の二素到る所に乖戾す。我文明が壯年の域に上り、成熟の期に入るか如きは尙遠き未來に屬す。所謂「過渡時代」は斯かる時期に命ずべき最陳腐にして又最適切なる名稱なるべし。而して此の現象の特に著しきは、文藝界に在り。由來文藝界の推移變遷は常に物質界の其れに後る。物質界革新の事業を完成してより、文華爛熟の盛運に達するまでには、更



に幾十の歳月を経さるへからず。大化革新ありてより三十年を経、天武、持統の世に至りて物質界の革新殆ど完成せたりき。而も文藝界の革新を遂げたる天平の盛事は八十年の後に在りき。桓武帝京を拓きてより三十年を経、平城遷都の世に至りて紀綱張り國運盛なりき。而も延喜の文運勃興は百年の後に來りき。元和、偃武以來三十年、家綱軍職に就く頃は恰も徳川氏覇業の完成せし時なりき。而して文藝界の新氣運は八十年を経て元祿享保の交に興りき。維新の一元勳は豫言すらく、明治維新の大業は三十年にして成らんとす。思ふに二十七八年戦役の前後は、維新の宏謀を完成せたりし一天時期に非ざりしか。物質界の方面は此時に方りて略は成人の域に達せしか如し。唯文藝界の天平時代、延喜時代、元祿時

代は未だ到らざるなり。

一 然り。明治文學は尙混沌たる過渡期に在り。然れども、古來文學史上の過渡期にして斯くの如く興味饒きは未だ有らざるなり。平安文學の過渡期は、印度支那の文藝を取りて之を本邦固有の文藝に融和したる時代なりき。江戸文學の過渡期は、舊文藝復興の氣運に乗じ、一千年間浸潤し來りし支那印度思想が、純然たる我文學思想となりて現はれ、東洋文明の精華悉く萃りて我文學に入りし時代なりき。明治文學の過渡期は、則ち之に止らず、前代萃め得たる東洋文藝の精華を提けて、新に泰西の文藝と觸接し、其の英を摘み、其の芳を採り、以て世界的發展の途に就かんとする時代なり。明治文學史は、此意義深き過渡期文學の一般を髣髴せんとするものなり。



一 遮莫明治文學は年齒尙若く、思潮の變遷文運の推移、未だ容易に究むべからず。されば之を論ずるに方り、期を分ち章を定め、劃然たる彙類をなして、各種文學を同一理法の下に攝取論述する事甚難し。此書に試みしか如きは、一の試験に過ぎず。

一 此書主として代表的作家及び代表的著作を取りて文學發展の迹を辿る。多數の作家作品を悉く採録する餘裕なきを憾む。

一 此書收めたる文學は、純文學に限る。又純文學に在りても、所謂美文紀行文乃至漢詩漢文等は省畧に従ふ。

一 文學評論と新聞雜誌との文運發展に及ぼす影響や甚大なり。此書特に節を設けて之を詳述せんとせしむ、紙數に限あり。

り。唯略叙に止む。

一 最近文學の概觀は、三十六七年の交、文運一轉せんとするに至つて筆を擱く。象徴文學の勃興、社會主義小説の出現、藤村、漱石獨歩等新文星の活動、及び文藝協會の事業等の新現象は、尙將來の發展を待つべき者なれば、暫く之に論及せず。

一 非才寡聞敢て事に當る。誤謬と脱漏と、冗漫と粗笨と、定めて卷に普からん。偏に江湖の叱正を俟つ。

明治三十九年十一月

著者識す



## 増補例言

一 本書は初版の全部に訂正を加へ、特に末章を改作し、新に二章を増補し、添ふるに明治文學年表を以てしたる者なり。

一 初版は其の緒言に述べしが如く、三十六七年の交に筆を擱けり、當時文壇の風雲頗る險惡にして、大勢の何れに傾くべきか若しくは如何なる新現象の起るべきかは、聰明なる批評家と雖、觀測するに難んずる所なりき。衝天の意氣を以て觸起し來れるロマンチック運動の歸趨は如何に、デカゲン詩派を模倣せる象徵詩を如何に發展すべきか、將來小説界の覇權は天外の科學的寫實小説に歸すべきか、蘆花春葉の家庭小説に歸すべきか、はた全然新作風を捲き起すべきかに關しては、何人も權威ある論斷をなし得ざりき。況んや自然主義の文學俳諧派の小説の突如萬丈の光焰を擧ぐべきを豫想するに於てをや、評壇の識者と稱せらるゝ人も、或は馮牛等の運動を以て一時の熱狂に過ぎずとなすあり、或は新體詩界に敘事詩の流行せるを見て、斯壇の大勢茲に在りと説くあり、或は蘆花を以て將來最

發展すべき作風を具ふとなすあり、或は天外の科學的小説を以て斯界の本流となすあり、多くは客觀思潮の横溢を豫想して、將來文壇の客觀的傾向を帶ぶべきを唱へたりき。之を今日より見れば、笑ふべきが如しと雖、當時混沌の渦中に在りては誰かよく之を達觀し得べき、吾人は初版結末に於て、評壇の大勢に反し、主觀抒情の思潮一世に漲らんとするを觀測して、未來文壇の新傾向を揣摩し得たるに満足せんことをす。

一 爾來我が文壇は急轉直下ロマンチック運動の統を繼ぎて舊文藝破壊の運動を逞うし、敘事詩史詩夢の如く去り、家庭小説は第二流讀者の間に墮ち、代りて立てる新興文學の旗幟獨り鮮明に、文壇の各隅に樹つに至れり、今にして過去文學界を顧みれば、歴史の進程略分明に、文運發展の徑路亦瞭乎として、双眸に入る。文學上の維新革命ありて約二十五年、第二の維新は今正に斯界に行はれつゝあるなり。茲に初版の末章を改めて文學一轉の兆を示し、混沌期の文學を總敘し、新に二章を加へて新興文學の由來を明にし、進んで昨四十一年に至る最近文壇の狀勢に説き及べり、庶幾くは初版の面目を一新して、多少の光彩を添ふるを得んか。



一 本書附する所の明治文學年表は、尨然たる草稿の中、専ら文運の大勢に關係深き事象を取り、要を抜き略に従ひ、僅に十の一を掲ぐ。編者多年苦心の餘に出づと雖、固く學暇零碎の時間を用ゐて之を蒐集したる者、涉獵遍からず、訪索博からず、時に或は誤脱なきを保せず、特に必ず採録せざるべからずして、而も年月不明なるが爲、已むを得ず省略せる者あるは、最編者の遺憾とする所なり。江湖博覽の士幸に是正を吝む勿れ。

一 本書初版を公にするや、恩師藤岡博士、長友志田學士、其の他新聞雜誌記者諸士、或は有益なる批評を加へられ、或は懇篤なる教示を賜はる。著者は是によりて蒙る啓く事鮮少に非ず、茲に特記して聊か謝意を表す。

明治四十二年五月

著

者

八

## 增補 明治文學史目次

### 第一期

#### 第一章 前代繼承の文學

- 第一節 暗黒の文學界……………一
  - 第二節 外來の思想……………九
  - 第三節 前代繼承の文學……………二六
- #### 第二章 新文學の先驅
- 第一節 翻譯文學……………四三
  - 第二節 政治小説……………五一

### 第二期

#### 第三章 新文學思想

- 第一節 固有思想の反動……………六〇

目次

一



第二節	文學思想の革新	七〇
第四章	新文學の勃興 其一	八五
第一節	新文學の曙光	八五
第二節	寫實小説の興起	一〇五
第三節	傳奇小説の興廢	一四九
第四節	新體詩及戯曲	一六二
一	新體詩	一六二
二	戯曲	一七〇

### 第三期

第五章	新文學の勃興 其二	一八〇
第一節	文運興隆の因縁	一八〇
第二節	俳句の革新	一八五
第三節	和歌の革新	二〇八

第六章	文學の轉進	二二一
第一節	小説 其一	二二一
一	觀念小説	二二一
二	心理小説	二三七
三	先進作家の心理小説	二五七
第二節	新體詩	二七四
第三節	戯曲	三〇二
第四節	小説 其二	三一七

第七章	文學一轉の機	三四二
第一節	俳句和歌及新體詩	三四四
第二節	小説及戯曲	三五五

### 第四期



第八章 新興文學の由來

二七一

第一節 舊文藝破壊の思潮

二七一

第二節 海外文學の輸入

二八〇

第三節 象徴詩の勃興

三八四

第四節 自然派小説の源流

三九〇

第五節 俳諧派小説の出現

四〇一

第六節 脚本界の新聲

四〇九

第九章 新興の文學

四一八

一 思想界の新潮

四一八

二 新興の小説

四二五

三 新興の詩歌

四三六

附録

明治文學年表

四三六

補増 明治文學史目次

終

補増 明治文學史

文學士 岩城準太郎 著

第一期

第一章 前代繼承の文學

第一節 暗黒の文學界

潮流の相撃つや、勢浪を起し渦を旋らし、寒暖相交る所、忽ち濃霧を結び、千里に瀰漫して、屢、海客を惱ます。思潮衝突の事亦頗る是に類する者あり。幕末以來、動き初めたる新思潮は、類々として繼起せる外來の刺戟によりて、日一日其勢を伸べ、遂に滔天の大勢力となりて、舊思想の前面に顯れ來り、論争、戦亂、變革、所有破壊的運動



を逞うして維新の大革命は成り出でぬ。其間、社會の舊秩序悉く破れて、之に代るべき新秩序未だ確立せず、世を擧げて、一時混沌の界に陥り、一代の民衆徨々として五里霧中にさ迷ふか如き状態なりき。

而して此維新當初の社會を支配せし所謂新思潮は、疑もなく泰西の思想より來りき。思ふに新思潮の横流は其の由來する所甚だ遠く、洵に幕末一日の故に非ず。室町の季世、南蠻の來航ありてより、江戸幕府の初期紅毛の通商に至るまで、既に泰西思想の一端に觸れ、島原の騷亂に銳鋒一度頓挫せしも、八代將軍の英斷、新文明の輸入を復興し、爾來日進月歩の西洋文明は、絶えず紅毛人の手によりて本邦具眼の士に傳へられしかば、所謂新思想の萌芽は此の間既に養はれたりし事疑ふべくもあらず。此時に方り黒船來航の飛信は、露人北邊を侵すの警報と共に全國を愕かし、國國の存亡此の一瞬に極まるか如く見わしかば、攘夷、開國、尊王、佐幕、衆論沸騰し、國內騷擾し、續て外艦砲撃となり、幕府の解體となり、大政奉還となり、時局は走馬燈の如く廻りて、急轉直下、遂に王政維新となり、赫々たる新思想の勝利を以て一段落を結びぬ。南蠻通航以來、國民の間を流れ來りし泰西思潮は、茲に至りて汪々たる

奔流となり、新たに建設せられし明治政府は、悉く此思潮に浴せる當代の俊才によりて組織せられたりしかば、舊物革新の政治は一瀉千里の勢を以て行はれ、二百年の舊慣一朝にして改まり、東照公の威靈全く地に落ち、封建世襲の制度せられ、四民の階級撤せられ、結髪を切り、帶刀を解き、曆日を改め、年中行事を變へ、社祓の折目正しきは洋服帽子の當世風に移り、驛路傳馬の悠々たるは、氣車、氣船の快速と代りぬ。斯くて、上は政治の大本より、下は衣食住の瑣末に至るまで、一として泰西に法らざるは、なく世を擧げて西洋文明に心酔するに至り、物質界に於ける泰西思想の勝利は明かに認められぬ。

然り、改革は疾風の如く行はれぬ、疾風の過ぐる所、草を飛はし、木を摧き、家を破り、垣を壊ち、野を荒し、林を掠め、當る所の物破摧し盡さずんは止まず。維新の改革は破壊の歴史なり。總ての舊制度、舊習慣は根蒂より覆されたり。舊に制度習慣のみならず、總ての舊思想、舊學術は舊弊といふ一語の下に斥けられたり。舊に思想學術のみならず、總ての舊道德、舊信仰、乃至舊文學、舊美術は悉く破壊し去られたり。換言すれば、物心兩界に亘りて總ての舊事物は名殘なく破壊し盡されたり。斯く



て世は荒寥たる木枯の野となりて、一代の民衆は、制度確立せず、思想定まらず、はた信仰なく文藝なき混沌界に投せられぬ。

斯かる民衆の第一に要求する所の者は言ふまでもなく物質的満足なり。猛烈なる破壊に驚かされて茫然爲す所を知らざりし民衆は、譬へは餓ゑたる者の食に就くか如く、倉然として物質的新文明の下に集まり、文明若しくは開化と名の附く事物は、善悪美醜の識別なく之を貪り取りぬ。是に於てか、維新の改革家は、其の勇往なる破壊の手を収めて之を建設の方面に廻らさざるへからず。而して其の建設事業の第一着手は實に物質的新事物に向て爲されざるへからざりき。聖天子即此の氣運を察し勅諭を下して國民の向ふ所を指導し給へり。明治元年三月天下に誓約し給ひたる五事の詔勅即是なり。曰く、廣く會議を起し萬機公論に決すべし。曰く、上下心を一にして盛に經綸を行ふべし。曰く、文武一途庶民に至るまで各其の志を遂げ人心をして倦まさらしめん事を要す。曰く、舊來の陋習を破り天地の公道に基くべし。曰く、智識を世界に求め大に皇基を振起すべし。是實に機宜に適ひたる施設にして、其の徹頭徹尾物質的建設に關する者なるか如きは、嘗

時の民心の躍如として之に反映するを見るべし。爾來國民の歸趨は一に之に集まり、孜孜として物質的新事業の經營に勤めぬ。元年三月、太政官「日誌」を發行してより民間新聞紙の起る者相次ぎ、二年府縣に小學校を設け東京に大學校を興し、京濱間に電線を架し、鐵道を起工し、四年廢藩置縣を斷行し、穰多非人の稱を廢して四民平等となし、五年、太陽曆を採用し、六年、全國に徵兵令を布き、八年、行政改革の詔を發して行政組織の完美を計り、元老院を設けて立法議院建設の準備をなし、大審院を置き、司法權を確立し、其他人才登庸の道を開き、留學生を西洋各國に送り、新聞雜誌を發刊して益々此の思想を鼓吹し、盛に窮理書を著譯して科學的智識の傳播に勉めたる等、明治の初年全國民の奮勵努力は、一として五事誓約の實現ならざるは無かりき。大水堤を決したるか如き物質的新文明の流に當る者、何人か敢て精神界の缺陷に想到し、若しくは進んで精神的新建設を試みんとする程の餘裕を有すべきぞ。社會の大變動に遭遇して、舉措其の度を失ひたる國民が、物質的要求の満足に忙殺せられて、又他を顧みるに暇なかりし事誠に宜なりと言ふべし。物質的要求を満たすに惟れ日も足







は一たび幕末變亂の爲に打撃せられ、二たび維新以來の泰西物質的新文明の爲に打撃せられて沈衰の極に達せり。所謂西洋實學の勢力はあらゆる文學を蹂躪して無用の文學となし、和漢文學に關する在來の典籍は、其の他一般の和漢書と共に新世界の時勢に添はざる者として擯斥せられ、此等を藏する者亦因循固陋として嘲けらるゝ事少なからざりしかば、古今の名著大家の述作乃至希世の珍本奇籍、惜し氣もなく反古として沽却せられ、片々たる窮理の書代りて諸家の珍藏となり、物理學の初歩を心得たる者非常の大學者の如く思ひ上りぬ。されば新文學固より起るよしなく、新文學者亦出づべくもあらず。唯此の變轉活動の社會と相關する事なき一派の閑人等、積衰の餘に出でたる舊文學の殘存冷杯を嘗めて社會の墓面に一脈の文運を維持する有るのみ。其れすら生存問題の苦痛容赦なく彼等を迫害し、戯作を以て身を立つるの困難は愈甚しくして、之にたづさはる者漸く跡を絶たんとす。幸に新聞紙の起る有りて、戯作者の少しく才ある者之に従事し、新作取るに足る者無しと雖、頼りて以て一縷の命脈を保てり。要するは明治初年の文學界は微光一點の明滅する者有るのみにして、大勢の上より見れば暗黒無明といふ

八

も不可無きに似たり。而も其の微光や、舊文學の繼承に過ぎずして、未だ以て明治新文學の新光明と稱するに足る者あざりき。餘裕なき國民の俗悪なるは今に始まりたる事ならずと雖、當時の國民の如くしかく詩味の缺乏したる者あらず。乾燥淺薄の風、上下を靡かして世は永へに功利一逼の世とならんとせり。維新の歴史は舊物破壊の歴史なり。明治の初年は物質的要求の満足に全力を注ぎし世なり。心靈界の要求未だ起らざる世なり。古今に比類なき沒趣味の時代なり。文運地に落ちたる時代なり。新舊思潮衝突の序幕は實に斯くの如き慘憺たる光景を以て開かれたり。明治文學史は實に憫むべき文學の悲境を以て始められざるべからざりき。

## 第二節 外來の思想

維新革命に於ける泰西思想の勝利は、物質界に對して多大の貢獻をなせりと雖、心靈界に對しては上述の如き不吉なる結果を殘せり。されば國民の自省自識未だ起らず、思想界に於ける自主自立の域尙遠くして、朝變暮替、一に外來思想の赴く



所に従ふ。是を以て、且に英國思想を迎へ、夕に佛國思想に就き、昨は功利主義盛にして今は幸福主義起り、民心の蕩搖極まりなく、遂には尊外卑内の弊に陥るまで、只管泰西思想の後影を追ふ。されば一度物質界に於て勝利を得たる泰西思想は、進んで精神界に其の勢力を振ひ、延いては文藝に於ける新思想輸入の階梯ともならんとす。因て茲に後來文藝界新思想の先驅ともいふべき思想界の新潮を探り、其が物質的文明に對する交渉以外如何なる影響を我人心に與へしかを見ん。

蘭學は本邦洋學の祖なり。大凡、外國の思想乃至學術の我邦に入りしは、古代にしては佛學と漢學とあり。近代にしては即蘭學あり。而して佛學と漢學とは、共に我思想界文藝界に入りて其の有力なる元素となり、物質的文明の進歩以外、靈界に残せる痕跡頗る顯著なりき。然れども蘭學は醫學天文等の實用科學を傳へ、我物質的文明に對して多大の貢獻をなし、に係らず、倫理文藝に對して其足跡を印する者甚少かりき。本邦洋學の祖先は、唯物質的文明の指導者としてのみ二百年間の勢力を維持せしが、幕末歐米各國の言語、思想、學術等、一時に流入するに及び、大渦盤旋、蘭學の勢力を没し去りて、想海一度中心思潮を失ひ了りぬ。斯くて、幕府衰

亡の大變亂を経て王政一新となるに及び、俄然勃興し來りて本邦文明を指導し、以て前代蘭學の地位を奪ひし者は、實に英國思想なりき。

當時世界の海上權力は既に蘭國を離れて英佛米の手に歸し、文明の中心亦之等新興の邦國に移りしかば、十九世紀文明の新潮は彼等の手によりて東洋に運はるゝに至り、特に英國、富強宇内に冠し、海上王として勢力五洲に及へる時なるを以て英國の思想及學術は蕩然として國內に入り來れり。當に之のみならず、英國の分身たる北米合衆國は、提督彼理來航以降、本邦開國に深き關係を有し、我爲政家改革家先づ彼に兄事して開化文明の師と仰ぎ、彼國も亦私かに東瀛蓬萊國を開發する嚮導を以て任じたりしかば、英國的文明の分子は西より東より盛に此國に移、植せられたり。當時英語は世界の通語と稱せられ、我朝野先覺の士、歐米諸國を視察し若しくは數年留學の功を積みて歸朝する者、多くは英語を操り、英國學者乃至其の著書によりて文明の智識を得たりし輩なれば、此の方面よりも政治、經濟、風俗、衣食其他万般の事物、概英國を宗とせるなりき。

斯くして英國思想は泰西新思潮の先頭として國內に横流し、續いて他諸國の思



想を導き、到る處革新の波を揚げにき。而して此の思想を抱きて國民の唱首となり、所有刑森を拓きて此氣運を鞭撻し、以て一世の木鐸となりし我先覺者は實に福澤諭吉なりき。彼は既に明治以前慶應義塾を江戸三田に開き、天下の學生を招きて革新の曉鐘を撞き初めたり。其の宗とする所は専ら英米功利の學風に在り、政治、道德、風俗、習慣等、一に舊來の弊を打破して新文明の光に浴せしめんとす。其の舊道德、舊習慣、舊教育を罵倒するや峻烈を極め、教壇に公開演説に、新聞に著書に、勇往直前、新主義を鼓吹して止まず、『世界國盡』『窮理圖解』『西洋事情』等、通俗の著書、又は種々の翻譯書を出して公衆を教へ、遂には時人をして一般洋學書を稱して福澤本と呼びしむるに至り、三田の先生若しくは三田翁なる名は、斯くて我新文明を開きたる大光明となりぬ。

げに思想界の嚮導としての福澤は極めて偉大なりき。而も彼の事業は獨り之に止まらず、文學者としても亦新文壇に於ける最初の新文學者たる光榮を荷ふ者なり。勿論彼の文學者たるは純文學の作家たる所に存するに非ずして、單に文壇の上に在り。換言すれば、散文家翻譯家としての文學者たるに過ぎず。然れども

從來の文壇に於ける誇大粗放の漢文と、優長迂遠なる和文との外、別に平易流暢の一體を創めて新思想の發表と俗間の普及とに便したりしは、其の功績實に鮮少に非るなり。明治六年「文字の教」を草し、其の端書に曰く、今より次第に漢字を廢するの用意專一なるべし、其用意とは文章を書くにむつかしき漢字をば成るべく用ひざるやう心掛くる事なり。むづかしき字をさへ用ひされば、漢字の數は二千が三千にて澤山なるべし。此書三冊に漢字を用ひたる言葉の數僅かに千に足らされども、一通りの用便には差支なし。之に由て考ふれば、漢字を交へ用ふるとてさまざま學者の骨折にも非ず、唯古の儒者流儀に倣て、妄に難き字を用ひざるやう心掛くる事緊要なるのみ云々と。彼か文章に對する第一の主張は漢字制限に在り。斯くの如きは豈三十年後の今日、我教育社會が取りつゝある方針の的確なる豫言に非ずや。且其の文體と用語と、全然從來の型式を離れ、口語の語彙と語脈との大膽なる採用を試み、以て上掲の如き文語と口語との渾然たる調和體を創始せり。是豈に吾人が今日此の文を読んで何等の不思議を感せざるまでに讀み習ひ書き習ひたる普通文の範を垂れたる者ならずや。後年或は假字のみを以て國語を記載



せんとし、或は言文一致の文體を創始せるか如きは皆其の源泉を茲に汲めりといふべし。げに彼の文體は自由なり、平易なり。明治思想を述べんには斯くの如く自由ならざるへからず。之を民間に普及するには斯くの如く平易ならざるへからず。正に是時勢の要求此の文を起し、もの、明治文壇到る所に其の影響を殘し、くも亦宜なり。

福澤は又世界の地理歴史を童蒙に教へんか爲に、明治二年『世界國畫』を著し、吟詠の中自ら之を暗せしめんとして、平易流暢なる七五調を以て一篇を始終せり。此の書一度出て、より到る所節調を附して吟誦せられ、其の吟調相傳へて後日の軍歌調となれり。而して其の文章も、冒頭「世界は廣し萬國は」より始めて、沒趣味なる地理歴史の叙述に過ぎされども、其の記載の對象により興來り情昂る時は、文字精彩あり、聲調昂揚して一段の詩味を帯ぶ。特に英京を叙する所及北米合衆國の歴史を謳ふあたりは、宛然後年『新體詩抄』の詩調を喚起したる先聲なるの觀あり。彼又、英人チャムブルの『モイラル、クラス、ブック』を譯して『童蒙教草』と題し例の平易自由なる文體を以て童蒙の訓話を記載せり。是亦後の童切の讀み物の所有種類に

採用せられる文體の嚆矢にして、別しては翻譯文の最達したる者の一なり。固く是、教訓書にして文學上の作ならざれば、翻譯文學とは稱するを得ずと雖、唯其の文章の上より同人の他の譯書と共に頗る尊重を價すべき者となす。

要するに彼の文章は平易と自由と暢達とを以て特色となし、之を以て『西洋事情』以來無數の著書論文を一貫せり。斯くして彼は明治の文章に、風體と用語との革新を加へ、一代の散文をして向ふ所を知らしめたり。其成功の著しき、彼か思想界に於ける成功に比べて必しも遜色なし。否、後者の成功は、半ば其文章の功績に歸せざるべからず。彼か明治文學史上に有する位置は正に此點に存す。

私塾を開いて洋學を授けたりし者の中、慶應義塾を除きて最有力なりしを東京小石川なる中村正直の同人社となす。是亦英國風の社會教育に力め、『西國立志編』『西洋品行論』等、スマイルズの著書を譯述して、品性修養の根據を洋風道徳の上に置きたりき。其他明治初年にありし各地洋學の塾には、笑作秋平塾、鳴門二郎吉塾、福地源一郎塾、尺振八塾等甚多く、何れも明治新文明に直接間接の貢獻をなせり。明治四年の調査によれば、當時福澤塾生三百二十三、福地塾生七十八、笑作塾生百六

中村正直



鳴門塾生百四十一、尺塾生百十一名ありき。以て洋學當年の狀勢を見るべし。教育の方面にて此新氣運興隆に力ありしは、此等民間教育家のみならず、政府當局の施設亦没すべからず。維新以前より洋學輸入の中樞たりし開成所は、慶應三年學制を改めしより、蘭學漸く衰へて英佛獨の學術漸く盛に、該國教師を聘し、専ら其の國語によりて諸生を導かしめ、超て明治二年、府縣に小學校を設けて初等教育の端を開き、次に開成所を大學南校と改稱して語學を専らとし、昌平費を大學東校と改稱して醫學を専らとし、以て高等專門教育の基を立て、三年大、中、小學規則を制定し、南校に各藩の貢進生を集め、其英佛學上等生を英佛二國に留學せしめ、次て中學校を立て、中等教育の機關を設けたり。爾來大學南校益擴張せられて、四年には雇外國教師、英五、米四、佛三、字三、瑞一の多きに及び、生徒總數千、百九十五名の盛況に達し、留學生には五名の女子を見るに至り、同年文部省を置き、教育行政の首樞となし、政治法律より日用技藝に至るまで、百般の學校備はらるるなく、以て十年東京大學の設立に及ぶ。政府の洋學教育が斯く發々として其歩を進むる間、他方に於ては文明進歩に資すべき著譯頻りに出で、益々此氣運を助けたりき。

此等著譯は主として民間學者の手に成りしと雖、文部省亦大に之を獎勵し、或は自ら翻譯出版に従事し、或は其の保護の下に著譯を完成せしめたり。試みに明治十二三年以前に出でし重なる者を舉ぐれば、福澤中村三家の著書を始め、政治、經濟には『新政大意』、『立憲政體略』、『万国公法』、『經濟原論』、『銀行論』、『歴史』には『西洋史記』、『万国新史』、『歐羅巴開化歴史』、『萬國史略』、『泰西通鑑』、『地理、風俗』には『輿地誌略』、『五洲記事』、『西洋夜活』、『西洋新書』、『地理學』、『窮理』には『物理全誌』、『人身窮理』、『博物新編』、『修身、倫理』には『勸善訓蒙』、『修身論』、『智氏家訓』等、其他文部省がチャムパーの百科全書を譯出せる等枚舉に暇あらず。

更に新文明の發展に與つて大に力ありしは新聞紙と雜誌との發刊なりき。固と新聞紙は新文明渡來に伴うて起りしものなるも、智識の傳播者、開明の通達者として最適當なる新聞其物の性質は、直ちに翻つて新文明宣傳の大機關となりき。特に此等の事業に従ふ者は當然の頭象として新智識を具へたる當代の先覺者、乃至文章に堪能なる朝野知名の士なりしかば、其の説く所は、尙半暗黒なる當代社會を照す光明なりし事疑ふべからず。抑も新聞紙の始めて本邦に發行せられしは



夙く文久年間に在り。「バタビヤ新聞」「六合叢談」「中外新報」等は蓋し此の事業の祖なるべし。而も毎月數回の定期刊行をなせるは、元治元年、英人ウエーランドが横濱に發刊し、岸田吟香之が主筆たりし「新聞紙」なるべく、次に慶應四年、柳川春三が發行せる「中外新聞」は蓋し邦人の手に出でし最初の者ならん。然れども其の記事は皆横濱なる歐字新聞の抄譯に過ぎざりき。同年政府「太政官日誌」を出して新政の主旨を知らしめ、現今「官報」の基を作り、福地源一郎（櫻痴）「江湖新聞」を出して民間時論新紙の開祖となれり。福地が「新聞紙實歴」に述ふる所を見るに、曰く慶應二年再び幕使に隨行して英佛二國に駐在せる凡十ヶ月、此の間巴里倫敦の諸名家に會して新聞紙の事を問ひ、其内外の政治に關して輿論を左右する者は即新聞の力なりと聞き、あはれ余にして若し大學文章あらば時機を得て新聞記者となり時事を痛快に論せんものぞと思ひ初めたりき。中書竊に條野傳平、廣岡幸助、西田傳助の三人に謀り、乃ち新に「江湖新聞」と名つけたるを發兌刊行したり。活字もなく活版もなかりければ、之を木版に彫刻して馬連摺にしたり。半紙二切にて每號凡十枚乃至十二枚を一冊として之を綴りたれば、取りも直さず今日の雜誌の疎末なる

福地源一

者なり。其の體裁は雜報あり、寄書あり、時論文ありて、其の草稿は盡く余一人の筆に出で、其淨書の如きも時として余自ら版下を書き、概三日若しくは四日毎に發兌を試みたるに、諸種ありける中にも「江湖新聞」は尤發兌の部數多しと稱せられて、順世人の矚目を惹きたりと。以て此新聞の起れる因縁と、發兌當時の事情と體裁とを知るべし。爾來民間新聞紙を起す者踵を接し、橋爪貫一の「内外新報」を始め、遠近新聞「新聞事略」、横濱の「もしは草」、大阪の「内外新聞」等、明治四年に洋紙活字版の嚆矢たる「横濱毎日新聞」「新聞雜誌」「日新真事誌」等相前後して出で、五年「江湖新聞」發行禁止となりしかば、條野等更に「東京日々新聞」「支那製活字、日本紙一枚摺、後洋紙兩面摺」を刊し、次て小西義敬等「郵便報知新聞」を出し、其他大和、大阪、山梨、西京、茨城等各地競うて新紙を發行するに至れり。されど當時の新聞には社説を掲げて時事を評論する事なく、唯世上公私の記事を秩序なく臚列せしに過ぎず。故に其の品位未具はらず、世人の見る目未重からざりき。然るに六年に至りては新聞界の氣運漸く動き、福地櫻痴、官を辭し、「日々新聞」に入りて社説を起草せしより、當時の名士文筆にたづさはる者、次第に新聞に筆を執るに至り、岸田吟香「日々」に入り、七年「朝



成島柳北

野新聞』起りて成島柳北之に従事し、八年『新聞雑誌』改題して『曙新聞』と稱し、岡本武雄末廣鐵腸之に執筆し、其他『報知』には栗本鋤雲、藤田鳴鶴、矢野龍溪あり、『日々』に末松青菴、市喜山景雄あり、『横濱毎日』に沼間守一あり、『朝野』に末廣鐵腸、大久保鐵作あり。所謂五大新聞競うて時事を論じ、文藻を研ぎ、殊に櫻痴は議論嶄新、文章雄麗、草する所の社説は卓然として一世の瞻仰する所となり、當時文筆の間に名を成さんとする者期せずして櫻痴を標的とする状況なりき。柳北の盛名殆ど之に頡抗し、觀察奇警、文辭輕妙、獨得の壇場は雜錄に在りき。斯くて新聞紙は隱然天下に重きをなし、記者の抱懐する進歩思想は其主張の漸進なると急進なるとを問はず、往々一世の輿論を喚起せんとするに至れり。されば十年前後に於ける新聞紙の創刊殊に夥しく、就中七年鈴木木田正雄『讀賣新聞』を出し、八年落合芳巖、高島益泉、繪入新聞の嚆矢たる『平假名繪入新聞』を出し、『假名垣魯文』、『假名讀新聞』を出し、『讀賣』の筆實『繪入』の華麗、『假名讀』の洒落、三者鼎立して畫蒙に入り易かるべき世態人情に關する記事を載せ、『日々』、『朝野』の男性的なるに反して、専ら女性的趣味に富むを特色とせり。

明六雜誌

雜誌の發達は新聞紙と其軌を一にして、唯少しく専門的研究的なるを異なりとす。然れども其の初、『太平海新報』、『新聞雑誌』、『翻譯新聞誌』、『海外雜誌』等の出てし頃は、多くは外國新聞雜誌の翻譯などを載せたる週刊物にして、其の性質も新聞と異ならずりしが、明治七年明六社より『明六雜誌』出づるに及び、始めて雜誌の體裁を具へたり。明六社は新政後に於ける文人學者の結社の嚆矢にして、其名は創立の年を表はせるもの、首唱者は森有禮、社員は西周、西村茂樹、大槻文彦、加藤弘之、田中不二麿、津田真道、津田仙、辻新次、中村正直、九鬼隆一、畠山義成、福澤諭吉、杉亨二、箕作秋坪等にして、正に是當代學者の粹を集めたる學士會院なりき。されば其發刊する『明六雜誌』は實に當代先覺者の思想發表の機關として學術的研究的の所論を包容し、社會百般の事象に涉りて時事を論議する事頗る盛にして、特に社員多數は、其主義に漸急の差別こそあれ、何れも新思想を抱いて改進の氣運を鞭撻せんと勉むる人々なりしかば、當時勃興し來りし、『日々』、『朝野』等の諸新聞と相呼應して新文明の扶植に盡したり。不幸にして時の政府が此等新聞雜誌の縱論横議に堪へずして發布せる新聞條例は、此雜誌の發達を阻害して八年末遂に廢刊しぬ。日刊雜誌『洋



々社談』之に代りて同年發行せられしが、説く所時事論よりも寧ろ史傳語學等の研究に富み、大槻文彦、那珂通世、小中村清矩等之に執筆したりき。當時又樋口戴廣の『共存雜誌』中村正直の『同人社文學雜誌』發刊せられ、續いて『扶桑雜誌』近事評論、『評論新聞』草莽雜誌等の政論誌、『穎才新誌』文明雜誌、『學庭志叢』花月新誌、『新文詩』等の詩文誌、其他家庭、宗教、教育、農業、醫事等百般の専門雜誌、『圓々珍聞』の如き滑稽諷刺の雜誌、都鄙共に盛に發刊せられ、新聞紙と相並んで新文明の宣傳に勉めぬ。明治十年末の現在數を見るに、新聞雜誌總計百五十六種、發賣部數一年間三三、二八七、五二九の多きに達せり。

斯くの如きは明治十年以前に於ける泰西思想傳播の大勢なりき。然れども此の滔天の潮勢を見て直ちに當時之か前途を邁る一の抵抗だも無かりきと考ふるは速断に過ぎたり。天下の事、見來れば常に相反の二要素を含み、百般の現象一として其の反面を有せざるなし。革新の活動は守舊の反動を伴ひ、青春の進取は老聾の退嬰と相乖く。思潮革新の事、豈抵抗なくして成就すべけんや。所謂新舊思潮は到る處に衝突し、政治の大本より衣食の末に至るまで、所として此顯象を見さ

るはなし。社會革新家が口を極めて舊弊打破を説くは、是れ的なきに發する矢に非ず、新聞雜誌の疾呼宣傳するは、常に新主義を顯さんとするのみならず、合せて舊主義を破らんとするなり。而も此等の革新運動は總ての妨害を排して直前邁往するなりき。

かくて新文明の物質界を照す事、維新以降今に到るまで、こゝに十年、國民の物質欲に對する要求は漸く満足せられしかば、自然の順序として精神界の缺陷に向つて其欲求を感ずるに至りぬ。政治、經濟の施設、住居、衣食の改良に惟れ日も足らざりし國民は、茲に漸く小康を得しかば、顧みて靈界の新主義を翹望し初めたり。倫理、宗教より始めて美術文學に至る迄、革新の曙光漸く東天を染めなしぬ。福澤翁か舊來の儒教道德及武士道々徳の固陋を打破してより、泰西の倫理說漸く入り來り、或は自主自疆の精神に富む、『西國立志編』、『西洋品行論』となり、或は君父に對する義務よりも自己に對する義務を先にせる、『勸善訓蒙』、『智氏家訓等』等となりぬ。宗教に在りては、從來の天主教以外、耶蘇教俄然として勃興し、特に此氣運に鞭つて起ちし新島襄は、基督教を以て國民を感化するに非ずんば新文明の眞精神を傳ふる能



はずと信じ、八年同志社を京都に建て、基督教的教育の大道場を開きたり。更に他の一方に於ては、英佛獨の各國語學新興の結果、從來蘭語及蘭文典とのみ比較せられたりし我國語は、新たに此等各國語文典と比較して其得失を論せらるゝに至り、後年活潑なる國語問題論争の端緒を茲に發しぬ。既に文字に關しては漢字全廢說先づ起りて、六年『日々』に新字製造を説く者、漢字全廢の準備として漢字交り文を普通用とすべきを説く者あり。七年『明六雜誌』出づるや、西周卒先して羅馬字採用説を出し、假字説之に對して起り、以て後來羅馬字會かなのくわい等の基をなせり。續いて文體に關し、漢文乃至耳遠き從來の文章を廢して言文一致體を取るべしといふ説起り、『日々』の福地は其階段として先づ力めて口語を交へたる平易の文を作るべきを論じぬ。氣運は益々進みて今や藝術に及びぬ。五年文部省が埃國博覽會に高橋由一の洋畫を出品せし頃より洋畫の新芽斯壇に萌し、九年工部大學校内に美術學校を置き、洋人を聘して繪畫、彫刻、裝飾術等を教授せしめ、音樂、演戲に關しては、『明六雜誌』等に國樂振興、演劇改良を説く者あり、『日々』の福地亦脚本本院本の改良及芝居見物人の改善を論じ、以て後年音樂振興、演劇改良の運動の先驅をなせり。

若し夫れ新文學の發達に至りては精神界活動の中、最非實用的なるものなれば、功利主義を第一とせる明治新文明に遇せらるゝ事最薄く、十年以前に於ける斯界の曙光甚微弱なりき。然れども其間又一道の潛勢、後日の盛運を含む者なきに非ず。其の詳細は次章を俟つて述ふる所あるべし。

精神界に於ける新文明の活動は斯くして漸く其の端緒を開きぬ。此氣運に乗じて起り此光景を前驅として進める我新文學は果して如何なる者なりしか。吾人未だ其の面影に接せずと雖、今や暗黒の裡一點の光を示したる十年以後の翻譯文學は即新文學の大光明に到達すべき前提に非ざるか。吾人は將に暗黒の文學界を去らんとす。而も此暗黒裡何等の傳ふべき文學なきか。吾人をして暫く回顧せしめよ。

既に述べし如く、明治十年以前は文學界の暗黒時代なり。文運地に落ちて新光未起らず、喘々焉として餘息を存する者は唯憐れむべき舊文學の殘骸なりき。換言すれば純然たる江戸文學の繼承にして、其の明治文學に於ける位置は、恰も殘燈夜の暗黒を守りし者漸次曉の新光に没し去るか如き者なれば、嚴正なる意義



に於て、或は明治文學と稱し難かるべし。然れども文學は固時勢の反映人情の鏡なれば、當代人文の狀態は、寫して此等繼承文學の中に存する事言を俟たず。明治初年の時勢人情、一部たりとも寫し出されたりとすれば、假令其形式手法舊文學の殘骸なりと雖、其技巧拙劣内容貧少なりと雖、はた其光燭甚微茫たりと雖、明治文學を叙するに方り、必しも棄つべきに非ず。況んや文學の發達は一朝一夕の故に非ず、新文學の樹立は常に舊文學の土壤の上にせられざるべからざるをや。

### 第三節 前代繼承の文學

江戸文學の繁榮は本邦文學史に於ける空前の壯觀なり。其の發達の著大、其の種類之富、賸實に百世の瞻仰を値する者ありき。然れども大御所の榮華一度去つて幕府衰運に向ひ、邊境警を傳へて世漸く亂れんとするに方りては、文學の發展復往時の如くならず。和歌は絶代の巨匠景樹遊いてより、其門流八田知紀、熊谷直好等之を繼ぐと雖、技倆固より師翁に接踵すべくもあらず。唯從來の精力によりて桂園一派を率ゐるのみ。發句は天明の俳傑去つてより、翠木の俗氣墮落の端を開

江戸文學の  
足跡

き、天保の宗匠梅室、蒼虬、鳳朗に至りて其極に達し、崇拜者模倣者全國に普きに係はらず、詩趣蕩然として地を拂ふ。淨瑠璃は精華、出雲、半三に落ちて、文耕堂以後注目すべきなく、脚本には新七、二三治、治助、如樂等在りと雖、五瀬、南北の餘睡に過ぎず。小説に至りては、天才馬琴遊いてより片々たる戯作者の世となり、春水、一九の末輩、鄙俚なる人情物淺薄なる滑稽本を作りて、偏に先人の殘肴に甘んず。其他俳文、狂歌、狂句等一として散り過ぎの花、あはれなる衰へを示さざるなく、百般の文學悉く模倣翻案の弊に陥り、量に於て著しき衰退を見すと雖、質に於ては日に月に俗惡の度を増し、其形勢相傳へて明治の初頭に及べり。

維新以來十年頃に至る我文壇を支配せる文學者は、實に上述の如き文學の繼承者なりき。當に十年頃までのみならず、種類によりては二十年前後、文學思想革新の運動起るに至るまで、依然として舊態を改めざる者あり。然れども之等繼承文學は、何れも明治新文學の基礎をなす者にして、一代の氣運を捲き起したる明治の新文學者は、多くは一度繼承文學を味ひ來りし者なるを以て、新文學に入るに先だち暫く之等繼承の文學界を觀察せん。



當代の和歌壇は景樹の末流、即桂園派の獨占する所なりき。景樹天稟の歌才を以て京師に蟠踞し、香川家に入りて勢力を堂上に伸ふるや、從來歌學の宗たりし冷泉二條の諸家を壓倒して、斯界の主權を握りしかば、桂園の歌風遂に當代瞻仰の中心となりき。曩きに元祿の世、海内の文章布衣に落ちて、歌道亦地下の手に歸し、縣居翁起りて主權一度江戸に移りしが、茲に至りて歌壇の中心復び京都に返りぬ。明治の初め、都を東京に遷さるゝに方り、此形勢宮庭と共に東遷し、八田知純の門に出でし高崎正風御歌所長となるに及びて、桂園の流風復動かすべからざるに至りぬ。御歌所は明治年間唯一の帝室文學の府にして、數名の寄人、當代歌人の中より任命せられ、毎月一回宮中御歌會の行事に従ふ。正月の御會は之を歌御會始と稱し、明治二年以來古例を復活して之を行ひ、五年より百官有司をして詠進せしめ、七年より一般臣民にも詠進せしむ。而して此派の詠歌は概ね景樹の冷杯を汲める者なれば、思想狹隘、聲調纖弱、到底新時代の文學たる能はざる者なり。斯くて二十八九年文運興隆期に方り、所謂新派和歌が、地下より起りて在來の風調を一新し、歌壇の中心地下に移るに至りしまで、歌界は大口綱三、小出燦等御歌所一輩の製作に

高崎正風

よりて代表せられ、舊思想舊形式の徒に繰返さるゝを見るのみなりき。

御歌所一派が當時歌界の代表者たると同じ意義に於て、俳界の代表者は老鼠堂永機と春秋庵幹雄となり。天保以來發句の俗惡、文學的作品たる品格を失ひ、遂には無學の閑人が道樂の一種として、碁、將碁と同一視せられ、點取の方法變じては賭博に近き一種の技術となり、之を教ふる宗匠なる者は、所謂點料を以て衣食する營業となりたりぬ。永機、幹雄等は即當時宗匠商賈を營める者の領袖に外ならず。

老鼠堂永機

永機は其角の傳統を引ける者なれども、作る所多く瀟洒の趣あらん事を勉め、其宗徒は一般無學の平民より最上流の社會に至るまで所有階級に存し、其勢力地方に於てよりも寧ろ東京に於て大なり。幹雄は白雄の後にして、作る處多くは豪放ならん事を求め、宗徒は全國の平民社會に普く、其勢力は寧ろ地方に於て大なり。以上二人の外、尙其角堂機一（永機門）、江南居松江（幹雄門）、雪中庵雀志、京都の花の本聽秋等各々多少の勢力あり。然れども俳諧の精神を沒了して徒に殘骸を抱くに至つては、何れ劣る所なく、斯界革新は後來二十五年の頃に於ける新派の運動に俟たざるへからざりき。

春秋庵幹雄



漢詩漢文に就きては多く語るべき者なし。唯舊時代の餘流漢詩人漢文家の存する者少からず。二十四五年頃までは強弩の末勢、尙宿儒其人に乏しからざりき。詩人には小野湖山、岡本黄石、向山黃村、大沼枕山、森春濤、鮎松塘等あり。漢文家には川田鑿江、重野成齋、島田重禮、安井息軒、信夫恕軒等あり。明治五六年の交、新聞雜誌競ひ起るや、彼等の詩文往々採録せられ、春濤の如きは『新文詩』と稱する雜誌を發行するに至り、次て成島柳北『花月新誌』を出し、服部誠一『東京新誌』を出して盛に戲詩戲文を作り且、服部の『東京繁昌記』を著し、頃漢文の繁昌記頻りに行はれたり。然れども漢詩漢文は到底新時代の文學たる資格なき者なれば、此等作家百年の後は畢竟永久文壇を辭し去るべき運命を荷ふ者なり。

和文は春海、千蔭の擬古文ありて以來、典雅流麗の筆に接せざる事茲に久しく、維新當時の國學者其人に乏しからざりしも、遂に一の文章家を見ざりき。明治初年の散文家として擧ぐべき者を求むれば、夫新聞文學者か。『日々』の櫻海、朝野の柳北の二人は當代記者の冠冕にして、前者は清新瑰麗を以て勝り、後者は奇拔輕妙を以て稱せらる。其他岡本武雄、藤田鳴鶴、矢野龍溪等皆十年前後の記者として盛名ありき。

而して彼等の散文は多く漢文の素養に出で、中には純然たる漢文直譯體なる者あり。此點に於ては之等も亦繼承の文學たるを免れず。されど其思想は多少新潮に浴し、後來明治の普通文の胚胎する所となりき。

繼承の文學中最注意すべきは蓋し戲作者流の作ならん。之等は其の種類、其作意、其文體、共に文化、文政以後の作者の餘流を汲める事論を俟たず。先づ全體に通ずる著しき風潮は、いふまでもなく勸善懲惡の主義にして、馬琴一度此大旆を擁してより、勸懲の一語は端なく當時の片々たる戲作を飾る美名となり、文學の本質の何たるを解せざる彼等無學の戲作者輩が、自己の作物を無用有害なりと非難せらるゝを忌み、且つ藝に寛政、天保の兩度、當局の爲政者が壞風亂俗の罪を以て戲作者を罰せし事件に鑒み、又維新後教部省の訓令に考へ、争うて勸懲の美名を偷み、自ら借して童蒙婦女に對する教訓を寓すと稱し、以て鄙俚猥雜、讀者に媚ふるを以て専らとせる拙作を被ひ飾らんとせり。次に其結構は目先の變化を以て第一條件となし、脚色の統一人物の性格を藐視して、支離滅裂、一卷の趣向の尋ぬべき無き者、滔々皆然り。次に又作中の人物は、概ね善惡二種の類型にして、善人は所有善徳の標



化、悪人は所有悪徳の化身たるか如く、其の英雄或は勇士、往々非凡の智謀力量を有し、多くは人間界を超絶す。而して此等種々の戯作を大體に就きて分類すれば、馬琴に出でたる讀み本、春水に出でたる人情本、種彦に出でたる草双紙、一九に出でたる滑稽本、及鶴屋南北等に出でたる脚本の五種なり。其文體は各其宗とする作者の舊套を襲へり。

維新の初、戯作の發兌は舊慣により、毎年正月と盆との二期に於てせり。當時の出版物には維新以前より發行し來れる長編の續き物も少からず、兵馬倭寇の間、微々たるながらも戯作の出版を絶たざりき。先づ讀本、草冊子の類にては、種彦の『白鷺物語』、『八犬傳』、『犬適草子』、『萬草應賀』、『釋迦八相倭文庫』、『三世春水の』、『北雪美談』、『時代加賀實』、『雜談雨夜之質庫』、『種彦の』、『室町源氏胡蝶卷』、『春水の』、『新編九尾傳』、『應賀の』、『蟲類大談論』、『諸藝畑水練』、『近世阿波禮幕』、『岳亭知足軒合作』、『俊傑神稻水滸傳』等あり。其他同時の作者には鶴亭秀賀、柳水亭、種清山々、亭有人、條野傳平、笠々亭仙果、梅亭金鷲、假名垣魯文等あり。次に脚本にては三世如巢、三世如樂、没して他の座附作者皆言ふに足らず、二世河竹新七、即吉村默阿彌、獨り芝居作者の垣場を占めたり。然れども之等の

作は畢竟前代の遺物にして所謂様に依りて胡蘆を畫く者のみ、新時代に觸接する何等の交渉を有するに非ず。唯夫れ魯文と默阿彌とは繼承作者の身を以て當代の人氣を集めたりし者なれば、彼等二人を擧て繼承時代戯作者の代表者たらしめ少しく之に就て當時の作風を窺はん。

假名垣魯文は江戸の人、少にして花笠魯介、文京の門に入り、『政談青砥碑』を處女作として數多の戯作あり、萬延元年『滑稽富士詣』を出すに及びて文名世に布き、年明治に入るに及び、『西洋膝栗毛』、『安愚樂鍋』、『胡瓜圖解』等を續出して盛名を馳せたり。『西洋膝栗毛』は其名の示す如く、一九の名作に倣ひて西洋旅行の滑稽を描きし者にして、全部十五編、明治三年より五年に亘りて出版せられ、『胡瓜圖解』は福澤翁の『窮理圖解』を翻案して、所謂天地の道理を茶にしたる滑稽物なり、四年春出づ。

『安愚樂鍋』は半開化の俗衆が牛屋に鍋を圍んで喋々論議する趣向にて、所謂當世の穿ちなり、同年暮出づ。此三者は魯文をして明治初年の戯作界に嶄然頭角を抜かしめし滑稽本にして、他の作者等が文章も趣向も材料も共に舊套を脱する能はざるに際し、在來の手法を以て新時代の材料を理し、以て時勢を諷する筆致の輕妙な



るは、暗黒なる文學界に於て聊か珍とするに足る。勿論應賀整『新文鬼談』日本女教師』『異作異物各覽會』等、材を維新後に取りし短篇をものせりと雖、固より魯文に比すへきに非ず。彼の作には尙『百貨物産西洋器會』『大洋新話』『世界都路』等あり。しかも彼の作中最世に持て囃されて明治の一九三馬と過稱せらるゝに至りし者は、言ふまでもなく『西洋藤栗毛』なり。

此作の脚色は、東京神田の蕩兒彌次郎兵衛、北八の二人が、英國龍動に渡航せんとする横濱の豪商大腹屋に伴はれて飛脚船に乗り込み、以來海上港泊に於て所有失敗滑稽を盡しつゝ、英國へ渡る趣を綴り、所謂此節の西洋ばやりへつけこんで目先の變つた趣向を凝し、者にして、當時魯文世潮につれて所謂福澤本を讀み、西洋旅行の大體を知りし上、岡文紀の翻譯書などを見、尙友武富田砂燕が巴里博覽會見物の實話を聞き、之等を種として編み出せるなり。げに彼が小説家としての技倆は暫く之を措くも、其機智の縱横なる、着筆の奇警なる、時勢社の作者として巧妙を極めたりといふべし。吾人は之を讀んで新舊思潮の至る所に衝突するを見、而も其衝突や皮相に止まり淺薄を極めたる時世の適切に描かれたるを感じぬ。所謂新

西洋藤栗毛

潮流は、方今開化一時に進み、余輩僥倖に學ばざる子曰の迂遠を去り、經驗窮理の洋風に傾き、市街の兒童等に至るまで芥子坊主の支那頭を殘截の歐羅巴流に一變し、孔氏の遺書はベケにして、英、佛の横文エビシ、四百餘州は何のその萬國世界五大洲、天地の理を知る開端に至るは、めでたき御代に新玉の春を待ち得たる心地になん。而して廢藩置縣知事の公達子も無僕獨歩に世間を見知り、歸農の扶持は飛鳥川、水に流して商法開業、父母在せども遠く遊び、艦砲一發三千里、且に道を聴くとも夕に死するを可なりとせず。牛肉を食しビールを飲み、體を壯健にして壽を保ち、利を得て國を富ますを以て今日の報恩とす。藤栗毛十一編序なる皮相文明の潮流なり。此新潮に浴せし半可の西洋通が、丁番の舊弊頑固を嘲り、因循姑息を罵り、一切の舊慣舊俗を笑倒せし情狀、又は俄かに絢爛たる洋風の事物に逢着せる一般俗衆が、驚愕し誤解し歎服し眩倒せし事態、はた淺薄なる滑稽鄙俚なる諧謔に心を遣りし有様、髣髴として思ひ浮べらる。其他彌次、北八が頻りに生咬りの漢語を使ひ、神道を辨じ、窮理を云々するは、皆是時代の反映にして、特に極力英國の富強を説き、旅先を英京に置き、通事の言語を英語に取りしなど、當時英國心酔の事情を表して餘



あり。此作に於て人物の性格一篇の理想などを探らんは愚の極なれども、諷刺の意は明かに認めらる。蓋し魯文自ら文明開化の當世人を以て任じ、所謂舊弊を嘲笑して開明の福音を童幼に傳へんとせる者の如し。然れども其根本性質を擧げ來れば、依然たる舊型にして、作者の弄する滑稽や無識に出で、痴態に出で、酒色に出で、其趣淺薄にして變化なく、其旨陋卑にして理想なく、而も之を叙するに地口語呂等、所有言語上の遊戯を盡せる對話を以てす。正に是れ一九三馬の殘肴冷杯にして、江戸作者の末輩の得意とする手法に非ずや。げに此作は曾に魯文が戯作の代表たるのみならず、明治初年の繼承文學に於ける好箇の代表なりき。

黙阿彌は五代目鶴屋南北の門人にして、通稱を吉村新七といひ、俳名を其水といふ。芝居作者となりて河竹新七二世となり、後改めて古河黙阿彌と稱す。好んで世話物をもつし、俳優市川小團治と結びて舊幕時代下層社會の世態人情を活現し、夙に才名を江湖に馳せたり。而して當時彼が作りし世話物は、概盜俠を主題とせるを以て世に白浪作者の目ありき。彼が一代の傑作として賞賛の聲噴きたる『村井長庵巧破傘』の如き、即當時の作風を代表する者といふべし。此の狂言は又『勘善』

古河黙阿彌

懲惡硯機關』と稱し、八幕十一場より成り、文久二年小團治等が守田座に興行せしを始として、年、明治に入りても尙盛に行はれたり。麴町の町密村井長庵が其妹婿、百姓重兵衛を殺害して其娘を吉原に賣りし身の代金を奪ひ、而も其罪を浪人藤掛に嫁して之を死せしめしを始め、或は人をして妹を暗殺せしめ、或は人を欺きて財を奪ふ等、悪行至らざる所なく、而も巧に世の耳目を晦まし、天網疎にして漏さず、惡事露顯して判庭に伏罪し、遂に惡は亡び善は榮む、目出たく收まるを以て一篇の筋となす。結構布置例によりて巧妙、舞臺面の變化多き、勸懲旨意の明瞭なる等、舊劇の長所概之に具はる。然れども凡近なる勸懲の外、何物をも吾人に教ふるなき事件の發展常に偶然的關係に出づる、人殺其他に於て慘酷無道の所行を舞臺上に敢てする等、舊劇の短所亦概之を備ふ。斯くの如きは獨り此篇に止るに非ず、白波作者時代の彼が世話物皆此型に出づ。而して彼の勸懲主義は維新以來益甚しく、惡漢の主人公たる事漸く減じ、よし盜賊を以て主人公となすとも、必改心の一條を加へ、以て諷刺の意を寓し、且其の各部分に於ける寫實的分子漸く加はり、超自然の事實成るべく避けられ、同時に江戸時代を寫せる世話物以外、新たに明治の世話物



を創作せり。例へば十三年の作なる『霜夜鐘十字辻』、『木間星箱根鹿笛』、十四年の『島衛月白浪』、十五年の『偽甲當世簪』、十七年の『滿二十年息子鑑』、十八年の『水天宮利生深川』、十九年の『西洋噺日本寫繪』、『戀暗鶴飼燦』等の如き、皆維新以後の人物事件を材料とせる者にして、以て其頃に於ける黙阿彌の作風を窺ふに足る。

明治十八年前後までの黙阿彌作の狂言は總數數十種に上るべく、二十年間東京梨園に於ける作者の隨一として最勢力あり。得意の世話物の外、時代物にも筆を染め、其熟練なる舞臺上の智識と豊富なる結構布置の才と、老巧なる人情描寫の筆力とを以て永く斯壇の光明たりき。蓋し黙阿彌固と謹嚴篤實の人、人情を重んじ義理を尚び、舊道徳が鼓吹する諸の美德を具へたり。故に其作物は構想穩健、描寫自然にして、固より奇抜なる者、深刻なる者、俊爽なる者、なき代りに、平人の人情平生の生活粗、發揮せられたり。彼が想隨となれる善惡流行因果應報の理法は、彼自身の閱歷と觀察とより自ら悟入せる者にして、決して傳説的繼承の思想に非ず。故に此理法は彼に取りては理想或は信念たるに非ずして、むしろ現實の事實なり。理想的分子と見るべきに非ずして、寫實的分子と見るべきなり。黙阿彌は從來の

脚本の概、荒唐無稽、理想的に非ず、寫實的に非ざる一種奇態の時代世話混合物なりし弊を一洗して、人情世態の真相を描寫せる新しき世話物を創始せし人は、た舊劇を刷新して掉尾の活動をなし、以て將に起らんとする新劇に移る一大段落の上に立てる斯壇の殿將として、長く傳へらるべきなり。

當時の劇場作者は尙、新水即守田勘彌、彦作、大阪の能進等二三知名の者なきに非ざりしも、固より以て黙阿彌に比ぶべきに非ず。然れども舊派の殿將は畢竟舊派の殿將に過ぎず。其作は以て舊知識の觀衆を教ふるに足るべきも、以て新時代の新人物の満足を買ふに足らず。舞臺効果に關する智識洵に企及すべからざる所あるも、人情を描いて未だ性情劇の片影を庶幾すべからざるなり。彼の世話物は二十五年春陽堂の發行にかゝる『狂言百種』に收めらる。不幸興業上の故障により中途續刊を廢し、八卷十一種を出すに止れり。

其他舊文學の中には尙講談の一種あり。其末路を代表する名人は、三遊亭圓朝にして、『怪談牡丹燈籠』等最世に持て囃されたり。釘俚補綴、些の創意なしと雖、亦通俗文學として繼承時代の文學たるに足るへし。



繼承時代の小説脚本の粹は魯文、默阿彌の二人に盡く。然れども社會の進運は一日も止らず。文學の暗黒時代はしかく長へなるへからず。戲作の風潮も十年前後に及びては漸く變調を來さんとす。當時魯文の滑稽物に對し、實録物を作りて一方に勢力ありし松村春輔の作の如きは、材を維新革命及其際に於ける勤王佐幕の名士に取りしのみにて、守田座新富座の演劇に間々維新事件を仕組めると同じく、畢竟片々たる實際物に過ぎずと雖、其作中の人物は、大に前代實録物乃至一般時代物の人物と其性質を異にし、英雄豪傑といふとも、超凡の智勇辯力を備へたる半神の性的の者ならずして、普通人間らしき偉人勇士として現はれ、漸々寫實的傾向を取るに至れり。八九年頃に出てし『復古夢物語』『近世櫻田紀聞』及『春雨文庫』等は、或は大老暗殺事件或は彰義隊、會津戦争等を材料とし、總て新時代の歴史小説の先驅たるべき者なり。同時に諷刺滑稽の側に於ても魯文に一步を進め、稍々深き意義を有するに至りき。服部誠一の『東京新繁昌記』(七年乃至九年發行)及之に類する幾多の繁昌記、同人の『東京新誌』(九年創刊)成島柳北の『花月新誌』(十年創刊)野村文夫の『圓々珍聞』(同等)の如きは、即此例にして、之等に現はれたる戲文は、勿論小

説に非されども、單なる滑稽諷刺の文學として之を魯文の作に比ぶる時は、魯文は開化と舊弊との不調和を描き、以て舊弊を嗤笑せる趣ありしが、之等に至りては頑固因循を諷刺するか如きは敢て奇ならずなり行き、却て開化を以て自任せる社會の一部に幾多の滑稽痴態を發見し、之を託き來りて皮相文明に眩惑せる社會を諷したりき。魯文の諷刺に比し幾分の深刻を加へたりといふべし。

此時に方りて、新聞紙の勃興するあり、記者の需要著しく増加せしかば、文筆の士争うて之に赴き、勢極まる所戲作者の吸收となり、爾來諸新聞戲作を載する者多かりき。之を續き物といふ。蓋し草双紙合巻物等に對する稱呼なり。明治六年魯文先づ『横濱毎日』に入り、八年高島藍泉三世種彦、九年染崎延房(二世春水)、相次で『平假名繪入』に赴き、十年梅亭金鷲『圓々』に入り、又條野傳平は五年『日々』を起し、魯文は八年『毎日』を去りて、『假名讀』を發刊し、各戲筆を紙上に揮ひしが、就中延房の續き物魯文の滑稽物、最婦幼の人氣を集めたり。之より草双紙合巻物の發兌漸く衰滅し十二三年頃に至るまで、各新聞の續き物は繼承戲作の殿として立ち、各種の繪入新聞起りて皆之を載せたり。作者には上述數人の外、古川魁菴、伊東專藏、須藤南翠、渡



邊義方等あり概人情本の系統を引ける物語風の小説をものしき。維新草創の際文藝の暗黒時代に於ける文學は大略上述の如し。一代の民衆が新舊二潮の間に翻弄せられて洋服に下駄、丁髷に洋傘、ズボン、マントルに帯刀の奇態を演じつゝありし際なれば其文學趣味の低劣俗悪なる事言を俟たず。作物の出づる事必しも少しとなさゞれども斯かる趣味によりて養はれたる文學の斯壇に於ける地位や憐むに堪へたり。魯文の滑稽物を謳歌せる讀者界の淺薄輕浮にして鄙俚猥雜、絶えて餘裕なく趣味なき事察するに餘あり。かゝる作物によりて代表せられたる當時の文學の陳腐俗悪なる事亦思ふべし。時は移りぬ。明治十年西南の亂あり。新政以來明治政府を喜ばず、新の制度を便とせず、反對黨不平派相結びて反亂を起す者所在相次さしが遂に疑りて西南の大謀反となりき。此は總ての内亂の中最大最終の者にして政治上の舊思想は是に於てか永久に掃蕩せられたり。西南役の文明史上に於ける意義は此戰爭が政治上の新舊思想最後の衝突にして之を契點として新思想の全く舊思想を壓倒し去りしに在り。爾來此潮流は延いて思想界及文藝界に入り、舊時代の文學思

想漸く謝して、明治の新文學思想漸く之に代らんとす。而して此文學思想革新に與りて最力ありし者は、即十年以後に於ける泰西文學の翻譯及び之に伴ふ西洋文學思想の傳來なりき。

## 第二章 新文學の先驅

### 第一節 翻譯文學

明治十二年頃に其萌芽を發せし翻譯文學の勃興は、當時の政治思想と離るべからざる關係を有する者にして、之等文學の主たる者は、民權説の流布と共に接踵輩出したる民間政論家が自由を唱へ代議政を説くに際し、此思想の由て來る泰西政治界の状態、及彼地政論家在野志士の生活を叙せる小説傳記等を讀んで多大の興味を感じ、直ちに其文才を驅りて之を翻譯したる歴史的政治的小説なりき。されば此時代の翻譯文學を説くに方りては、先づ此民權思想の興起を述べ、併せて其結果として生せる革命小説を記さざるべからず。

西南の叛亂平らき、政治界の舊思想屏息するや、時勢の進運は駿々として前往し、



民間の政治思想は一躍して從來新思想の中心たりし廟堂有司を超え、極端なる民権自由説となりて現はれ出でしかば、政治界の新舊思想の衝突は茲に一進化をなしたりき。抑も此思想の勃興は、本邦思想界空前の新現象にして、其の由て來る所は泰西政治思想、就中佛國十八世紀の思想家ルソー、ボルテール、モンテスキュー等の政治思想に在り。特にルソーの『民約論』は新思想を抱ける政治家及政論家に取りて天賚の福音の如く聞きなされ、遂に其首唱者の一人たる中江兆民居士の手に譯出せられて天下に布き、一世の風潮翕然として之に赴きぬ。是に於てか曩きに英國の功利思想を迎へて社會の實利實益に心身を傾倒したる國民は、茲に又新に佛國の自由思想を迎へて政體革新の根本的大問題に奮進しぬ。彼等の説く所全く民約論の主旨に出で、本邦立國の大本、民性の特質を究めず、國家の歴史當時の狀勢を悉くす事なく、ひたすら彼國に行はれし所を以て之を我邦に施さんとす。其の單純淺薄なる、寧ろ彼國政體の美に眩惑せる好奇の性情の發露といふべき者にして、正に明治初年に於ける物質的文明の盲目的吸收に對比すべき無謀の盲動なりき。然れども在野志士の思想か靡然として之に赴き、在朝の有志冠を桂けて

尙其主張を貫徹せんと勉めたりし所以の者は、徳川幕府が殆ど人權を無視せる極端なる貴族政治の下に三百年の抑壓を忍び來りし反動として、國民の枉屈一時に伸びんとせる者亦與りて大に力ありしなるべし。彼等が政府の失行を議し、言論の自由を説くや、筆に舌に縱橫辯難、危激を極めたりしかば、柳北、鏡麴等を始として律に觸れて禁獄せらるゝ者前後相繼げり。十三年に至り、此風潮全國に亘りて國會開設の請願各地に起り、大勢動かすへからざるに至りて憲法制定國會開設の大詔遂に煥發したりき。

文學は時勢の反映なり。かゝる時勢に際し、自由主義の革命小説の出でしは自然の數なり。十五六年の頃、政界の風雲頗る峻しきに方り、『繪入自由』、『繪入朝野』、『自由の燈』等の新聞雜誌を舞臺として現はれたる宮崎夢柳、小室案外堂等の小説は、此氣運を代表すべき者にして、『鬼歌々』、『夢戀々』、『自由の凱歌』、『西洋血潮の荒波』等は、佛國革命又は露國虛無黨の反亂等を材とせる西洋小説の翻案、抄譯、若くは演義に屬し、其他新作種々あれども、多くは自由民権に關する寓意小説なりき。然り、唯此主義に基ける寓意あるに過ぎず。泰西の文學思潮に觸れて新氣運を開くに至り



ては未だし。故に其文體趣向依然として草双紙の範圍を脱せず、文學としての價値亦従うて高からざるなり。

斯かる間に明治新文學の端緒となるべき翻譯文學は、同じく時勢の反映として他の一方に現はれたり。政論沸騰してより國民多く泰西政治界の狀態を想望し、民權自由の理想か普く行はるゝ泰西諸國、就中英佛に於ける政治家の生活を欽羨し、即之を描ける政治小説及歴史小説を耽讀して其渴望を醫しぬ。特に當時の政論家は概ね新聞記者にして、文筆の才あるか上に多少外國語の智識ある者なりしかば、政論奔走の傍、會々文學に慰藉を求めんとするや、本邦在來の文學乃至當時繼承作者の新作の如きは、到底彼等新教育を受け得ず多少高尚となりし文學的嗜好を満足する能はず。相率ひてリットン、ヂズレーリ等英國近代の歴史的政治的小説に赴き、遂に進んで之を翻譯を試むるに至れり。されば當時の翻譯文學は、文學者が文學として翻譯せし者ならず、宛然政論家の餘業たるの觀あり。然れども、一般國民をして之によりて英國文學の片影を覗ふを得しめ、以て後來文學思潮革新の因縁となり兼ねて萬邦の文學を吸收すべき端緒を開きしか如き歴史的意義決して

少からずとなす。今之を述ふるに方り、少しく泰西文學輸入の沿革を尋ねん。

泰西思想の傳來は夙く交通開始の古に起りしも、其純文學に觸接して影響の我文學に現はれしは、萬治二年の出版なる『伊曾保物語』を以て嚆矢となす。いふまでもなく『イソップ寓話』の翻譯にして、譯者傳らずと雖、御伽草子の系統を引ける假名草子一流の作なり。然れども、此物語の影響は、淺井了意、山岡元隣等が教訓物に少しく見ゆるのみにして甚著しからず。其後繼者として入り來る西洋文學亦不幸にして存せず。『伊曾保物語』は流星の如く現はれて流星の如く隠れぬ。爾來南蠻紅毛の書入り來る者概ね實學に關し、文學の方面甚僅少なりしか如く、平賀源内の作に見えたる二三洋語の如きも亦實學より來る。唯彼の遊谷子の『和莊兵衛』之より出でし馬琴の『夢想兵衛』の着想、及此二者の出所として特筆すべき鳩溪の『志道軒傳』巡國の條に至りては、莊子の寓言に擬し、在來の島巡りの趣向に基きし事勿論なりと雖、『ガリバー旅行記』に其の骨を得たる事も亦殆ど否むべからず。維新の當時開成所は洋學の淵藪たりしも、授くる所は未だ文學に及はず。此間強て文學を學ぶ者ありきとすれば、其は語學の材料として之を用ひしに過ぎず。然れども明治年



〔花柳春話〕

代泰西文學の萌芽は、畢竟語學研究の副産物にして、渡邊温の譯にかゝる『通俗伊蘇普物語』(六年—八年)の如きは亦斯かる因縁に成りしなるべし。外國文學の翻譯が常に『インツプ』を以て始まるは、此物語の平明にして童蒙に入り易く、古今東西に通すべき寓話なるに因るべしと雖、又是れ草創の際、粗雑なる讀者の頭腦が未だ風俗習慣の差によりて、興味に厚薄の差あるべき他國の小説詩歌等を味ふに足らざりしに由らずんばあらず。斯かる間に國民の讀書力漸く進み、教養ある人士は少しく文學を樂む餘裕を得、而も讀書眼の漸く高きや、在來の小説戲作に比べて西洋文學の優秀なるを認め、耽讀の餘之を譯出して西洋心酔の高潮に鞭ちたりき。乃ち知る、語學研究の材料としてのみ文學を讀む事既に止みて、文學其物を樂む健全なる讀者を生せし事を。明治十二年に出でたる『花柳春話』は、實に其陣頭に立ちし翻譯小説なりき。

『花柳春話』は織田純一郎がロイド・リットン(Loyd Lytton)の『アーネスト・マルトラース』を翻譯せし者にて、一篇漢文直譯體の文章、即當時新聞の論說に行はれし文體を以て成る。之を今日より見れば、思想の人を動かす者あるに非ず、譯文の巧妙なる者あるに非

ず、唯、其珍しきか故に當時多大の歡迎を以て社會に受取られ、世評一時噴々たりき。げに此小説はリットンの作物の本邦文壇に紹介せられし濫觴にして、兼て明治文壇に於ける翻譯小説の嚆矢なり。此點より見れば明かに新小説の先驅にして、一歩進めて言へば一般新文學の先驅と稱すべし。要するに『花柳春話』は文學としての價値よりも史上の位地を以て勝れる者とす。

爾來翻譯小説連りに行はれぬ。關直彦の『春鶯囀』、藤田鳴鶴の『繁思談』、牛山鶴堂の『梅香餘薫』、尾崎學堂の『經世偉勳』、服部誠一の『二十世紀』、井上勲の『海底旅行』、『月世界旅行』、『狐の裁判』、坪内雄藏の『慨世士傳』等は其最著名なる者にして、就中『繁思談』、『慨世士傳』等はリットンの原作『春鶯囀』はテスレリーの原作を取り、皆歴史小説を選べり。又『海底旅行』、『月世界旅行』等は所謂科學小説にして、學術上の事實を小説に寓せる者、小説としての價値は問はずして知るべし。翻譯の文體は概ね『花柳春話』に類するも、十八九年頃の作に至りて漸く和らぎそめぬ。然れども中には往々修辭に於て缺けたる者あり。文學としての形式を失へり。井上の譯書の如きは、所謂直譯に過ぎざりき。



翻譯小説の興隆は疑もなく新思潮の賚賜なりき。然れども、當時の新思潮は尙粗笨生硬にして十分に消化せられず。入る所皮相に止まりて深く内部性命に及ぶ事能はず。故に其讀む所解する所は、概ね歴史小説、政治小説、科學小説等、多少實際的傾向を有する者の中極めて平易なる者に限られ、同種類の者と雖、思想界の深き消息に觸るゝは、未だ其趣味を感受するに至らざりき。況や人情世態の微妙なる描寫を試み、心的生活の精細なる解剖を試みたる者に於てをや。當時翻譯せられし西洋小説が、悉く比較的單純なる歴史小説等なりしは、即ち主として之に由る。加之、江戸時代傳來の傳奇的小説に慣れたる眼は、先づ其類例を歴史小説等に求め他に先だちて一度之に就かんとするする傾向あり。會て此種小説の持つて囁さるゝを致せり。

此時代の翻譯小説は主としてリットンの原作を取りしが爾來二十年前後に亘り英譯より重譯せられたるユーゴ、ゾラ、トルストイ等あり、遂に末松青萍の「谷間の姫百合」に至る。此書はベルサクレールの「ドラソルン」を譯せる者にて、二十一年の版行にかゝり、政論文學者の筆に成りし翻譯小説の花々しき殿をなせり。翻譯小説も此頃

谷間の姫百合

谷間の姫百合

に至りては既に寫實的、心理的の者を生じ、此作の如き、現に然りと雖譯者の性質より見、全體の風趣より論ずれば、年代の次期に入れるに係らず、之を當期の産物とすべきなり。

翻譯文學は、小説の外尙院本と詩歌とあり。先づ劇には、十六年坪内逍遙遊人雄藏の「セークスピア」を譯せる「該撒奇談」あり。詩には、十五年外山、山等の「テニソニック」あり。カムベル、グレイ、ロング、フエロー等を譯せる「新體詩鈔」あり。然れども是等は皆後章、更に説くべき機會あるを以て茲には唯、其名を擧ぐるに止め、顧みて翻譯文學を通觀するに、曩に小説に就て述べたりし諸件、多くは詩歌に附いても言はるべく、概して思想淺薄文章粗笨の誹りを免れず。且當時學習せし外國語は主として英語なりしを以て、翻譯は皆英米の原作若しくは英譯の諸文學なりき。

## 第二節 政治小説

翻譯小説は淺薄粗笨なりき。然れども在來の戲作に比すれば尙幾分の清新と深遠とあり。文壇之を味ひては、復彼の卑野なる戲作を顧みんとはせず。加ふる



に、哲學、科學漸く開けて思想界の深さと廣さと愈々其度を増し、語學研究益々進みて泰西文學の智識愈々民間に弘布せしかば、曩きに西洋小説を耽讀し翻譯したる政論文學者の輩、進んで筆を創作に着け、嘗て彼等か翻譯せし原作の作家か爲し、所の者を以て、直に之を身に行はんとせり。故に其創作は言ふまでもなく政治小説若しくは歴史的な政治小説なり。要するに翻譯小説と政治小説とは、其發達の原因を同うする二様の結果なりといふべし。

明治十七年、『報知』社の政論家藤田鳴鶴作る所の『文明東漸史』は、恐らく此種の創作の嚆矢なるべし。筆を米艦來航に起して泰西文明の極東帝國に傳はりし始末を叙し、貫くに高野長英渡邊華山の傳記を以てし、交ふるに幾多義人烈士の美談を以てしたる者にして、或は史傳と見るべく、或は文明史論とも見るべきも、其性の近きによりて名くべくんは即一個の政治小説なり。文章は例の如く漢文直譯體なり。此書出て、より政治小説の創作甚多かりしが、就中柴東海散士が『佳人の奇遇』、『世路日記』、矢野龍溪が『經國美談』、末廣鏡腸が『雪中梅』、『花間鶯』、須藤南翠の『綠箋談』、『新粧の佳人』等、最有名なり。『佳人の奇遇』と『經國美談』とは共に『文明東漸史』と同じく歴

文明東漸史

佳人の奇遇

史的な政治小説にして、而も一層史傳に遠くして小説に近く、全然政治小説の部に屬すべき者、『雪中梅』、『新粧の佳人』等に至りては、純空想の政治小説なり。

『佳人の奇遇』は世界を舞臺として近代歴史上の事件を網羅し、亡國の辛酸を嘗めたる國民に滿腔の同情を表して其心事を描出せる者にて、維新の際、亡國の悲運を見たりし會津の遺臣東海散士が、東西に歴遊して到る處亡國の跡を弔ひ、遺民の志士に交り、北米合衆國の獨立と自由と隆盛とを目にして今昔の感に堪へず、乃ち無量の感慨を吐露して他年の報復を計るに至る顛末を叙するを以て大體の脚色となす。主人公は勿論東海の遊子にして配するに愛蘭の貴女幽蘭女史を以てし、之を中心として明國、西班牙、波蘭、匈牙利、土耳其、埃及等、普く亡國の志士仁人を網羅せり。文章は亦漢文直譯體を取る。次に『經國美談』は詳しくは『齊武名士』の割書を冠し、往古希臘の各邦併び立て覇を争ひし時、齊武の名士エバミノンダスが、同ベロビダスと協力して一時國威の全盛を致せし史上の美談を取り、演義敷延して一編の小説に仕組める者なり。文章は前者に比すれば一脈古文の趣を交へ、馬琴の讀み本等の體に倣ひて流暢和易の氣あり。挿入せる歌詞の如きは七五調の和文にて

經國美談



ものせよ。此二書は當時の讀書界特に青年の間に多大の讚美を以て迎へられ、中にも後者は明治年間文學上の著作中最廣く讀まれし者の一にして作中の主人公は一部青年政客の理想的人物とせられき。

『雪中梅』と『花間鶯』とは、上述二者の傳奇的なるに比すれば、遂に寫實的分子に富み、多少當時の政界を寫さんと試みたる者なれども、其文壇に於ける勢力は遂に之に劣れり。『新粧の佳人』は當時歐化熱及政治熱の最高潮を表せる者にして、荒唐突飛の弊ありと雖、時勢の一面を反映するに足る。其他政論文學者及新聞小説家の筆を政治小説に染むる者甚多かりきと雖、概ね鉄腸南翠の亞流に過ぎざるを以て、茲に其作例を擧ぐるを省き、翻つて當時の政治小説其物の價值に言及ばん。

一括して言へば、彼等作家は、政治小説其物に對する觀念に於て、根本的の誤謬を懷けり。彼等は政界の真相を窺ひ、社會の表面に現はるゝ百般の政治活動の依て起る處の政治家の心理、政治界の秘密を描かんとはせず。新聞の雜報にも見ゆる如き皮相の事實を羅列し、演說公會等の外、何等の寫し出でし事なく、作中の政治家は、皆行動を缺き、唯、其意見を演說して喝采を博するを以て能事となし、而も其演說

たるや、概ね作者自身の政論を發表するに止まりき。換言すれば政治の舞臺を見て其の樂屋を察せず、小説の本領を没して自己政論の發表の方便にせしなり。斯く其の着眼と目的とに於て既に根本的の誤謬あり。加ふるに技術の點に於ても、脚色は千篇一律、意匠の變化殆ど空しく、要するに貧書生が立身出世の夢物語に過ぎず。之を以て高く標置して政治小説と稱するは頗る當を失ふ。且其人物も、性格偉大、欽仰すべき者に非ずして、屑々たる小才子、世渡上手の利巧者にして、當時の批評家の所謂「政治社會の丹治郎」に外ならず。而して之を叙せる文章、修辭の技巧に至りては、其缺陷の最大なる者にして、全然文學としての形式を缺けるあり。

斯くの如きは、獨り『雪中梅』以下の作のみならず、『文明東漸史』以來此期の創作に通有する缺點なり。思ふに政治小説は明治新文學の先驅にして、當時尙草創の際に在り、且其作者概ね専門文學者に非ず、所謂政論家發憤の餘に成りし者なれば、彼等に向つて備れるを求むるは或は酷ならん。むしろ却て最善き時勢の反映を此間に見るべきなり。よし其の反映は單に皮相に止まるを憾とすべきも、尙彼等が唯一の價值と稱すべし。



文壇は斯かる状態を以て明治二十年前後に及べり。此時に方り新文學の萌芽は、漸く葉を開き、蕾を孕み、文界革新の機運正に動き、政治小説は其絢爛の華彩に遇ひて忽ち其光を失ひぬ。今や進んで新文學に論じ入らんとするに方り、顧みて新舊二潮流の消長を追跡すれば、翻譯文學の發生以來、文壇に於ける新潮漸く勢力を増し、繼承の文學は日に月に衰へて復十年以前の如くならず。作家は年々物故する者あるのみにて、之を繼ぎ之に代る者絶て無く、追々作家と作物とを減じつゝあり。唯條野探菊(傳平)前田香雪、三木愛花等數人、新聞雜誌に據りて僅に戯作の末勢を維持するを見るのみ。而して前期以來漸く發展したる新聞紙は、西南戦争の刺撃によりて一大進歩をなし、益々此潮勢を助けぬ。所謂五大新聞の外、十五年には福澤諭吉『時事新報』を創刊し、其他各地發刊比年相繼ぎ、記者の輩出亦頻りに『報知』の龍溪、鳴鶴、『朝野』の鉄腸等、往年の櫻痴、柳北の後を襲ぎ、政論と小説との兩方面に向つて銜々の名を馳せ、就中龍溪の文雅馴流暢、論議精細、最當代に喜はれたり。福澤諭吉亦居然たる記者にして、其文章平易暢達、第一章に詳述せし特色を發揮して益々老練の境に進み、常に輿衆に先だてる豫言的言論は、直ちに『時事』の聲價を江湖に布き

ぬ。福澤は獨り自己の新聞に於て成功せしのみならず、三田の先生として慶應義塾に養成せし幾多の秀才は、夙に新聞事業に従事して、文名既に世に高き者少からず。鳴鶴、龍溪、鉄腸、學堂等、此時代の翻譯文學政治小説の作家は概ね之に屬し、二十年以前の文壇は恰も福翁門下の掌握する所なるか如き觀あり。世に稱して三田派文士といへり。文壇の新潮は、此等記者及其新聞の鼓吹によりて益々社會に擴かりぬ。

終りに臨みて一言すべきは、當時隆々の勢ありし基督教の我文學に對する關係なり。明治の初切支丹邪宗門の禁、何時となく解け、爾來基督教は西洋心酔の思潮に乗じて天下に瀰漫し、十七八年の交、時の政府の極端なる獎勵の下に、英米の言語風俗を學びし時に至りては、期年ならずして全國到る所會堂説教場を見、青年男女到る所聖書を弄び、讚美歌を唱ひ、斯教の勢力將に天下を風靡せんとするに及べり。斯かる精神界の大現象を見ん者は、直ちに其が當時の文學に及ぼせる影響に想ひ到るべし。鑿きに英國思想の傳來は延きて、英文學の輸入となり、進んで其小説詩歌の翻譯となり、又佛國思想の傳來は直ちに政治思想の發達を促し、延いて政治小



説の勃興となりぬ。然らば泰西文明の母と呼ばれし幽遠熱烈なる基督教の思想か、本邦精神的文明の開拓者として、文藝の上に劃然たる印象を残し、ならんと想像するは強ち妄想に非ず。然るに事實はいたく之に反せり。基督教の思想は未だ文藝の内容とならず、繪畫、彫刻は勿論、詩歌小説等一として其色彩を帯ぶる者なかりき。思ふに宗教思想か文藝の内容とならんには、先づ國民思想の内容とならざるへからず。國民思想の内容とならんには、先づ宗教其物が國民的ならざるべからず。國民心理の最奥に於て一點契合默會する所なくんば、所謂信者の數如何に多くとも、國民思想の内容に入らんは思ひもよらず。況や文藝の内容たるに於てをや。之を東西の思想史文藝史に徴するに、古來新宗教に觸接するや、必先づ同化受用の微妙なる能力によりて之を國民的に渾成し、國民思想の内容に牢乎たる根底を作り、爰に始めて美術に顯はれ、文學に影響を與ふ。而もかくの如きは決して短日月の間に成就すべきに非ず、國民不斷の努力と、時所幾多の鍛鍊とによりて、始めて成るべき大業なり。されば新來の基督教の如きも、亦此約束に従ひ、傳來日尙淺き基督教は、未だ國民同化の妙用を受けず、未だ國民思想の内容とならず。且當

時斯教の盛況は、國民信仰の深き根底より生せしに非ず、西洋文明に心酔せる國民が、所謂文明の宗教に歸趨せる一時の盲動に過ぎざれば、同化受用の如き眞面目なる問題には未だ到達せざりしなり。其の文藝思想の内容たるか如きは、尙ほ遠き未來に屬す。一時皮相の盛運を見て直ちに其の影響の文學に顯はるべしと想ふは蓋し早計なるべし。



## 第二期

### 第三章 新文學思想

#### 第一節 固有思想の反動

維新以降、日に月に昂上し來れる歐化熱は、十八年に建設せられし新政府の極端なる模倣主義を執るに及んで其の絶頂に達せり。國民は其文明をして歐米諸國と對等ならしめんとすの燥急輕忽なる空望の爲に動かされ、固有文明の特質、新來文明の適否を究めず、徒に皮相の文明に眩惑して之を移植せんと努めぬ。二十年の頃は此風潮の最高度に達せる時なりき。物窮まれば則反るとか。反動の氣運は茲に喚起せられ、長く屈辱を忍びたりし固有思想、俄然として頭を擡げぬ。而して此運動の陣頭に立ちし者を政教社の人々が唱道せる國粹保存主義となす。歐化思想に對する保守思想の反抗は、從來種種の形を以て起りき。維新當初、神道一派は一時反動の氣勢を示し、六七年の頃、排洋與神の思想、一部の人心を風靡

して歐化熱に反對したりき。弘道會なる者次て起り、儒教主義を提げて當時の實利主義に反抗し、固有道徳を稱へて浮薄なる時潮を制遏せんと試みたりき。次に民選議院設立の運動上下を搖かすに方り、獨乙流の國家主義を執る一部學者は、起て佛國流民主説に反對したりき。而も歐化主義の勢力は之を推倒して進みぬ。斯くの如く、保守主義の反抗數回に及ぶと雖、さながら螻蛄の龍車に向ふ如く、悉く破擡せられ畢んぬ。然りと雖、今や歐化熱の昂上極端に進むに及んで、國民漸く自己の盲動を悟り、二十年來の經驗によりて、西洋心酔の弊一にして足らざるを覺りぬ。所謂西洋の文明、乃至文明の宗教と稱する者、其根柢の極めて輕浮にして、其内容の極めて落莫なるを知りぬ、是に於てか國民の思潮は、翕然として國粹保存主義の下に集り、政教社の人々が其機關雜誌『日本人』に出したる縱横の論議は、天下の視聽を動かしぬ。

政教社は此の國民思潮の癡りなせる一個の團體にして、三宅雪嶺、井上圓了、志賀矧川、棚橋一郎等、之が主唱となり、二十一年雜誌『日本人』を刊して大に國粹主義を鼓吹し、泰西文明の缺點を指摘して國民警醒の聲を擧げたり。所謂國粹保存主義と



は、從來歐化主義か泰西文明を崇拜するの極、我國粹を蔑視し、我短を去るに合せて我長をも没却せしに反抗し、飽くまでも國粹を保存し、補ふに彼か長を以てすべしといふに在り。論旨多少抽象的に過ぎ、國粹其物の具象的説明に缺くる所少からず。爲に往々頑冥なる保守論者と誤解せられたりと雖、一代の氣運を捲起して國民自覺の道程に多大の貢獻を爲し、功績は、百世没すべからざる者あり。勿論此成功は時勢の然らしむる處にして、固より政教社のみ事業に非すと雖、輿論の向ふ所を指導して其言はんとする所を道破せる急先鋒の榮譽は、確かに是等の人々に存すべきなり。

此運動の賜は國民の貴重なる自覺なりき。自覺は對比より來る。他ありて始めて自あり、他を知悉して、始て自の特色を知覺す。而も對比の能力は智識經驗の進歩に待つ者多し。今や我國民は二十年の經驗を積み、智識を蓄へ、其結果、從來盲目的に吸收したりし歐米文明の缺陷を看破すると同時に、固有文明の彼れに遜らざる者甚多きを知悉し、自他を比較して、今更に昨の非を悟りぬ。即從來世界的智識の缺乏の爲、國民の意識に上らざりし者、該智識普及の結果、對比の能力を生じて茲

に意識に上り、豁然として自覺の域に入らんとするなり。且歐米心酔の餘、初めは皮相的觀察に止まりし邦人も、多少其の真相を覗ふに及び、彼等の爲す所常に其國粹を尊重し、特に文學美術等は勉めて固有の美を保全發揮せんとするを知り、加ふるに本邦在留の外人等口を揃へて本邦の文學美術を賞讃するを聞くに至りしかば、國民は自己の有する財寶の極めて富贍なるに驚き、國粹に對する自覺は油然として其の衷心より起りぬ。尊いかな此自覺や。是在りて本邦文明は始めて獨立の文明たるを得るなり。二十年來の文明は模倣の文明、隸屬の文明、はた根據なき文明なりしが、茲に至りて始めて確固獨立の基礎を取るに至れり。本邦文物の發展は、此時始めて真正の進程に上りぬ。

斯の自覺は、實に我文明史、思想史、及文藝史の上に於ける極めて重要な契點にして、一度新來の大勢力の爲に奈落の底に推し落されし文物の總てが、奕々たる新光明を以て復活したる時を表はせり。曩きに吾人は維新當初の破壊的風潮を叙して、世は一時荒寥たる暗黒界となりしを説き、次ては此缺陷を補はんか爲、恰も餓えたる者の食を選ふに暇なきか如く、競うて泰西文物を吸收して其の適否を願み



さりし事を述べたり。今や是等西洋文物が漸く其缺陷を露はせるに乘じ、嘗て打捨てられし舊文物、土を捲いて重て來れり。歴史は常に繰り返す。而も繰返しつゝ、進歩すと稱す。復活は常に原形の儘に非ず、重ねて來りし者大に其舊態を改めずんば非ず。二十年間新文物の下に雌伏したりし舊文物の復活は、文明の獨立の上、はた其進歩の上に於て、其意義極めて重き一大現象なり。

文明の獨立は其端緒を開けり。歐風米俗のわざとらしき者去りて固有風俗の醇美なる者之に代り、一時亢龍の勢ありし耶蘇教は俄然として其力を失ひ、從來醜陋の惰眠を貪りし佛教徒も茲に覺醒して破邪顯正の運動を始め、一方に於ては、嘗て反古紙屑と共に扱はれたりし和漢の古書、茲に再び花咲く春に會ひ、斷綴零冊、世にもてはやされ、故紙廢墨、復價を生ずるに至り、又彼の「日本人」一派の極力唱導したりし古美術保護の議は、遂に天下の輿論となり、嘗て無用の長物として破壊せられたる神社佛閣、及海外に賣り飛ばされたる佛像佛畫も、今は古美術保存の名の下に寶物取調委員の鑑識證明によりて永代國家の保護を受くべき國寶となるに至れり。轉じて國民教育の方面に見れば、森文部大臣が大膽なる洋風教育、特に國語を

廢して英語を採用せんとせし如き極端なる外國語教育は、二十三年十月の勅語、續いては井上文部大臣の國家主義の教育、並に國語教育によりて其風潮を一變し、更に藝術界に見れば、米人フノロサが口を極めて歎賞したる邦畫の眞價は端なく國民の宿醉を覺醒し、邦畫本來の面目を發揮せんとて奮起せし國粹派の運動は、從來の畫壇を領せし文人畫西洋畫を斥け、工部大學の美術學校も其方針を變じて邦畫の保護獎勵に力め、爾來美術協會の設立となり、東京美術學校の開設となり、狩野芳崖の崛起となりて邦畫の特技は新に宣揚せられたり。

復古的精神は所有文物に普及して、遂に本論の主眼たる文學界に及べり。斯る潮流の文界に入りて先づ與ふべき直接影響は、言ふまでもなく國文學の復興なり。曩に神道派の國學が一時歐化主義に反抗せし事ありしが、國粹思想の崛起するに及び、先の國學は純文學に姿を變へて復活し、從來西洋文學の爲に壓倒せられて其聲息を潜めたりし我古文學再び世に出で、皇典講究所、東京大學の和文學科及古典講習科等は皆古文學攻究の好機關となり、和文學の智識は駭々として國民の間に擴がり進むぬ。勿論是等設備の主眼とする所は、恐らく國史國典の研鑽に在りて



純文學に在らざるべしと雖、古國史古國典の研究は畢竟古文學の研鑽に頼らざるへからず、古文學を外にして國史國典攻究の資料を求むべからざるなり。斯かる間に、大學古典科及和文學科は落合直文、小中村義象等の卒業生を出し、是等少壯國文學者は從來の國學者流と異なり、明治の新空氣に養はれて多少の新智識を藏し、着眼識見おのづから皇學一派の固陋を擺脫し、加ふるに年少の銳氣を以てしたりしかば、歐化主義の横行の下に國文學の憐れむべき沈衰を見て黙止するに堪へず、新聞に雜誌に演説に講義に、國文學を鼓吹して彼の國粹保存論と呼應したりき。斯くて國文教育の必要は天下の輿論となり、皇典講究所に國學院設立せられ、大學に國文學科を置かれ、尙國語傳習所も開かれ、爾來中等以上の學校にして國語國文の科を課せざる者なきに至れり。一方に於ては東洋學會、明治會の如き國粹主義の會合より、『東洋學會雜誌』二十一年發刊、『明治會叢誌』二十二年發刊の如き雜誌を出し、『日本人』等と相呼應して國文復興を呼號せり。この時に方り、是等の運動に就き、常に其主動となりし落合、小中村の二人、古文學の翻刻出版を成して古書缺乏の困難を救はんと企て、『日本文學全書』を編纂して二十三年第一編を刊行せり。遠く

は竹取、伊勢の古物語より、近くは太平記、増鏡に至るまで、古文學の重なる者を網羅し、解題頭註を加へて逐次刊行する事二十四編に及べり。此舉や實に天下の渴望に應じたる者にして、從來刊本甚稀少、坊間求めて得る事能はざりし貴重なる古文學が、今や至廉の小冊子となりて、炮豆の寒生にも容易に得らるゝに至りしかば、既に和歌和文の趣味を解し、初めたる青年輩争うて之に就き、古文復興の風潮は全國に行き亘りぬ。『文學全書』の成功は更に古歌集の出版を促し、少壯歌人佐々木信綱『日本歌學全書』を編し、萬葉集、八代集及中古の家集を纂め、總て分本十二冊として二十三年末より刊行し始むるを見るに至れり。是に於てか和歌和文の二全書完成し、相俟つて國文學興隆に至大の貢獻をなせり。されば之を企劃せる少壯國文學者の功績は、二全書と共に永く傳ふべきなり。而して彼等の巨頭として常に此運動の前面に立ちし者は實に落合直文なりき。

彼は仙臺の人、十五年大學古典科に入り、三年にして之を出で、爾來一身を國文教育に投じ、歌文復興に關する事業一として與らざるなかりき。彼は時人が自國文學の優秀卓越なるを知らざるを罵りて、之か妙味を發揮するに全力を注ぎ、新聞雜



誌の文章が拙悪格に入らず、支離滅裂讀むに堪へざるを指摘して、天曆以前の古文法を唱道し、御歌所一輩の和歌の、孱弱卑俗取るに足らざるを説破して、優雅清新の趣味を鼓吹し、從來の普通文が乾燥なる漢文直譯體に流れ、國學者の文章が無氣力沒趣味なる擬古體に陥るに反抗して、優麗暢達の中、精彩おのづから奕々たる一種清新の體を創め、はた『孝女白菊の歌』を始め數多の長詩を作りて、『新體詩抄』以來の蕪雜なる詞章を矯正する等、國歌國文の所有方面に創始的の事業を遂行しぬ。彼が第一高等中學、皇典講究所、國學院、及國語傳習所に於てなし、國文教育、『東洋學會雜誌』、『明治會叢誌』、『桐草紙』、『日本』、『歌學』、『國文』等に掲げし論議創作は、即此事業を成さんか爲に披瀝せし努力の熱血なりき。是に於て世人漸く國文學の尊むべきを悟り、國文典の重んずべきを知り、當時既に名を文壇に馳せたりし文學者すら、顧みて自家の文章の破格滅裂なるに驚き、彼に就いて文法上の條練をなせし者少からざりきと稱す。況んや、青年好文の徒に至ては、風を望んで起つ者頗る多く、門下多士濟々、後來文壇に名をなし、者少からず。斯くの如くにして、國文學興隆の運動は、其功を收め、國文教育創業者としての彼の地位復動かすべからざるに至りぬ。彼

は歌人なり、文章家なり、批評家なり、講演家なり、學者なり。然れども國文教育家たる一點に於ては總てを合したるよりも大なりき。

古文學復興の主動者の少壯國文學者なりしは、上述の如し。然れども此氣運を助長するに與て力ありし他の因縁亦一にして足らず。或は井上文部大臣の國語教育主義の如き、或は新聞『日本』の鼓吹、柴説の如き、或は其の主筆陸羯南の保護の如き、或は司法大臣山田顯義の國學振興に盡せるか如き、説き來れば底止する所を知らずと雖、事煩に亘るを以て、茲に之を省かん。

以上縷述せし所は、即ち國民の自覺及之に伴ふ所有固有文物復活の概況なり。顧みて當代の風潮を概見すれば、反動の意、到る所に現はれ、復古の氣、所有方面に充てり。而も反動は常に退歩に非ず。復古は多く新彩を帶ぶ。正あり、反あり、茲に折衷的發達を遂ぐるは歴史の面目なり。固有文物の復古、豈必ずしも文字通りに古に復るの義ならんや。況や此自覺の因て起る所、亦世界的智識の傳播に存するをや。復活の美術には世界的意氣あり、復活の國文學には清新の趣味あり。我等の歴史は着々として進歩しつゝあるなり。



此時に方つて、維新以來の過激なる革新的精神は漸く中正に赴き、盲目なる急進主義と頑冥なる保守主義とは相次て勢力を失ひ、民權自由論と帝王神權論とは憲法によりて根本的に統一せられ、歐化主義の横行は國粹思想の反動に調攝せられて穩正の進路を取り、所謂新舊思想の衝突漸く其勢焰を收めんとす。是に於てか國民聊か餘裕を生じ、意を文藝界に傾くる者前日の比に非ずなりぬ。且一方に於ては學術の進歩に伴うて國民の思想愈々廣濶となり、泰西語學の普及と共に英佛文學を味ふ者益々多く、甲因乙縁相扶けて文學趣味の瀾漫を促したりければ、明治文學革新の思潮茲に動き新文學の勃興爰に萌せり。

## 第二節 文學思想の革新

文學に對する觀念の變遷は、作品の性質に根本的の變革を興ふ。所謂新舊文學の相異は主として此の觀念の相異に基く。過去の文學界を支配したる文學思想主義原理は如何。現今の文學界に於て正に起りつゝある文學思想主義原理は如何。之を稽查せざれば新舊文學の性質の相異を精密に知る事難し。思ふに過去

の文學界に於ては、或は達意の具自己發表の器となし、或は道德の隸屬として世道人心に益あらん事を主となす等、總て文學を以て實用物と見做し、何等か實用の素を備ふるに非ざれば文學の價値を生せずといふ思想最勢力ありしが、一般思想界に新潮入り來り、平民的思想の傳播益々廣く、個人の發展益々著しく、自由意志の思想暗々裡に根柢を張るに方つては、文學獨立の思想斯界に磅礴し、文學は其自身の價値を有し、其自身の形式を有し、決して實用の隸屬、道德の方便に非ずといふ思想は漸く社會に勢力を得るに至れり。

斯くの如きは極めて大體の觀察なり。更に少しく之を細説せん、先づ詩歌に對する從來の見解、主義等は、古今集以來、支那詩人が詩に對する主義見解等を繼承し、彼の詩經の序に『詩は志の之く所なり。心に在るを志となし、言に發するを詩となす。情中に動きて言に形はるゝ時は、之を言ふも足らず。故に之を嗟嘆す。之を嗟嘆するも足らず。故に之を永め歌ふ。』と言へる數句を以て金科玉條となし、所謂大和歌、唐歌の名に形はるゝ如く、和歌を以て我國の詩となし、詩を以て彼國の歌と思ひなせり。故に在來歌人の和歌を見るや、常に自己の主觀を諷詠するを以



て能事畢れりとなし、而も漫然、目に見えぬ鬼神をも泣かしむと稱へ、未だ藝術の眞義に思ひ到る事能はざりき。且一方に於ては江戸時代儒教主義の浸潤甚しく、國民思想の中に牢乎たる根柢を置くに方つては、此主義遂に詩歌にも入り、風教に利し世道に益あるを以て詩の用となし、然らずんば彫蟲の末技無用の贅物と貶稱し、此思想延いて和歌に及ばし、之を律するに道德の標準、實用の規矩を以てするに至れり。

次に小説戯曲に對する思想を稽ふるに、王朝の古に在りては、世能人情の鏡としての是等藝術の本義能く知られたりしも、鎌倉時代以後、佛教思想の根柢を國民の間に置くに及び、或は佛法弘通の具に供せられ、或は靈驗利生の記録とせられ、所謂「狂言綺語讚佛乘」の語は是等文學の性質を決定する斷案となされ、甚しきは王朝の物語をも是等の目的の爲に書かれたりと稱ふるに至る。降りて江戸時代に及びては、勸善懲惡の主義、小説戯曲の理想を一變し、是等の文學は道德特に儒教道德の主義を宣揚し、兼ねて之を鼓吹する用に供せられ、事を凡近に取りて意を勸懲に發す」と言ひし李笠翁の語は、恰も和歌に對する詩經の序の如く、千古不磨の確言と信

せられ、所謂訓蒙的性質は是等文學を被ひ盡せり。斯くの如く詩歌、小説、戯曲等、總て文學以外の主義によりて動かされ、文學以外の目的の爲に使はれ、其自身目的たるべき文學の特質を没して一種の方便となり了らしめたり。

轉して文學者の社會に於ける地位、彼等か文學に對する態度、はた彼等か自ら持する所の高卑、及文學者たる人々の種類を見るに、和歌、和文、漢詩、漢文の如きは、其作家たる者比較的、社會の尊敬を受け、又彼等か其關する文學に對して比較的眞面目の態度を取り、從て自ら標置する事比較的に高く、且其教養學識比較的に深かり。特に和歌に在りては、其評價最高く、或は天地を動かし、鬼神を感せしむと信じ、或は神秘にして魔力ある者となし、或は一種の解脫法と崇め、甚しきは萬邦詩歌の最上位に在る者にして、神人を感せしむるは獨り我大和歌自然の妙用と稱するに至る。小説戯曲の類にても、中古物語の榮えし頃に在りては、其評價必しも和歌に下らざりけり。然るに佛教主義及儒教主義相繼て入り、小説戯曲を以て實用の具となすに方りてや、之等文學の作家が社會に於ける地位おのづから降りて、學者僧侶に從屬する者となり、彼等か文學に對する態度亦おのづから粗かに、狂言、綺語の名に甘



じ、戯作の稱を拒まず。従て自ら重ずる事甚少く、戯作者と呼ばれて普通藝人と相距る事遠からず。其人物も亦二三の特例を除きては、概ね教養足らず、學識具はらずして、唯、文筆の才を以て立つのみなるか如し。『羈旅漫錄』所載の近松巢林子の遺墨といふに曰く、「甲冑の家を生れて武林に離れ、三槐九卿に咫尺し仕へて寸爵なく、市井にさまよひて商賈を知らず、隱に似て隱に非ず、賢に似て賢ならず、世の迷ひ物、神釋儒道和歌有職弓馬部曲歌舞滑稽まで、事知り顔に一生を言ひちらす」と。又近松半二の『獨判斷』に曰く、「堂上の事を知らば有職者となるべし。弓箭の故實を知らば軍學者となるべし。聖賢傳を記憶せば直ちに博識の儒者となるべし、昔公の事も楠公の事も丸呑に似つこらしく書いて、聞いた程の語を奥深げにつばらかし、和歌管絃より萬の道、何一つ正しく覺えたる事なく、聞取法聞耳學問、根氣をつめて學ぶ事のならぬ自墮落者が即ち作者となるなり」と。二者固より一場の戲筆にして、巢林、半二必しも此儕に非ずと雖、所謂戯作者の真相は最適切に之に露はる。大才巢林等にして此言をなすを以て見れば、爾餘の作者輩の事思ふべきのみ。文學界の舊思潮は洵に斯くの如き者なりき。過去の文界學を支配せる思想は

常に道徳上の者にして文學上の者に非ざりき。然るに一朝泰西の思想、特に彼國の文學思想の入來るや、文學思潮革新の運動一時に起り、詩歌を始として少説戯曲に至るまで、次を追うて舊思潮を棄てぬ。而して此運動の最早く文壇に現はれ、明確なる意識を以て改革に着手したりし者は、即明治十五年刊行の『新體詩抄』なりき。

## 新體詩抄

『新體詩抄』は東京大學の外山、山、矢田部尙今、井上巽軒三人の撰にかゝり、西詩翻譯又は撰者創作の詩篇を收む。新體詩とは其名の示す如く、漢詩にも非ず、和歌にもあらず、西詩の體裁を取りて之を行るに七五調の國語を以てしたる一種新體の詩にして、本邦文壇に始めて紹介せられし明治の創造なり。其名の如きも本書撰者の命する所にして、爾來或は新體歌と稱せんと主張せし一二の作家ありしも、此名は遂に一般文界に襲用せられて復動かすべからざるに至りぬ。而して所謂新體詩の特に創始せられし來由を温ぬるに、撰者巽軒本書に序せる所に從へば、從來詩界を占有したりし漢詩と和歌とは、共に吾人の情志を發舒するに足らず。漢詩は以て支那の詩たるべし。本邦の文學として發達すべき者に非ず。和歌は本邦



文學として尊むべき者なり。然れどもこは過去の文學たるべくして、新日本の現在及將來に於て詩界を占有すべき者に非ず。是を以て吾人新文明の大潮流に棲息する國民が依て以て情志を發舒せんには、現時の國語を以て作れる歐風の詩形を取らざるべからず。平々坦々の言語を以て成れる長大の詩形を選ばざるべからずといふに在り。新體詩はかゝる主張の下に起りし者にて、七五一聯句をなし數句節をなし、數節章を成す事恰も西詩の如く、用語は漢語を嫌はず俗語を棄てず、所有現代普通の語を收容して、勉めて耳遠き古語を除く。打見たる所讀み易く解し易し。洵に詩界の大變革なりき。

詩界革新の運動は起されたり。世上同感の文學者は相率ゐて新體詩に赴けり。漢詩和歌の専門家、及此新彩に驚倒せる保守者流が、所有非難嘲罵を加へしに係らず、總ての反抗を排して一方の旗幟を立てたり。斯くの如きは固より時勢の然らしむる所なりと雖、之を十五年の當時に見たりしは、實に創始者の大膽なる發奮の致す所なりといふべし。

然れども、彼等の詩歌革新に對する主張は未だ根本的の者に非ざりき。勉むる

所、外部詩形の改革に在りて、未だ詩想の内部に及ばざりき。巽軒は新體詩の特質を數へて、格法の自由なる事、規模の廣大なる事、言語の豊富なる事、語格の近様なる事、字句の勁健なる事、旨意の明晰なる事、進歩の傾向ある事、新奇の着色ある事、の八個條を擧げたりと雖、總て是、詩形上の得失に係り、詩想の根本的性質、乃至詩歌に對する觀念に就ては、何等の言ひ及ぶなし。從來主觀の諷詠に止まり、自己發表を以て要となしたる詩歌の性質は如何變化せしか、社會上道德上に裨益するを以て詩歌の價值となしたる實用主義は如何變遷せしかは、未だ知るべからず。況や藝術の本義を明にし、詩歌は彼の繪畫彫塑等と等しく、藝術家の想像に出でたる一種の美術品にして、詞花言葉を以て宇宙の美を謳歌する者たる事を説くに於てをや。詩は志を言ふに止まるべしといふが如き觀念は或は是無かるべし。然れども、道德主義を以て詩歌を評價せんとする思想は、半平として抜くべからず。換言すれば、文學の獨立は未だ成らず、文學思想の根本的革新は未だ遂げられざるなり。

『新體詩抄』は、斯界の爲に敢て卒先の功をなし、荊棘を拓き蒙茸を開きて去れり。然れども、文學に對する觀念の革新は、擧げて之を後の文學者に委ねたりき。時は



進みて十八年となりぬ。果然新運動は小説界に起りぬ。『小説神髓』の出現即是なり。

## 小説神髓

『小説神髓』は坪内逍遙の著書にして、一部二卷に分れ、上卷に於て、先づ美術とは如何なる者なりやを論じ、小説は一種の美術なりと説き及び、以て小説其物の根本性質を明にし、次に小説の起原より其變遷の概畧を述べ、次に小説の主眼を説いて専ら人情の描寫に在りとし、以て從來の勸懲主義に大打撃を加へ、更に小説の種類と其四大裨益とを述べたり。下卷は小説の法則を論じ、古來本邦の小説を剖析批判して將來執るべき方針を指示したる者にして、先づ種々の小説文體の得失を擧げ、次に小説の脚色を論じて主人公の設置に及び、最後に叙事法を述べ、總て十章、所謂小説の神髓を説いて、今後小説家の向ふべきは模寫小説、人情小説に在るを詳論せり。是即ち著者逍遙が東西文學の比較研究より得たる一部の小説論にして、詩學又は美學の新智識の上に立ちて本邦古今の小説を觀察評議し、併せて小説の性質を明にし、在來の戲作の範圍を脱すへきを説ける者なり。其緒言に曰く、近來刊せる小説稗史は、これもかれも馬琴、種彦の糟粕ならずば、一九、春水の賸物多かり。

蓋し此の間の戲作者流は、ひたすら李笠の語を師として、意を勸懲に發するをば小説稗史の主腦と心得、道德といふ模型を作りて、方めて脚色を其内に工夫なさまく欲りするからに、強ち古人糟粕をば嘗めんとするには非ざめれど、素と其範圍の廣からねば、覺わす同轍同趣向の稗史をもものする事なるべし。さはあれ其罪偏に作者の上に在るに非ず。讀者亦與りて力あるなり。何となれば古來小説をもて教育の一方便のやうに思ひて、獎誠勸懲は其主眼なりと唱へなから、尙實際の場合に於ては、ひたすら殺伐慘酷なる、若くは頗る猥褻なる物語をのみ愛で喜び、他のかた苦しき筋の事は目を住めてだに見る人稀なり。而して作者の見識なき、總じて輿論の奴隸なれば、競うて時好に媚びむとして、殘忍なる稗史陋猥なる情史を綴り、世の流行に従ふものから、勸懲の美名もさすがに打棄て難さに、強て勸懲の主旨を加へて、人情を枉げ世態を矯めて、無理なる脚色をなす事なりけり。是併しなから、作者も讀者も、稗史の主眼を悟らざるに因るのみ。因て嗚呼がましき所爲とは思へど、敢て持論を世に示して、先づ看官の惑を解き、兼ては作者の蒙を啓きて我小説の改良進歩を今より次第に企てつゝ、竟には歐土のノベルを凌駕し、繪畫音樂詩歌と共に



に、美術の垣頭に煥然たる我物語を見まくほりすと。是れ此書の出でし由來なり。著者は劈頭美術の本義を説きて、實用主義と目的主義との妄を辯じ、小説は即ち美術なれば、他の音楽繪畫彫刻建築等と等しく、所有美術の約束に従はざるべからずと述べ、次に小説の變遷を叙し、人情世態を寫せる彼のノベルを以て其發達の頂點となし、眞の小説稗史は即是れなりとなせり。而して其主眼に説き及ぶや、則ち曰く、小説の主腦は人情なり、世態風俗之に次く。此人情の奥を穿ち、心の中の内幕をは洩す所なく描き出して、周密精到なるを小説家の務とす。和漢に名ある稗官者流が、ひたすら脚色の骨髓に入らん事を力めたりしも、人情の皮相を寫して足れりとせり。憾むべき事ならずや。夫れ稗官者流は心理學者の如し。宜しく心理學の道理に基きて其人物をは作るべきなり。苟にも己の意匠を以て強て人情に悖戻せる、否心理學の理に戻れる人物などを作り出さば、其人物は既に人間世界の者には非で、作者が想像の人物なるから、其脚色は巧なりとも、其譚は奇なりとも、之を小説とは言ふべからず。中略彼の曲亭の傑作なりける八犬傳中の八士の如きは、仁義八行の化物にて、決して人間とは言ひ難かり。作者の本意も、本よりして彼

の八行を人に擬して小説をなすべき心得なるから、あくまで八士の行をは完全無缺の者となして、勸懲の意を寓せしなり。されば勸懲を主眼として八犬傳を評する時は、東西古今に其類なき好稗史なりといふべけれど、他の人情を主眼として此物語を論ひなば環なき玉とは稱へ難し。中略されば小説の作者たる者は専ら其意を心理に注ぎて、我作りたる人物なりとも、一度篇中に出でたる以上は之を活世界の人と見なして、其感情を寫し出すに、己の意匠を以て善惡邪正の情感をば作り設くる事をなさず。唯、傍觀して有りの儘に模寫する心得にてあるべきなり。中略本居大人の玉小櫛に、源氏物語の主旨を論じたる一節の如きは、頗る小説の主旨を解してよく物語の性質を説き明らめたる者といふべしと。人情を模寫して神に入るを理想となし、寫實以外小説を認めざる著者の主旨、細かに説き盡されたり。著者は又曰く、勸懲小説は小説の一種と稱すべけれども、其旨狭く其趣偏れり。模寫小説は人生の種々相收めて此裡に在り。されば模寫主旨の小説には求めずして諷刺諷誡の法備はり、暗に人を教化する力あり。別に勸懲主旨の小説を要せざるなり。されば斯かる小説には、第一人の氣格を高尙にし、第二人を勸懲懲誠な



し、第三正史の補遺となり、第四文學の師表となるの四大裨益おのづから伴ふと。大に模寫小説を揚げて勸懲小説を抑へたり。

斯くの如きは即ち『小説神髓』の主旨にして、所説嶄新、着眼超凡、洵に人の耳目を聳動するに足れり。勿論唱ふる所多少の誤謬なきに非ず。小説を以て總ての文學の最上位に置けるが如き、眞の小説をノベルに限りてロマンスの之と併立すべきを認めざるが如き、寫實小説を過重して理想小説を過貶せるが如き、妥當を缺くの見抄からず。よしや斯かる誤謬なしとするも、今日より見れば當然の說にして特に駭くべき新論に非ずと雖、一世を擧げて勸懲の舊思想を墨守し、空しく實用主義目的主義の奴隸となりて自ら悟らざる時に方り、藝術本位主義の大旗を翻して自然模寫を唱道し、以て從來、因果應報、惡は亡び善は榮ゆる團圓を追はんが爲に、強て人物事件の自然を枉げたりし戲作界を警醒するに至つては、洵に破天荒の卓說にして、文學史上一時を劃するに足る有力なる地位を占むる者と言ふべし。此書出て、小説の名普く世に行はれ、主人公の稱模寫寫實の語、廣く文壇に紹介せられたり。小説に對する觀念は一轉化し、十九世紀新文學思潮は觸接せられ、藝

術主義の思想は始めて本邦文學界に入り來れり。是に於てか、遂に翻譯小説によりても又『新體詩抄』によりても未だ遂げられざりし文學思想の根本的革新漸く其緒に就き、文學の獨立は漸く成るを得たり。『小説神髓』は、管に小説のみならず、文學全體に向つて革新を促したる文壇有數の著書なりき。

轉じて文學者其人を見れば、所謂戲作者輩は舊文學と共に漸く社會の裏面に退き、教養あり學識ある新作家代りて文壇に現はれたり。『新體詩抄』の作者は悉く當代の學者、東京大學の教授及其卒業業者なり。『小説神髓』の著者は直に作者となりて『書生氣質』を出し、以て其所論を體現せしが、是亦同學出身の文學士たり。就中詩歌の人は古來多少教養ある社會より出でたれば、特に變化の激しきを見ざれども、小説戲曲等に至りては、社會的地位極めて低き戲作者輩の作る所なりしが、逍遙社會の上流に立つべき學者の身を以て敢て此事にたづさはり、舊慣を打破して作者の品位を高め、從て小説戲曲其物の品位をも高めたりしかば、斯界の空氣爲に一新し、陋劣なる戲作の境界を離れて高尚なる文藝の畛域に入り、更に進んで所有文學の中、最發達進歩せる者とならんとす。



斯くの如くにして文學思想の革新は『新體詩抄』に萌芽を發し、泰西文學の流入と共に漸々生長し、『小説神髓』に至りて遂に翁爵の美觀を呈するに至れり。顧みて此氣運を醸成せし原動力たる泰西文學思潮の傳播の迹を尋ぬるに、先づ創作と批評との二方面より傳はりしを見る。一方に於て英佛の詩歌小説が夙に翻譯せられしと同時に、他方に於て同國の美學、詩學、修辭學、美術論等亦絶えず翫味せられたり。此結果はやがて翻譯又は著書となりて現はれ、一方に於ては『新體詩抄』『學藝雜誌』の譯詩、『花柳春話』以後の翻譯小説となり、他方に於ては、十六年中江兆民が譯せる『維氏美學』佛ウイロン原著、其前後に出でし菊池大麓譯の『修辭及華文』ラエノロサ等の美術論となり、前者は一括して泰西文學の標本となり、後者は一括して西洋美學思想の代表者となり、ついで『新體詩抄』撰者の議論を生じ、遂に『小説神髓』の主旨となれり。二十二年に出でし高田半峰の『美辭學』は『修辭及華文』の系統を承けて、又此風潮を聲援したりき。

此時に方りて、前節に述べたる固有思想の反動漸く實相に入り、延いて古文學の復活運動となり、詩歌美文より始めて小説戯曲に至るまで、或は語法を之に採り、或

は文章を之に學び、速りに固有文學の面影を寫しぬ。是に於てか固有思想は疊に榮わし泰西思想に影響し、古文學は翻譯文學に影響し、兩者相依り相俟つて文學界に一新面目を開けり。明治新文學の勃興は即ち此二者の渾然たる調和に起れり。

#### 第四章 新文學の勃興 其の一

##### 第一節 新文學の曙光

文學思想の革新に伴うて現はれたる新文學の曙光は、十五年に出でたる新體詩に其第一光鏗を放ち、爾來十年の間に小説、戯曲、和歌、俳句等所有文學に更新の彩光を齎しぬ。明治文學は此時を以て本期に入れりといふべく、其の眞面目茲に始めて發揮せられぬ。而も時に先後あり、所有文學が期を同うして勃興せしに非ず。新體詩先づ起り、新小説之に次ぎ、新翻譯又之に次ぐ。新戯曲と新和歌と新俳句とは時を経て興起し、其の曙光を放ちしは皆二十五年以後に屬す。

##### 一、新體詩

詩歌の起原や眞に遼遠なり。國民生存の曉、既に其源泉を發してより流れ



て萬葉集に至り、注々たる大觀國民の瞻仰する所となる。就中長歌の一體、瑰麗豊満比ぶべきなく、洵に國民雄大の情懷を賦するに適したりき。惜いかな、華彩一朝の榮を奈良朝に止めて世は短歌獨占の壇場となり、轉じて連歌となり分れて發句となり、形體の短小茲に極まる。短詩必しも棄つ可らず。短詩には短詩の利ありと雖、而も斯かる形體は決して國民情感の全體を盛るに足る者ならず。發達せる文壇が有する唯一の詩體としては餘りに憐なりといふべかりき。或は曰ふ、是詠曲淨瑠璃が一種の詩なるを知らずして之を藐視せる誤に出づと。思ふに二者の出でたる、誠に詩歌界の缺陷を補はんが爲にして、其形體亦頗る韻文の素質に富めり。然れども一度之を精査すれば、二者は之を詩歌と稱へんには餘りに散文的屑滓多かり。是を以て本邦詩歌の振はざる事茲に久しく、依樣葫蘆、古人の糟粕に甘んずる者滔々皆然り。此時に方り泰西新思想の傳來ありて詩歌の内容たるべき者益、豊富となり、種々の外來語漸く國語に調和せられて詩歌の用語たるべき言語益、富麗となりたれば、明治の新文壇は到底從來の詩歌を以て満足する事能はず。新詩歌に對する憧憬凝つて二三の新詩人を出し、新體詩の名の下に一新體を開く

に至れり。前節既に述べし『新體詩抄』即此の代表者たり。

然れども此運動は何等の先蹤なくして突然起りし者に非ず。是より先明治二年福澤諭吉『世界國盡』を著して萬國の歴史地理を簡明に述べ、兒童諷誦に資せんとて平易流暢なる七五調を以て始終せる事あり。既に第一章に述べし如く、素と詩歌の域に遠き者なれども、興湧き情昂る時は筆自ら精彩を帯び思はず一種の詩調に入る。其英京の條下、夜は三十六萬の瓦斯の燈火耀きて五月の暗も人知らず、以下數行、又は北米合衆國の條下、心に誓ふ國の爲、失ふ命得る自由、正理屈して生さんより、國に報る死を取らん、一死決して七年の、永の月日の攻守り、知勇義の名を千載に、流す血の河骨の山、七十二戰の艱難も、消えて忘るゝ大勝利のあたり、今の鐵道唱歌地理唱歌に比ぶれば遙に詩趣に富む。次で六年『暗誦十詞』あり。前者と同様の主旨を以て作られたる七五調の誦詞にして、皆後の軍歌の素をなし、延いては新詩歌の先驅をなす者なり。

十四年文部省音樂取調掛は、小學校唱歌の教科用として『小學唱歌集』を發行しぬ。是は西洋樂譜に合せて新作し若しくは翻譯せし單簡なる歌曲を集めし者にて、企



圖の新しきに係はらず、歌詞の内容外形共に擬古派歌人の餘唾を嘗むるに止まり何等新機運に貢献する所あらず。然れども彼の長歌にも非ず今様にもあらぬ自由なる變體を韻文界に起し、而も典雅流麗の聲調を失はざりしが如き、後來益々發達すべき樂曲歌詞の先蹤をなし、詩界又別箇の發展をなせるは注目すべき事實なりとす。

幾くもなくして『新體詩抄』初編發行せられたり。作者は、山仙士外山正一、尙今居士矢田部良吉、巽軒居士井上哲次郎の三人にして、尙續編を出すへき計畫なりしも、實際刊行せられしは初編のみなりき。詩篇總て十九。巽軒、尙今二人の序を冠し、久米幹文の跋を附して出づ。十九首の中、創作は五首に止まり、他は總て英詩の翻譯なり。譯せられし英詩人はブルームフィールド、カムベル、ラニスン、グレイ、ロングフエロー、シークスピア、キングスレー等にして、就中カムベルの『英國海軍の歌』、ラニソンの『輕騎兵進撃の歌』等最人口に膾炙す。創作に在りては、『鎌倉大佛に詣て、感あり』、『四季の歌』、『拔刀隊の歌』等最注目するに足る。

新體詩の名稱及由來に就きては、前章既に之を説きつ。其が西詩の模倣に出で、

新體詩抄

外山、山

今矢田部尙

井上巽軒

若くは之が影響の下に成れるは、譯詩は更にも言はず、創作と雖明かに之を認むる事を得。其詩題、其形體を始として、思想の根本的調子に至るまで、一として之を反映せざるはなし。先づ形體に付て言へば、作者は在來國歌の形式たる三十一文字を棄て、寧ろ今様式を取り、之を西詩の體に應用し、七五一句一行をなし、數行を累ねて一首となし、或は四六八等、一定數の行を連ねて一節ストロフとなし、數節を累ねて一首をなせり。中に又間々脚韻を試みしあり。一節中、或は行を隔て、或は行を重ね、同一音の字を其行末に置けり。『四季の歌』の如き其好例なり。總て詩形は著しく長大となり、時としては長歌を駕し古詩を凌がんとす。素より西詩の雄大なるに比ぶべくもあらざれども、短歌發句の小天地に踟躕せし從來の眼を以てしては、誠に驚くべき進歩と言はざるべからず。次に其思想を見るに、從來の歌想たりし春花秋月の範圍を超え、神祕釋教戀無常の型式的表章を脱して幾多の新版圖を拓き、淺薄ながら多少の哲理を寓し、平凡ながら人生觀社會觀を謳ひ、又は抒情の一面に馳せたりし舊詩歌に加ふるに一脈叙事の分子を以てし、等しく花月を詠するにも、其着想の存する所、いたく從來と趣を異にし、蘆庵景樹の博大を以て尙夢想だも及ばざ



りし新景物は續々入り來り、總て思索想像の行く所に任せて敢て制埒を設けず、無礙自在にして拘束する所なし。斯くの如きは詩界の大進歩にして、文學思潮革新の事實と共に史上特筆すべき重要事件なりとす。

更に大膽なる試験と稱すべきは其用語なり。夫れ言語の分化發達は素と思想の分化發展に従ふ。詩想豊滿となり、趣味變遷を來さば、詩語亦増加變移して之に應せざるべからず。明治の歌界詩想の一大進化をなしたる今日に方り、獨り詩語の之に伴はずんば新詩想も遂に體現せらるゝの機なけん。曩に蘆庵景樹等平語を主張して歌語の發展を企圖せしも尙大勢依然として歌詞を定め、制詞忌詞を定め、自ら好んで壺中に住するを免れず。『新體詩抄』は即ち此歴史的病弊を打破して詩語の領域を擴張し、漢語を採り口語に及び、芭蕉蕪村が發句に於て成し、所を襲うて更に一層の新彩を加ふ。斯くの如きは從來の和歌に在りて最忌み嫌へる所にして、之を敢てせしは、即新體詩家がなし、新運動の主要なる部分に屬す。

上述の如く『新體詩抄』は種々の點に於て創始的試驗をなせり。而も此書の價值は、唯其の創始的なる點にのみ存し、詩篇其物の文學的價值は深く問ふに足らず。

然れども國民か新詩歌に對する憧憬發して茲に至りし者なれば、文學的價值の如何に係はらず、又和歌者流の固陋なる排斥的論議に係はらず、明治文壇に提供せられし新詩體として、遂に多數國民に迎へらるゝに至れり。

## 二、小説

坪内逍遙

明治新小説の發達は實に坪内雄藏に始まる。彼は名古屋の人、春の屋廬と號し又逍遙と號す、明治十六年東京大學文學部を出づるや、多年研鑽せし小説稗史に關する新運動を開始し、『小説神髓』を公にして小説革新を唱道すると同時に、創作『書生氣質』を出して彼の意見に基づける寫實小説の粉本を示しぬ。此作や洵に我明治小説の新時期を開きたる極めて重要な歴史的紀念なり。

此作詳くは『三讀當世書生氣質』と稱し、十八年五月『小説神髓』と共に其第一卷を出し、翌年一月に亘りて完結出版す。全部十七卷、署名して春の屋おぼる戲著と稱す。寫す所は東京に於ける當代學生の狀態にして、某英學塾に於ける數名の書生を捉へ來りて氣質の種々相を現はすべき標本となし、檢束なき社會に入りたる血氣の青年か、其氣質の異なるに従ひ、境遇の變るに従ひ、好否くさくの運命を捉ふるに

當世書生氣質



至る徑路を描き、以て明治文明の懷に生ひ立ち、新教育の許に長じたる一新階級即書生なる者が、新舊思想の衝突尙止まざる當時の社會に處せる状態に對して、諷刺の筆を逞うし、之を貫くに一書生小町田榮爾と藝妓田之次との情話を以てし、之を彩るに守山父子兄妹の奇遇を以てす。通篇脂粉の氣あり、情緒奔放の青年が外圍の誘惑の爲に身を誤り、又は誤らんとする情狀寫し得て委曲を極む。而して文章は詞に口語體を用ひ、地に雅文體を用ひ、交ふるに諧謔を以てし、極めて平易に且巧に書きなされたり。

此書一度出で、褒貶の聲四方より起りぬ。化政以來勸懲小説豪傑小説に馴れたる眼は此異様の新彩に驚き、十年以來政治小説演説小説に謳歌せる人々は此變體の作意を異しむぬ。然り。此小説は在來の者に比ぶれば、夥多の異彩あり。試みに其要を擧ぐれば、第一、其序に言へる如く「全編の趣向は専ら傍觀の心得にて寫眞を旨としてものせしにて、勸懲を度外に置き、此を訓誨の料にする」と之を獎誡の資にするとは讀者輩の心に「任せたれば、童蒙を訓ふるか如き口調固より存せず。作中の人物亦其趣を變じ、犬塚信乃白山雪若の如き道義の權化、關羽魯智深の如き模

範的英傑、悉く其跡を没して世間通常の書生となれり。第二、政治小説に見るか如く、作者の主張主義を吐露せんか爲に小説の趣向を借る事止みて、専ら世態人情を直寫する事となれり。第三、從來の小説中若し寫實方面にて類を同うする者を取らば、三馬一九乃至春水一派之に近けれども、膝栗毛の諧謔を存して其鄙野を止めず、梅曆の妖艶ありて其淫褻なし。若し諷刺の筆意滑稽の文致を以てすれば、浮世風呂西洋膝栗毛等其備たるべしと雖、眞面目の度に於て大なる徑庭あり。浮薄鄙猥なる從來の作物と伍すべきに非ず。第四、在來の小説が事件の變化に重きを置き、脚色を主として所謂目先の奇を求めたりしに反し、人物の性情に重きを置き、多少心理的描寫を試みたり。第五、文章は馬琴春水等に負ふ所多きは言を俟たずと雖、叙事抒情の際、寫實的傾向著しく入り來り、且外國文學の影響として脩辭の上に稍、新趣味を加へたり。之を要するに勸懲の陳腐を避け、善玉惡玉の舊型を捨て、人情本洒落本の淫猥を去り、政治小説の枯燥を除き、全然寫實的筆を以て新時代の生活を描き、童蒙教誡の卑域を脱して教養ある士人の翫賞に入りたりき。

『小説神髓』によりて蒔かれたりし寫實小説の種子は茲に至りて芽を萌し、『書生氣



質の名は忽ち讀み本草双紙の類を壓倒して世に布き流を汲んで筆を寫實小説に染むる者前後相踵いで輩出しぬ。是に於てか勸懲小説の勢力俄然として地に落ち爾來寫實の風天下を靡け文章に於ても新時代を表はすに適當なる一新文體を工夫して略成功せる者もあるに至れり。此點に於ては『書生氣質』の如き實に明治文學の新紀元を造れる重要な創作なり。

然り此作は紀元開拓の作なり。然れどもこは其歴史的價値の卓逸を表示する外何等の意義をも含めるに非ず。文學としての絶對の價値を判せんにはおのづから別途の考察を要す。蓋し此作の文學的價値は其歴史的價値の如く優逸なるに非ず。之を寫實小説の立脚地より見るも第一勸懲小説を排して起りしに係はらず其主旨又諷刺誨誠に在るを以て其目的に添はんとするの極動もすれば露骨なる諷刺に陥り人情世態の大寫真鏡たるべき者をして強いて諷誨の陰型に陥らしめんとす。勿論こは『小説神髓』に「模寫主意の小説には求めずして諷刺諷誨の法備はり暗に人を教化する力あり」と説ける旨を實にせる者ならんも開卷第一に「其さとは言はず語らずして讀む人々に悟らしむる覆車の誠因果の關係云々」と叙べ

しが如く本文中作者自ら此主旨を説ける箇所屢見えたり。其筆致も亦描寫に少くして説明に多く世態の模寫よりも寧ろ其の解説に近からんとす。第二人物を主として心理描寫に筆を着けたりと言ふも其は極めて低き程度に於て然るのみ。主人公として特に提出すべきなく各人の性格の悉く模糊たる類型に終れるは所謂氣質物の常態として暫く之を措くも全體の結構到底事件の變化に重きを置くを免れず。而も其變化や概ね偶然の機會に出で人物の性格より來る必然の結果ならず。奇禍奇遇等舊時代傳奇の面影を存する事多く特に大團圓に近づくや急轉直下奇機續發偶然は偶然を生みてめでたしくとなる所宛然夢幻劇の型なり。第三新舊思想の衝突を描いて切ならず内面的生活に存する深刻なる衝突を看過して唯魯文一流の外面的衝突にのみ着目せるの觀あり。第四其文體に於ても未新時代の寫實小説に相應する迄に發達せず全體の體裁爲永一派に比して著しき進歩なく特に地の雅文は掛詞文字鏤り等をもて飾れる馬琴流の七五調を用ゐたり。其他通篇諧謔に富みて輕妙を極むと雖多くは地口駄洒落の類にして所詮一丸魯文の餘睡に過ぎず。之を要するに『書生氣質』は全然新組織に成れる新時代の



作物に非ず。其の立脚地は新舊作風旋轉の中心に立ちて一代の潮流を喚起せる所に在りて存す。蓋し最嚴格なる意義に於て所謂過渡期の産物たり。

長谷川四迷

春の屋は續いて『妹と背鏡』内地雜居未來の夢を著はし、心ある青年之に倣ふ者尠からず。尾崎紅葉等の結社硯友社は漸く社員を増し、頻りに創作の練習を力めたりき。此時に方りて二葉亭主人長谷川四迷は、文壇未曾有の一新作を公にせり。『浮雲』即ち是なり。

「浮雲」

二十年『浮雲』第一編出版せられ、翌年第二編續刊せられ、共に春の屋主人、二葉亭四迷合著と署す。されど實は二葉亭一人の作にして春の屋の加筆を得しのみ。第三編は後れて二十二年秋、小説雜誌『都の花』に連載せられたり。總て十九回の章勳に分る。叔父に寄寓して某省に判任の出仕を勤むる内海文三、學才ありて世才足らず、冗官減員の際計らず免職となりしかば、叔父園田の後妻お政忽ち下司根性を現はし、曩に一人娘お勢の婿がねにと愛育せしに打て代り、彼を侮辱し薄遇して止まず。お勢は天性浮誇の質、學校に新教育を受け、文三の新議論に感服したりければ常に母に逆て文三を庇ふ。文三見て以て己に意ありとなし、かばお政の薄遇

にも堪へ、同僚にして戀敵なる本田の侮辱にも忍びぬ。然るにお勢始は本田の無學陋劣なるを忍みしが、本來の華美を好める、文三日頃の不活潑に飽きて本田の快活に親しむ。文三此真相を知らず、遂に之に怨を述べしに、お勢は文三を戀ひしにもあらず、本田を戀ひしにもあざれば、事の意外に驚き、且怒り且猛り、本田を疏んじ文三をも憎みぬ。文三尙も斷念し難く、種々の妄想を畫きつゝ、悶々の中尙去るに忍びずといふ筋を以て始終す。

『浮雲』の出づるや、世人は其内容形式共に、全然從來の作物と其選を異にするに驚き、『書生氣質』に比して隔世の感あるを認めたり。實に『浮雲』は『書生氣質』を過渡の橋梁として新時代に入りし小説界最初の創作なりき。思ふに『小説神髓』の所説を最忠實に體認して純粹なる新時代模寫小説の範となりしは、『書生氣質』に非ずして『浮雲』なり。固より前者は模寫小説の粉本なりしも、前項に見えたる幾多の事實は之をして該種小説の範たらしめず、創新の名譽は擧げて後者に歸せり。

其規模は狭小、其舞臺は園田一家の外に出でず、其時日は三句の中に止り、其主要人物は四人に過ぎず。『浮雲』の結構の單純なる事、從來小説の總てを超越す。然れ



とも一篇の波瀾は總て人物の性情に出で、脈絡貫通悉く一主人公を中心として之に集まり、所謂其綱を提くれは衆目悉く張るの趣ありて、全體一箇の有機的結合を形成す。描寫の當體は、主人公園田勢子の性格及之によりて惹き起されたる内海か心裡の葛藤にして、作者は其間に幾多の波瀾を構へて二人か心理解剖を試みたるなり。お政、本田の性格は特に言ふに足らず、内海亦有り古りたる人物なれども、其の勢子の真相を解する能はずして、半信半疑痛心煩悶を極むる所、お政に輕侮せられ本田に愚弄せられて憤懣心頭を衝けども、尙愛着の弱點、其の決心を腐らすあたり、心理描寫の筆委曲を極め、頗人情の幾微に觸る。勢子に至りては、作者か明治小説壇に提出せし一新性格にして、單純放恣輕燥開豁、事となく物となく新奇より新奇に移り行き、嘗て操守ある事なし。而も其新事物に移るや深く思ひ熱く見てするに非ず、唯、感染の至す所のみ。幼うして學問好なる隣家の少女に感染れ、入塾しては洋風好の塾頭に感染れ、退塾以後は朴茂なる内海に感染れ、其沈鬱に陥るや去つて快活なる本田に感染れぬ。要するに認識未覺醒せざる初心浮誇の一少女にして、一切の行爲、及行爲の因て來る心理の變化は總て此性格より起る。而して此性格こそ彼

の内海をして懊惱せしめ憤懣せしめ、從て『浮雲』一篇を成立せしめし所以の者なれ。』此作は、唯、上述の點のみを以てするも破天荒の小説といふべし。加ふるに性格描寫の技倆の卓逸なる、勢子の人物が殆ど彫り浮められたらんか如く躍動するあり。且其は全然當代人物の代表と見るべき一新性格にして、十八九年の比、皮相文明の光に眩惑して自覺なく省察なく、徂々として新奇を追へる一代民衆の陋態は遺憾なく此性格に現はれたり。思ふに『浮雲』亦一個諷刺の作、お勢をして新思想を代表せしめ、お政をして舊思想を代表せしめ、以て新舊文明の衝突を描かんと擬す。此事や『西洋膝栗毛』以來の各小説家の爲す所に異ならずと雖、之を觀察し之を批評する事、斯くの如く深刻に且嚴格なるは未之あらず、げに二十年頃の明治文明の描寫としての此篇の價値は、之をして嘗に歴史上に重きをなさしむるのみならず、文學其物の中に於ても輕視すべからざる地位を占めしむ。唯、其批判諷刺の筆、往々露骨に陥り、或は心理描寫の筆、往々事實を按配して讀者の想像推理を俟つ事をせず、直ちに作者の談理説明を以て之に充てたるを恨とす。例へば第五回勢子とお政との争を叙して是か新舊主義の衝突なりと明かに辭りたるか如き、或は結末二



回餘りに書き急ぎ描寫に勉めずして解説に終れるか如き頗る興味を殺く。第十六回勢子の性格解剖の條の如きも亦描かすして説く。の弊に陥り讀者玩味の餘地を奪へり。

とにかく此小説の内容は純然たる新時代の産物たり。然れどもかくの如きは獨り内容のみに非ず。其形式即文體に於ても亦空前の試験をなせり。「書生氣質」の文體は尙舊型を出つる能はさりしも『浮雲』に至りては全く創始に出で所謂言文一途を以て地と詞との全體を行り且詞は常に行を改めて地と分ち決して言者の名を冒頭に細注して地の文の中に書き下す事なし。此文體や實に寫實小説として此作を成功せしめし要素なり。蓋し文體は思想を盛る容器なれば或る思想には必ず最之に適切なる文體あらざるへからず。委曲周匝なる新時代の思想を以て觀察微細に入る寫實の筆を振はんとするに方り讀み本人情本の文體は到底之に添ふを得ず乃ち願みて一新文體を需めざるへからず。言文一途の新體は即此目的に對する最初の試験なりしなり。而して二葉亭か此體を用ゐるや時に冗漫の嫌なきに非ずと雖概して洒脫にして才氣に富む。特に自然を叙するや在來の

文學に見るへからざる清新の趣味に滿ち第三回の月光を寫す所第七回上野の秋色を描くあたり楚々として人に迫る者あり。

内容形式兩方面に於ける『浮雲』の得失は略之を盡しぬ。蓋し作者は固と西洋文學に通せる人其の泰西小説を讀破せる眼を以て『小説神髓』の所説を玩味し其神を持し來りて之を獨特の彩筆に寓し以て空前の作を成せり。而も其態度は春の屋が尙戲作者の風を離れさりしに反し純然たる文學者の態度を以てしたりき。

逍遙四迷の二作家出て、明治小説壇の風潮は一變し所謂寫實の風天下を動かして起り新小説の曙光爰に輝き出でぬ。事は十八年より二十二年の間に在り。

### 三、翻譯

泰西小説の翻譯は既に『花柳春話』に其基を開き爾來歴史小説政治小説の翻譯少からざりきと雖前章に述へしか如く此等譯者か之に對する態度は多くは政論家の其れにして純然たる文學者の其れに非ず。其種類に至りても傳奇的の一面に限られて寫實的方面の者未起らざりき且譯筆の技倆の如き頗る疑ふべき者ありき。逍遙は此方面に於ても亦卒先して手を下し純然たる文學者の態度を以て



リットン卿の『リエンジ』を譯し、『悲憤慨世士傳』と題して世に示しぬ。然れども此譯の内容は依然として歴史的なれば、之を新翻譯の曙光とせんより寧ろ在來の翻譯が一轉して斯壇の過渡期に入らんとする際の所産とせん方適當なるを覺ゆ。其内容に寫實的傾向を取り、其形式に比較的忠實洗練の譯筆を揮ひ、専門文學者の態度を以て之に對したる新翻譯小説の曙光は、實に思軒居士森田文藏の作なるべし。而して此氣運を鼓吹するに與りて最力ありしは、即雜誌『國民の友』なりき。

二十年春『國民の友』は徳富蘇峯によりて發刊せられぬ。政治、文學、宗教、社會の各方面に亘りて清新放膽の評論を試み、當時世に存せし總ての他の評論雜誌を壓倒して獨り文壇に雄視せしか、特に純文學の趨勢を觀察して新氣運を鼓吹し、或は文學欄を設け、或は春夏二期に文學附録を添へて當代作家の粹を集め、以て泰西文學の輸入、新文學の興隆に努力し、爾來『柵草紙』の出でし頃まで、隱然として獨り文學の保護者たりき。

思軒『國民の友』に據り、主として翻譯の方面を擔當し、載せし所の長短篇少からず。佛國ジュール・ベルヌ作『錢世界』二十年、及『大東號航海日記』二十一年、同ユーゴー作『替使

友』  
國民之

森田思軒

者『同年』探偵ユーベル』二十二年、及『哀史』其他『チヨツケ』『ヂッケンス』等の小品、總て彼の譯筆は間々『報知新聞』に掲げたるもあれど、概ね『國民の友』に出でたり。就中『探偵ユーベル』と『替使者』とは最世に喧傳し、居士の名爲に文壇に高く、遂にはユーゴーの紹介者、佛文學の輸入者として之を仰ぐに至りぬ。是に於てユーゴーの名一時斯界に重く、從來の翻譯界を獨占せる觀ありしリットンを壓して立ちぬ。此間の消息は不思議にも創作界に於ける政治小説等と寫實小説との消長と其步趨を同うす。勿論ユーゴーは所謂寫實派の詩人に非ずと雖、其主觀的、感情的、個人的傾向を有する點を以て、彼の客觀的、理性的、社交的傾向を有する歴史的小説に對照する時は、恰も前二者の關係に似たる者あり。とにかく佛文學輸入の端緒は居士によりて開かれ、曩に民權自由論の當時、中江兆民の筆によりて僅かに其片鱗を見得たる佛文學は續々紹介せらるゝの運に向へり。然れども、思軒の翻譯は總て英譯よりせる重譯なれば、絶世の才筆と雖、佛文學の眞趣を傳ふる事恐らくは難し。況やユーゴー其人は、内容の高尙ならん事を求むると同時に、形式即文章の完全無缺ならん事を力めたるに於てをや。且思軒の文體は漢文調洋文直譯體にして、當時に於てこ



を能く西文の情趣を傳へたりと持て嗤されて模倣者も尠からず生じたれ有り體に言へば、文字粗大に過ぎて精緻の情想を寫す事難く、剩へ多少の誤譯あるを否む能はざりき。されば居士は決して成功したる翻譯家に非ざると同時に、崇拜者の言ふ如き佛文學の輸入者に非ず。要するに尙純然たる新文學者たるに缺くる所あり。其の出所の政治小説家と等しく三田塾に養成せられたる新聞記者たるに於ても、其文體の當時新聞文學者の共通文體たる漢文調を擺脫せざる點に於ても正しく其半身を過渡時代に置けりと言ふべく、恰も創作壇に於ける『書生氣質』の地位を占めたり。若し夫れ『浮雲』の地位を占むべき者に至りては、吾人再び二葉亭四迷を推さざるべからず。

廿一年四迷は『あひびき』を『國民の友』に『めぐりあひびき』を『都の花』に出しぬ。共に魯國小説家ツルゲネーフの短篇なり。譯筆『浮雲』に似て縦横委曲情趣盡されば止まず。而もよく歐文の調を存して直譯體の詰屈を脱し、一脈清新の思想聲調を寄與して文壇に貢獻する所少からず。譯者は本邦に於ける最初の魯國文學紹介者たるのみならず、翻譯界全般に對して一新紀元を開ける者にして、爾來新壇の氣運初めて

長谷川四迷

動き、各國詩文の譯筆徐々として起りぬ。

斯くの如きは新體詩、小説及翻譯の三方面に於ける曙光の概観なり。事は十五年より二十一年に亘り、就中十八年以下三年間の現象に屬し、二十年以後盛運の基を開けり。然れども其他の文學、即劇詩、俳句、和歌等は、其新曙光を現はす事稍遅かりき。劇詩に在りては、依田學海、福地櫻痴の作を過渡として、二十八年逍遙か『桐一葉』を公にするに及びて初めて現はれ、俳句に在りては、所謂過渡の産物なる者無く、二十五年正岡子規出づるに及びて突如新光を漲らせ、和歌に在りては、落合直文等の作を過渡として二十八九年の比始めて現はれぬ。されば之等に關する詳細の叙述は暫く之を後節に譲り、先づ曙光を放ちし三種の文學に就き其發展の跡を尋ねんとす。

## 第二節 寫實小説の興起

文學思潮革新の運動ありて以來、各種の新文學の陸續興起しける中に獨り群を抜いて進歩の先登に立ちしは、即ち『書生氣質』『浮雲』の後を承けたる寫實小説なり



とす。而して此氣運に乘し、或は之に鞭つて一世を指導せしは、即ち尾崎紅葉、山田  
 美妙、及彼等を唱首とせる硯友社の人々なりき。抑も本邦寫實小説の由來を尋ぬ  
 るに、中古王朝の物語は概ね之に近く、降て江戸時代元祿の頃、浮世草子の形を以て  
 現はれ、爾來八文字屋本となり、洒落本となり、滑稽本となり、人情本となり、以て明治  
 文壇に移りしが、嚴格なる意義に於て寫實小説と言ふべきは、僅に西鶴等の作數篇  
 に過ぎず。其れも馬琴一輩の讀み本に壓倒せられ、元祿時代一朝の榮華を止めて  
 世は長へに傳奇小説の壇場なりき。此時に方り、春の屋二葉亭續いて紅葉美妙出  
 で、遙に西鶴を紹き、近く泰西小説の趣味を取り、以て新文壇に寫實の一派を開き、  
 歴史小説全盛の勢を挫いて西鶴を九泉の下に喚起せり。

十八年春『小説神髓』世に出づるに先づ事正に二ヶ月、大學豫備門在學の尾崎紅葉、  
 石橋思案、山田美妙齋、丸岡九華等好文の士相集まり、文會を結びて硯友社と名づけ、  
 各自創作の小説、戯文、紀行、俳諧、都々逸、端唄等を集めて『我樂多文庫』と題し、相批評し  
 て以て文學の研鑽に勉めぬ。爾來同志の社員漸く加はり、十九年末には川上眉山  
 人、巖谷澁山人、江見水蔭、岡田虚心亭、廣津柳浪、喜多川麻溪等十數人を増すに至れり。

硯友社  
 「我樂多  
 文庫」

斯る間に新文學勃興の機運漸く熟し、春の屋二葉亭相繼て立ち、國民の友』又發刊せ  
 られ、寫實小説の持囃さるゝ世となりしかば、二十一年遂に『我樂多文庫』を印刷發賣  
 する事となし、五月第一號を出せり。之を新文壇に於ける文學専門雜誌發刊の嚆  
 矢となす。當時此雜誌の體裁組織等は、柳北の『花月新誌』と相距る事遠からず、載す  
 る所、上述の種類の外、新體詩、狂歌、川柳等所有純文學及文界批評にして、或は言文一  
 致を以てし、或は雅俗折衷を以てし、總て戀と涙とを研究するを以て窮竟となす。  
 而も尙微々たる小冊子に過ぎず、作物未だ文壇を動かすに足らざりしも、社中の同  
 人悉く大學豫備門、獨逸協會學校其他に於て新教育を受けたる年少氣鋭の士なれ  
 ば、概して英語若くは獨語を解し、十九世紀學術の一般を覗ひ、泰西純文學の面影を  
 知り、從て其述作にはたのづから新趣味現はれ、其文體、修辭、句讀、記號を始め全體の  
 調子悉く明治の新彩を帯びたり。加ふるにこの新衣の下には江戸文學の深き愛  
 好と巧なる模倣とより出てたる固有風尚の醇なる有り。されば彼等が寫實の筆  
 を振ひ、戀と涙とを以て青春の思想に投するや、此等の作大に青年の間に行はれて、  
 隱然『浮雲』以後の小説壇を支配し、當時の批評界は硯友社を目するに文界の梁山泊



を以てするに至りき。げに硯友社は管に當時に於て梁山泊たりしのみならず、爾來長へに斯壇の一大勢力にして、社中の作家盛名を後日に馳せし者少からず、二十八九年に至る迄の我文學界は殆ど其壇場たるの觀ありき。而して社中殊に秀でて之か牛耳を執り、當時直ちに文名を爲し、者は、即ち美妙齋主人と紅葉山人となりき。

## 美妙齋

山田美妙  
「我樂多文庫」の發行に後る、事三月、山田美妙齋、其の短篇小説集「夏木立」を出して盛名を文壇に馳せぬ。美妙は東京の人、紅葉思案等と硯友社を結び「我樂多文庫」に従事せしが、尙婦人雜誌「以良都女」二十年刊を出し、某新聞紙にも寄稿して短篇の創作を公にしたりしより、舊稿新作取り交せて總て六篇、合して「夏木立」とは題せるなり。就中「籠の俘囚」は沙翁の詩篇「レイブ・オブ・ハウクレシアス」に倣ひて、古羅馬のアッピアスとパージニアとの物語を綴りし者、「花の茨、茨の花」は骨を獨逸に取りたる牧歌風の小品、「柿山伏」はモリエール風の諷刺的滑稽物、「賈金剛石」と「仇を恩」とは滑稽、他は可憐の御伽物、最後の「武藏野」は材を南北朝時代に取り、武藏野に於ける新田

一族の悲劇に織り成されたる一條の哀譚を寫し、者なり。總て歐文趣味の横溢せる嶄新の言文一致體を以て瑰麗の文字を行ひ、本邦文壇未だ見ざる抒情詩的色彩を小説の作品に現はし、讀む者をして泰西ロママンチック詩人の作品に接する思あらしむ。思ふに「夏木立」の諸篇は寫實的潮流の裡に成り出でし事勿論なり、雖「浮雲」の寫實とは大に趣を異にする者あり。「夏木立」には明治思想の一面を代表すべき園田お勢の如き性格を見る事能はず、新舊思想の衝突を表はすべきお勢母子の爭論を見る事能はず、はた心理の煩悶を解剖すべき内海文三の如き人物をも見る事能はず。唯「柿山伏」の一篇に、三十未滿の青年にて古今東西の文學を丸呑にせる一政治小説家を主人公となし、當時の政治小説の趣向と文章とを罵倒して完膚なからしめ、新聞記者輩の作品を諷刺して痛切を極むる有るのみにて、他は皆幽韻縹渺たる抒情詩の境に入り、「籠の俘囚」の「パージニア」「花の茨」の羊飼兒、「武藏野」の秩父民部及忍藻の如きは宛然詩中の人物なり。之を當代寫實小説を代表せる者として、固より「浮雲」の匹儔に非ざるなり。

「夏木立」の本領は内容に在らずして寧ろ形式に在り。其の文壇讚美の中心



となりしは思想の卓絶なるに由るに非ず、文章の清新瑰麗遠く俗流を抜けるに基く。言文一致は『浮雲』以來珍しからずと雖、文脈の上に著しく歐文の組織を交へ、情景を叙ふるに聯想想像の頗る廣潤なるを以てし、又各種の譬喩を縦横に使用する等に至りては遂に『浮雲』を凌ぐ。特に擬人法の如きは常に非情物の擬人のみにあらず、進んで抽象概念の擬人に及び、宛然洋文を讀むの感あらしむ。例へば「夜は根城を明け渡した竹箴に伏勢を張つて居た村雀は新に軍議を開き始め、闇の隙間から斫り込んで来る曉の光は次第に四方の暗を追ひのけ、遠山の角には茜の幕がわたり、遠近の溪間からは朝雲の狼烟が立昇る」(武藏野下)といふが如き、到底在來の文學に見るへからざる脩辭上の技巧となす。作者か文章に留意せるは『柿山伏』に政治小説者流の文章を諷刺せるにも著るく、特に『夏木立』のはし書を見るに其苦心亦鮮少に非るを知る。彼の述作は常に斯かる研究の結果として現はれ、絶えず新意匠と其試験とを世に提出す。彼が其儕輩を超えて一朝盛名を得し所以亦此點に存す。

『夏木立』發售の頃、美妙齋硯友社を去りて獨り文壇に立ち、二十一年『都の花』に花

車』を連載し、翌年『國民の友』春附録に『胡蝶』を出し、『ぬれ衣』を單行し、續て『都の花』に「此の子」及「いちこ姫」を掲げ、獨得の文章を以て益々文名を博しぬ。就中『胡蝶』は當年の傑作、紅葉の『色懺悔』と共に一時文壇を動かし、著るに材を平家の末路に取り、忠義との衝突に煩悶懊惱せる一少女胡蝶が悲劇的運命を描き出でし可憐の小説にして、其趣武藏野に似て脚色一層複雑に、主人公の人物一層明瞭に、其運命一層劇詩的なり。文章は得意の言文一致體、嶄新豊麗の致を儘にす。

斯くて言文一致の文體は文壇の歡迎する所となり、北邨散士を始として之に倣ふ者少からず。彼等の努力によりて種々彫琢せられ、粗笨なる口語も漸く醇化せられんとす。而して之を導て能く圓熟渾成の域に至らしめし者は、即二十七年以後に於ける紅葉及其他の小説家の力なり。

### 紅葉

明治文學史上の巨像尾崎紅葉は東京の人、十八年大學豫備門在學中、十九歳の青年を以て硯友社の牛耳を執り、『江島貝屏風』と題する一九流の戯文を處女作として、『風流京人形』、『紅子戯語』等數篇の滑稽物を『我樂多文庫』に掲げぬ。然れども之等は



尙同志間の研究試験の作に屬し、未だ以て紅葉の文名を爲すに足る者を含まざりき。斯かる間に『美妙齋』夏木立』を出して才名江湖に布きしかば、紅葉之に劣らざらんとし、奮つて嶄新の作物に従事し、遂に二十二年四月美妙の『胡蝶』と時を同うして『色懺悔』の一篇を得、乃ち之を世に問へり。

「色懺悔」

『二人比丘尼』色懺悔』は此年創刊の小説叢書『新著百種』の第一編として出づ。時代を説かず場所を定めざる一種の時代物なり。木枯吹きすさぶ山里の伏庵に、惜しや花の盛を墨染の衣に包みたる主客二人の比丘尼、身にしむ夜寒を紙帳に避けて語らふ中、縁なればにや送みに懐かしくて身の上を明かす。主の尼、頼む夫の討死に惜かぬ命を長らへて亡き跡を吊ふ由を語れば、客の尼は振分髪（うぶみ）の許嫁、悲しや戦國の習として敵味方に打分れ、鎧を削りて戦ふ中、懐しき其人は傷きて我方に病を養ひしに義理と恩愛と忠義とに身を責められて白刃一閃あへなくなり、し由を物語る。茲に二人の戀人の同一人なる事現はれて互に驚く時、板戸洩る日影、白くほのと明るる一夜。是其梗概なり。而して之を寫すに、雅俗折衷にもあらず、言文一致にもあらず、記號に富める一種異様の文體を以てし、之を彩るに彫琢の致を極めた

る絢爛の文辭を以てし、製本の意匠を凝して世に出でぬ。世評は噴々たり、褒貶自ら有り、雖、概して許すに當年の傑作を以てし、或は『胡蝶』にも勝れりと稱せられき。之を作者の側より見れば、此篇は美妙齋に對する紅葉の競技なり。彼が從來の戲筆を棄て、所謂涙を主眼とする時代物を作りしは、或は人目を一新せんとするに在りしか。其文體に多大の苦心をなして變風を創始せるは、亦是美妙か言文一致に對する抗争と見るべし。脚色に奇巧を求め、人物の類型を脱せざるは、從來の傳奇小説に於ける通病にして、此作亦之に洩れず。勿論讀み本一派に比ぶれば、人物事件多少自然の風姿を帯びたれども、性格歸趣茫として尋ねべきなく、絶て時代精神の面影を認めず。然れども其文章に至つては、洵に當代の逸品『色懺悔』をして重きを斯壇に爲さしめし所以の主たり。修辭的技巧は暫く措き、文體の側より見れば、先づ地の文と對話と其體を異にする事『書生氣質』等の如く、對話は淨瑠璃體に俗話調を混じたる者、地の文は雅俗折衷の變體にして、簡潔なる文句を種々の句讀記號を以て繋ぎ、各語句は概ね思想の上に印象を残すべき中心概念を提出するのみにて、他は一切之を讀者の想像に任せ、省略縱横、屢論理文法を破り、其手法恰も近



世印象派詩人のに似たり。此變體は、言文一致雅俗折衷共に好ましからざるよりして苦心慘愴の末に得たる者にて、思ふに紅葉が私淑愛讀したりし西鶴也有が俳文に學びて、其簡潔と餘情とを取りしなるべし。

西鶴復活の氣運は此時より漸く熟しぬ。此事や固く紅葉一派の作者か私淑する所あるに出つと雖、之を文壇の趨勢に見る時は、たのづから二三の因縁を數へらる。第一は當時古文學復興の大潮流が西鶴に及べる事、第二寫實的傾向の傳播と共に寫實家としての西鶴の價値の認められし事、第三言文一致體の弊に倦みて理想に近き文體を西鶴に得し事即ち是なり。先づ古文學復興の潮流は前章既に其大勢を述べし如く、和歌和文より院本小説の類に及び、稗史出版社は夙く馬琴物を翻刻し、叢書閣は次て近松戯曲を翻刻したりしが、是に至りて元祿時代文學の明星たる西鶴に向つて尙古の眼を放ちしなりき。次に春の屋以來寫實を以て旗幟とせる作家が寫實家の典型を我固有文學に求むるや、春水の沃冶三馬の奇警、可ならざるに非ずと雖、西鶴の着眼警拔觀察銳利、巧に世態人情の一部を描き社會裏面の消息を寫す筆力遙に之に超えたるを以て、衆目の觀る所期せずして之に就きぬ。

第三の文體に關する西鶴の特點は彼の崇拜を一世に瀰漫せしめし最大の動力なり。是より先き、美妙齋の言文一致體の出でしや、天下其新彩を謳歌せりと雖、此文體は委曲精緻の得ありて動もすれば冗漫繁瑣の失あり。揮灑自在の利ありて往々含蓄餘韻に乏しき弊あり。且語句の末、概同一の動詞助動詞に終るを以て、文體おのづから單調に流れ、勁健の風を缺き、又平談俗語に近きを以て、章句おのづから雅致に乏しく、品位亦足らず。是に於て新しき人情と新しき世態とを寫すへき唯一の文體として採用せられたる言文一致體は、其試験の最中に於て早く既に弊に堪へずと見做され、彫琢醇化の致を極め盡さるに方り、既に世より見離されんとす。而も之に代るへき好文體は果して文壇に存せりや。讀本體を取らんか、其淺漫なる七五調、懸詞文字鏗の連續を如何せん。滑稽本體を取らんか、含蓄風韻に乏しくして卑野枯淡に傾くを如何せん。獨り西鶴の筆致、平民的にして奇警簡淨輕妙の趣を具へ、文辭卑近にして含蓄甚饒し。古今文學の中、若し明治の世態人情を寫すに堪る文體を求むへくんば、西鶴を措て他に在らざるなり。是に於てか西鶴を呼ぶ聲は夙く『夏木立』に見え、續いて『色懺悔』を評せる批評家に現はれ、紅葉の好尙



に著はれ、遂に幸田露伴が『國民の友』に西鶴を論せる頃(二十三年)に至りて殆ど興衰の口に上りぬ。

此時より紅葉は西鶴を基礎とせる新なる雅俗折衷體を編み出で、暫く逍遙したりし傳奇的世界を去りて現實的世界に歸り、『色懺悔』に試みし時代物を棄て、直に『浮雲』の跡を追ひぬ。爾來二十七年の頃に至る迄、『文庫』、『小説群芳』、『國民の友』、『都の花』、『讀賣新聞』、『聚芳十種』及『江戸紫』等、新聞雜誌叢書に出し、幾多の小説は、作意文體一として西鶴の影響を受けざるはなし。二十三年『國民の友』に掲げし『拈華微笑』、『新作十二番』に出でし『此のぬし』、『讀賣』に出でし『夏瘦』、『新色懺悔』、『二十四年』、『都の花』に出でし『二人女房』、『讀賣』に出でし『伽羅枕』、『おぼろ舟』、『むき玉子』、『二十五年』、『讀賣』に出でし『三人妻』、『二十七年』、『同新聞』に出でし『心の闇』等は、該期間に於ける佳作と稱せらる。

二人女房  
「伽羅枕」

『二人女房』と『伽羅枕』とは、西鶴の影響の下に立てる紅葉の作を代表する好箇の標本なり。前者は官省の裨吏を勤むる士族の娘二人が縁談より結婚懷妊に至るまでの運命を叙し、姉は美、妹は醜、姉は伊達、妹は地味、性情異なるに従ひて好悪を異に

し、姉は官吏に歸き、豪快一時の夢にして家道零落、姉小姑の嫉惡に苦勞絶間なく、妹は幼馴染の職工に歸きて平和幸福に世を送る状態を描き、二者最後の運命に大差を來せる始末を明にせり。後者は傾城佐太夫とて一代に鳴りし廊女、今は六十歳の嫗となりて昔十四より二十までの泥水生活を懺悔せる體にものせし者。『芳き名を傳へずはあらぬ者』にてもあれ世に知られんと思ひなりし意氣あり張ある佐太夫が、仔細あつて黄金を好まず、好男子を好まず、一癖者の名は廓中に隠もなし。情意氣張づくにしては随分此命を吝まず、見事立派と言はるゝ程の事をしてのけ、死後末代まで吉原の佐太夫はと、黄金一式の遊女を男の怨言の中に引かれたき身の本願と揚言しての傾城生活、名殘なく寫し出されたり。二者共に西鶴の筆意に學び、簡淨なる雅俗折衷體を取れり。然れども『二人女房』は其作風體裁むしろ『浮雲』に近く、地の文と對話とを分ち、作中人物の心理解剖を試み、其精緻ならん事を求むる極、往々談理の筆を執つて説明の域に入る事あるなど、利弊共に其の面影を帯び、總て所謂模寫小説の系統を引きたり。且西鶴の作は其歸趣茫として尋ぬへからざるに反し、此作は自ら一篇の歸趣有り。姉妹の運命に寄せたる作者の人生觀、狹



小なりと雖存す。其西鶴に則りし所は、見來れば偏に文章に集まり文致酷似するの極、往々利弊共に學び、輕妙達筆の利あると共に文情冷靜一味同情の温さを缺くか如き、全く西鶴の面影を傳へたり。此の傾向は『拈華微笑』此主より『新色懺悔』に至りて益々烈しく、遂には文致のみならず、内容即ち思想まで、西鶴の得失併せ學ぶに至れり。蓋し西鶴は熱烈なる同情を以て自然と人生との種々相を描寫せる作家に非ず。大なる詩人は温なる同情を以て觀察し、且描寫す。故に筆に脈々の温情あり。大なる小説家は廣く人生の種々相を寫す。故に其取材の範圍人物の種類おのづから弘大なり。西鶴の筆には源氏物語に見るか如き同情なく、彼の小説には背景を飾るべき自然なく、彼の人生は近松のみに比して遙に狭小なり。思ふに西鶴は諷刺家なり。社會の一部に向つて銳利なる觀察眼を放ち、恰も利害相關せざる傍觀者の如く、冷々として之を評し去る。而も其社會の一部分なる者は、不幸にして當時の煩惱界、特に色魔境なりき。斯くの如きは即西鶴の特徴にして、紅葉は其得失共に之を學べりしなり。而して其學ぶや、素と文章筆法に始まりしも、形式と内容とは峻別すべき者ならず、形おのづから心を誘ひて終に其思想をも模倣するに至れり。『伽羅枕』の如きは即ち想形共に純然たる西鶴の模倣にして、此傾向の絶頂に達せし者なりき。

『伽羅枕』は新思潮に觸れたる明治の人生の真相を描きしにもあらず。明治文明の具體的批評にもあらず。又作者胸中の或觀念の社會現象に映發せる者にも非ず。はた性格の特殊なる者ありて、之より生み出されたる事件の變化を示せるにも非ず。唯、彼の人生の一面なる花柳の煩惱界に向つて銳利精緻なる觀察眼を放ち、傾城社會の豪傑、意氣と張りとの權化、粹道の神としての佐太夫を寫し出し、のみ。而も其は明治以前の事、元祿以來醗釀し來りし大都の花街生活及花街氣質、即ち從來戯作者の寫し誇りし所を描きしのみ。畢竟は西鶴の餘唾、戯作者の境地にして、見來れば宛然たる紅葉の『好色一代女』なり。されば明治の寫實小説としての價値は寧ろ『二人女房』の下に在るべし。然れども文章は實に模倣の妙を極め、長篇恰も無縫の天衣の如く、一部として弛廢を見ず。其の輕妙簡勁の運筆、特に毎回結末の急轉直下、軽く切り上ぐるあたり、優に西鶴を凌ぎ、瀟洒天麗を以て當代に鳴りぬ。

西鶴模倣は『伽羅枕』に至りて極まりぬ。『臙舟』むき玉子』合巻』二人女』の中以後



の作に至りて其文章、其思想漸く一家を爲さんとし、西鶴的なる形と想との中、おのづから紅葉の特色を帯び來れり。「福舟」と「むき玉子」とは昔氣質の二親に育てられ、氣立優しくよろづ内わに、而も情厚くて容顏なき佳人が、貧に迫られて親思ひの一念、何も世ぞと諦めて奉公に出づる悲み、終に前者のお藤は妾となり、後者のお喜代は繪師の模型となりし始末を寫し、「三人妻」は所謂明治紳商の一型とも見るべき。葛城餘五郎に仕ふる三人の嬖妾を描ける長篇にして、お才は固と藝者の中の藝者と世間に知られ、意地飽くまでも強き江戸張りの才藏が、葛城の巧計に脆くも根引せられし困ひ者、紅梅は「初々しき中に無量の情ありて媚を作らぬに媚ある」地女のお角が、河竹の勤に等しき奉公先より望叶ひて葛城に引取られし嬖ひ者、お艶は美色を烙鐵に傷けもせて、二十四まで春を護りて指もさへせざりし一淑女が、ゆくりなく色魔葛城の目に觸れて遂に其漁色の犠牲となりし寵妾、三人三様の趣、其性情の異なるによりて種々の波瀾を起す運命の變遷を叙し、「心の闇」は人を戀すれども遂げらるべくもあらぬ身の、唯、其人の常乙女にて我に情をかけん事をあたに願へる座頭佐之市のあはれを寫せる者なるが、個々の人物に注目を傾すへき新性格なく、

描寫の對象動もすれば醜穢に陥らんとする色魔界なる點に於ては、依然として舊型を出てすと雖、尙「三人妻」の紅梅の如く、性情寫實の筆の渾成に近きあり。脚色に於ても「むき玉子」の如き清新にして自然なるあり。特に筆致の輕妙に附帶せる西鶴の弊、即ち筆に同情を缺き、涙を描くも哀を寫すも、共に冷酷なる批評的筆法に陥るの缺點を擺脫し、變には、佐太夫が涙を揮ひ盡して今は世を茶にせる氣鋒は、寒く冷くして當るべからざりしも、お藤お喜代佐の市等に至りては、涙あり情あり、讀み來りて一種の温みを感じゆ。紅葉の作は斯くの如くにして西鶴を脱し、漸く自家の特色を發揮し初めぬ。

以上は紅葉が此期に於ける作の大體なり。之を通觀するに、着筆概ね平淡の境に於てし、脚色に赫新なる者なく、人物に奇趣ある者なく、極めて平凡に極めて自然なる人情の妙用を寫せり。而して其主人公を求むるや概ね女性に於てし、其社會を描くや其局部に偏す。舞臺は東京に於ける中流以下の社會を出てず。而も筆に上る所は多く色魔の煩惱界に限らる。其一生の艶筆を傾倒せし所は、即ち此小範圍に於ける女性の種々相を描き、性情の自然なる發展を寫すに在り。思ふに紅



葉は社會よりは寧ろ人間を観察し、人間よりも寧ろ女性を観察し、女子の性格よりも寧ろ其心理變化を観察せり。故に當時に於ける紅葉の女性は、一として特異の性格を有するなく、一として時代の真相を表すべき性格を備ふるなし。此點よりすれば、紅葉は寫實家と稱せんには狹隘に過ぎたり。唯、其の心理解剖を試るや、彩筆縱横、情緒自然の發展を窮め盡さずんば止まず。特に女性の弱點を描いて精緻を極めたり。蓋し女性は智に薄くして情に厚く、細心にして神経敏に過ぎ、猜忌嫉妬の念強くして而も虚榮心に充てる者なれば、其性格に於て既に悲運を構成すべき要素を具ふ。加ふるに女性か社會に於ける地位乃至境遇は益、此の弱點を大ならしめ、遂に彼等をして一生を涙の中に送らしむるに至る。紅葉は乃ち斯る弱點をお銀姉妹に描き、お藤お喜代に描き、お才紅梅お艶に描きぬ。就中後三者に就ての此點の描寫は委曲にして痛切を極め、張と意地とに名を賣つて、思ふ一人に情を立て、抜く白金才藏も、此弱點の爲に脆くも葛城の巧みに陥り、大家に仕へて歷々に立交り、容色百人に勝れたるに思ひ上りし鹽煎餅屋の娘紅梅が、遂に身を葛城に任するに至りしは亦此弱點の致す所。況して彼の浮きたる世上の縁組とやらを嫌

うて運命を琴の一技に托したりした艶が、葛城の口車に乗せられておぞくも容姿を大都會に輝さん心驕りを起し、以て夫婦といふ事人の身にせずば濟まぬ契と思ひなし、更に色魔葛城に對する終天の恨を呑んで之に従ふに至りしが如きは、此弱點の最剴切に表されたる者といふべし。然り、作者の筆は此方面に於て成功の域に達せり。然れども、此弱點や個性の發現にあらず婦人通有の情緒なり。人情自然の步趨を追うて女性心理の解剖をなさん者の必到達すべき結論なり。故に此等の作は、女性を描けりといふよりも寧ろ情感の自然を寫せりといふべく、情感の種々相を寫せりといふよりも寧ろ微妙の情操を描き出たりといふべし。

斯くの如きは、當時文壇の梁山泊たる硯友社を率ゐたりし紅葉の概観なり。顧みて該社の諸豪を歴観するに、概ね社中一流の艶筆を以て少からぬ述作をなせりと雖、未だ大名を世に馳するに至らず、未だ自家の特色を構成するに至らず。然れども其二三子既に紅葉と雁行せんとする者なきに非ず。巖谷漣山人、石橋思案外史、廣津柳浪、川上眉山人の如き、即ち是なり。

漣山人は東京の人、又大江小波と號し、瀟洒輕妙の筆、善く可憐なる年少男女を描



き、概純潔清秀の趣を帯ぶ。二十二年『新著百種』に出でし『妹背具』を始として『片糸』『友禪染』等當時の作皆此類なり。然り山人の特色爰に在るを以て、適する所は小説よりも寧ろ少年文學に在り。されは二十四年『こがね丸』を作りし以來、自家の本領に向つて歩を進め、小説の筆を措いて御伽文學の方面に染め、或は少年雜誌に執筆し、或は古來の昔噺を編纂發行し、或は内外の御伽噺を紹介し、例の輕妙流麗の筆を以て此方面に貢獻する所少からず。遂に少年文學の壇上に獨占の名を擡にしたりき。然れども謎の製作は少年文學として決して上乘の者に非ず。蓋し少年文學は其情趣清高にして温き同情の溢るゝ者無かるべからず。然るに謎の作、輕妙餘りありて浮薄に陥り、瀟洒餘ありて眞面目を缺き、所謂江戸式恬淡の氣象横溢して熱烈なる情味に乏し。且作者か好んで用ゐる滑稽は、往々駄洒落落語の域に入る事あり。故によく少年をして笑はしむるを得べきも、よく樂ましめ、よく清からしめ、よく高からしむるに至りては未だ完璧を望むべからず。唯少年文學唯一の作家として明治文壇の異彩たるに至つては、特筆して傳ふべきなり。

石橋思案

思案外史は同く東京の人、前者と等しく言文一致體を以て小説の作をなし、又滑

稽文を善くして屢、駄洒落を交へたる批評文諷刺文をもものしき。『新著百種』に收めたる『乙女心』『小説群芳』に收めたる『京鹿子』等は創作中の佳篇と稱せらる。惜哉秀才遂に伸びず。一時『我樂多文庫』に盛名を博せしのみにて彼れの時代は去り、爾後唯、筆路の輕妙を讚美せらるゝのみなりき。

廣津柳浪

柳浪も亦東京の人、其の小説を公にせしは、蓋し二十一年自己の經營にかゝる雜誌『大和錦』に掲げたりし『二おもて』に始まる。次て『新著百種』に『殘菊』をもものし、爾來『いとこし子』『糸の亂れ』『五枚姿繪』等數篇を出し、が、未大なる成功を見ざりき。されど『殘菊』の如き、人情の極めて深刻なる一面を描き、煩悶あり苦悶ある境遇に於ける情緒の活動を寫して、美妙紅葉以外に觀察着筆の新なるを出し、以て後來大に發達すべき作者の特色を萌し初めたり。『五枚姿繪』亦此系統を引いて生ひ先の有望なるを示せり。

川上眉山

眉山人は亦東京の人、二十三年大學を退きて専ら文筆に従事し、夙に筆力の雅健なるを以て著はれ、『我樂多文庫』以來、也有許六の俳文に學びて、瀟洒艶麗の中一種の滋味ある文章をもものし、以て紅葉と併稱せられたり。然れども二十二年の頃、『黃



菊白菊』『雪折竹』『墨染櫻』等より二十八年に至るまでの小説には、未名作として休ふべきなし。茲に唯其筆力を稱へて發達を後日に見ん。

以上四家の外、尙江見水蔭、丸岡九華、岡田虚心亭、渡邊乙羽、中村花瘦等あり。「我樂多文庫』及其改題『文庫』を始め、『新著百種』、『都の花』、『文學世界』、『小説百家選』等に多少の創作を出せり。

## 露伴

紅葉が硯友社を率ゐ、雅俗折衷體を探りて寫實の大飾を翫すや、美妙は『胡蝶』以來の作亦往時の觀無く、紅葉獨り群作家の上に立ちて小説界を指導したりき。此時に方りて、同じく寫實の流を汲み、同じく西鶴の文體を學びし一作家の起りて紅葉と馳聘せるあり。幸田露伴即ち是なり。

明治文壇の將星として文學史上に卓立する露伴は亦東京の人、二十三年の初、其處女作『露團々』を『都の花』に連載し、續いて『刹那』を『文庫』に掲げ、夙く一種の異彩を帯へる筆力を以て世人の注意を喚起したりしが、同年秋風流佛を『新著百種』に出すや、超邁の想と絢爛の筆と、二つなから時流を抜き、盛名一時に世に布きぬ。爾來『奇

男兒』、『對獨體』、『綠外縁』をも題す『眞美人』を経て二十三年『國民の友』夏期附録に『一口劍』を出し、二十四年『新葉末集』を公にし、二十五年『尾花集』に『五重塔』を收めて出版するに及び、彩光益、發揮して當代並ぶ者なき小説壇の飾りとなれり。

露伴の文章は言ふまでもなく西鶴に出てたり。彼が西鶴に私淑せるは、夙く『國民の友』に同情ある筆法を以て西鶴を紹介せるにても知らるべく、其の初期の作に在りては、作意文體共に元祿の面影を傳へたる者少からず。特に『刹那』の如き、一刹那の中心機一轉するを主題として人情の或一面を寫さんと試みたる小篇三を合せ、全然西鶴の作風を紹介げり。『奇男兒』、『新葉末集』亦よく元祿の神を傳へ、『風流佛』に至りては更に靈動の妙を極め、臨終正念違はず、安らかなる大往生、南無阿彌陀佛は嬌喉に粹の果を送り、三重、鳥部野一片の煙となつて御法の風に舞扇、極樂に歌舞の女菩薩一員増したる事疑なしと、様子知りたる和尚様隨喜の涙を落されし(第三)と結ぶあたり、消化し盡せりといふべし。此點に於ては露伴の筆は紅葉の『新色懺悔』、『伽羅枕』と等しなみに元祿の模倣と稱するを得べし。然れども彼も亦紅葉の如く、永く模倣の域に止まらず、出て、一家を成し、自己の特色を發揮して雄を一代



に稱へたり。而も其文や紅葉と相距る雲泥、紅葉の天艶に對して豪健、優麗に對して絢爛、兩々相照して限なき興趣を具ふ。而して其筆力に至りては、情景並び寫して微に入り幽を闡き、警句屢、口を衝て出づる所、美妙紅葉も之に及ばず。『風流佛』第九回、一向尊念佛を刻む條、特に佛體を飾りし、種々の花を削り去る所、續いては第十回、幻に現に戀人と語り、在りし昔を思ひ出で、無我夢中の境に入るあたり、若くは『五重塔』三十二回、夜叉王一齊に暴れ出す状態を描いて、凄壯毛髮を豎たしむる條の如き、洵に渾成の美術たるを得べし。

斯くの如く露伴は其文章に於て既に西鶴を離れたり。然らば其内容は如何。紅葉は前述の如く形式と共に内容をも模倣し、後出て、一家をなし、時に至りても、尙所謂『女物語』の連續に元祿作家の面影を存したりしが、露伴の構想は全然其趣を異にし、世態人情の種々相を觀察して之を活寫せし西鶴、紅葉の寫實の筆を學はずして、常に作者の意志より出てたる一定の觀念を以て貫き、又情海に浮沈する所謂浮世女の生活を描ける西鶴、紅葉の純筆に學はずして、好んで意氣在り情あり總ての障害を焼き盡すへき熱烈の一念を懷ける男子を描けり。『風流佛』『一口劍』

## 『五重塔』

『五重塔』の如きは此點に於ける好箇の代表者にして、技藝に對する無上の信仰と無限の熱愛とは全篇を支配する精髓たり。就中『五重塔』一篇最世に喧傳せらる。江都の棟梁に川越源太とて江戸子の生粹、名うての番匠あり。谷中感應寺の塔の建立を受負ひしが、爰に大工十兵衛、技倆は人に劣るべしと覺えねど、才氣足らねば馬鹿よ、のつそりよと蔑まれ、名玉空しく源太の役に服して光を潜むる者あり。之を聞きて執着の念止まず。濟まぬと知りながら意を決して思ある親方の向に廻り、棟梁を己に引受けんと計りぬ。源太は江戸子腹の滑くさばけて讓歩又讓歩、遂に一切を舉げて十兵衛に委し、尙も從來の計畫調査の書類を贈りて助成せんと申出てぬ。然るに自己の技倆を確信せる一刻者、斷乎として其親切を拒み、怒れる源太が意趣返し、の宣言にも恐ぢず、源太が子分の暗撃に劍を負ひしも屈せず、のつそりと嘲る數多の工人を督勵して遂に金剛力士が魔軍を睨んで十六丈の姿を現じ、坤軸動かす足踏して巖上に立つたる如き五重塔を造り出でぬ。落成の式近くなつて何事ぞや。一夜半の鐘の音、曇つて平日に似つかず耳きたなく、満天の夜叉一時に荒れ出し、暴風暴雨天地晦冥、塔は搖き、軌り、又撓む。十兵衛は立てり。やをれ彼



の塔倒るゝは愚か釘一本抜け板一枚動く事あらば生きて居ようかと生雲塔の頂に上りて勾欄を握み血眼開きて暗黒を睥睨せる様凄じく、手には六分鑿今にも之を含みて十六丈を真倒に飛び下りなんとす。而も風雨は止みぬ。生雲五層の巨塔は昂然として屹立せり。江戸中の堂塔破れさるは無かりしを目にせる萬衆は、驚異の眼を以て十兵衛の技倆と熱中とを讃歎し、川越の源太も遂に屈しぬ。是れ『五重塔』の梗概なり。一篇女物語を含まず又戀愛譚を帯びず。其中心思想を構成する者は、技術家が其の技術に對する無限の愛着と牢固たる自信なり。其精神的製作の自然界及人間界に對する至大の權威なり。實に此思想は實に『五重塔』の中心を形作るのみならず、廣く露伴の小説に入りて隨所其中心となれり。試みに筆を復して『五重塔』以前の作を檢せん。

露伴の小説に現はれたる思想を知らんとする者は、先づ小説中の人物を見るべし。『新葉末集』の西村道也が多才多藝多情多欲の諸質を具へ、所謂粹道の神たる觀あるは、是れ恰も紅葉の『伽羅枕』に於けるが如く、元祿模倣の勢力が、文章のみならず、人物の性格にまで及びし者にして、むしろ露伴の眞面目に非すと雖、尙心機靈活の

妖物として、一片の意氣地没すべからざる者あるは、即ち西鶴以外、此作者の一特質なるべし。げに此意氣や、露伴の作を通じて存する人物の特性の一にして、『刹那』の風連より『五重塔』の源太に至るまで、皆同一轍に出づ。一世武士の遊惰を憤りて、村政の一刀朱鞘に黒漆もて何時にても死に申候と記せし『奇男兒』の喜劍は、やかて針程も心に面白き事あらば命さへ呉れてやる男、人を救うて恩に着せるは大の嫌なる『風流佛』の珠運なり。世に捨てられて世を捨て、神を罵り佛を憤り、今世に若し正體在さば針の先で衝てやりたきまで心逼りたる『對偶體』のお妙は、やかて釋迦を大詩人と稱へて世の短見者流を罵殺せる『毒朱唇』の女なり。三十二相具足の美人を需めて得ずんば天帝に決闘を申込まんといきまく『眞美人』の主人公は、やかて無上の美詩を需めて世にすね我儘を盡せる『血紅星』の皆非居士なり。露伴の作中かくの如き意氣あり張あり、俠氣と奇氣とを併せ有する人物を見ざる事蓋し稀なり。然れどもかゝる類型的性格は、ようせずば一種の性癖若くは傾向に陥り、一步を誤れば單調なる仁俠一式の人物とならんとす。當代の批評家『奇男兒』に讃歎する者ありきと雖、今日より之を見るに斯かる性格は決して露伴の價値を高ふする所以



に非ず。作者の中心思想を形作る人物に至りては全然別種の性格に求めざるべからず。

別種の性格とは何ぞや。藝術に對する非常の熱愛を有する者即是なり。露伴が作に特有なる氣象は、即ち此の一技一藝に達せし人若くは之に憧るゝ人が、無限の執着と洪大なる同情とを以て其技藝に對し、意力と情緒と二つなから高調に達して一身を之に抛つ所に存す。試みに見よ。『眞美人』は一場の落語に過ぎずと雖、其主人公は眞美に對する愛慕者なり。『風流佛』の珠運は自家の藝術たる彫刻に對する執著の念止み難き者なり。『毒朱唇』の女主人公は大詩人に對する深甚の同情を體現せる者なり。『一口劍』の主人公は鍛刀に對する狂熱的愛著を懷く者なり。『五重塔』の十兵衛は木匠の術に對し献身の執著、動かすべからざる者なり。『血紅星』の皆非は唯、專念に詩を思ふ一個の畸人なり。『新葉末集』は元祿模倣の頂點ながら尙脱俗の益師淨珠老を點出するを見る。思ふに此等は總て是一個奇矯の性格、現實の社會に於ける普遍的の者に非ずして、其一角に存する特殊の氣質なり。而も其の描寫たるや此等性格の忠實なる寫實的筆路に出でずして、悉く作者理想の

熱火を以て陶冶醇化し、多少超世間的の色彩を有する者として描出する理想的筆致を取れり。此性格や實に露伴の小説の中心思想を形作る重要なる者にして、彼の前條に述べし意氣俠氣の如きは畢竟一の屬性たるに過ぎず。然れども作者の想髓は、斯かる性格が現はす藝術家の自信と自家の藝術に對する無限の愛著とのみにして止まらざるなり。

作者が其高調の詩筆を驅つて寫し出でし所は進んで此等藝術家の精神的製作が永遠の生命を有する事と、其作物の自然界乃至人間界に對して至大の權威を有する事との熱烈なる信仰に及べり。實にや吾生は須臾なり。蜉蝣に等しき人間か、斯の轉瞬の生涯に經營する所の者、孰か亦須臾ならざるべき。人の力に出づる者一として不壞不滅なる者なきなり。一代の功業久しからずして跡方もなきは恰も結びては消ゆる泡沫にも似たり。唯、彼の藝術家の手に成り出づる精神的作物のみは、所有破壊の力に抗して永劫の世に活く。之を作り出でし人間其者も之を破滅する力無く、人力を超越したる大自然の力も之を破滅する能はず。露伴の小説が描ける究竟事象は即ち斯の信仰に外ならず。他作家に在りては往々究竟



事象として作中重きをなす戀愛の描寫の如きは露伴に在りては決して其の要部に非ず。『風流佛』に見えたる熾烈なる戀愛は、其の描寫の妙直に人の肺腑を衝く者ありと雖、畢竟永劫普遍の一靈作風流佛の一軀を得んか爲の所縁に過ぎずして、戀愛其物の轉瞬の性質に對照して益、藝術品の永劫的性質を明瞭ならしむるを得るなり。

斯くの如きは即ち露伴の小説に現はれたる思想なり。『風流佛』、『口劍』、『五重塔』は殆ど此思想を體現せる者にして、特に『五重塔』の十兵衛は上述性格の好箇の標本たるべく、彼の篇中の絶唱と稱せらるゝ暴風雨の一段には、作者が人天の關係に於ける信仰の明かに現はるゝを看取すべし。人は到底天に勝たず。而も往々天を贖す者あり。飛天夜叉王一度怒つて此等贖天の人間を廢懲す。當る者破壊せざる無く、人の經營せる者一として全きなし。唯高尙なる心靈より出てたる卓越の藝術のみ獨り昂然として千古滅せず、天の威力も之に加ふる能はず、直立十六丈の生雲塔は長へに動かさりき。斯くの如きは固と是れ抒情詩の吟域に入るべき者、現實界の事象を醇化して高く理想の仙界に造る。等しく寫實小説の流を汲むと

雖、硯友社一流の寫實とは相距る事頗る遠し。之を此節に序するは唯、其源流を同くするか故のみ。

是に於てか吾人は彼の硯友社一派の代表者たる紅葉と比較するの甚興味あるを思ふ。夫れ紅葉は都市生活の寫實小説家なり。其の觀察の及ぶ所頗る狹隘にして、人物や舞臺や、常に作者主觀の限界を出です。到底彼の人生の種々相を包括し、千狀萬態の社會人物を驅使する客觀的寫實の大筆力を望むべからずと雖、描寫の方法は頗る客觀的に近し。故に其の假作の人物は、假令作者の性格に似、其主觀に入り、易き範圍に限らると雖、悉く現實の社會に見らるべき性格にして、決して作者の意志を以て削り出でたる者に非ず。露伴に至りては全然趣を異にし、其想を構ふるや常に一個の觀念の上に立ち、其人物を描くや常に一個の理想の上に寄す。故に其弊流れて脚色の單調となり、人物の一律となり、作者其人の面影至る所に其光采を閃出す。蓋し作者學博く識高く、篤く藝術を愛し深く佛典に參す。されば人情を寫すや闡明詳に過ぎ、剖拆細に入り、作中の人物悉く酸いも甘いも嚼み別けたる悟道の人たらんとす。人情の偽多きを知りては一旦の恨に神を憤り佛を憤



りし者も、飄然悟り來つて「浮世を見れば皆面白き人様々、慘かりし昔時の胸の氷碎けて東風吹く空に糸遊のあるかなさかの身も面白く、佛も可愛く凡夫も可愛く、天地に一つも憎き者なくなりしは獨り『對獨體』のお妙のみに非ず、多くは諦め過ぎ悟り過ぎ、一度仙に入りて復俗に返りし聖者の如く、動もすれば世と相關するなき超絶界に入らんとす。是を以て當代の時尚に投せんには餘りに豫言的にして又餘りに詩的なりき。智識ある讀者鑒賞家を代表すべき當代批評家すら、尙唯筆力の妙をのみ稱へ、幽玄にして凡人の窺知すべきに非ずなど、無意義の讚辭を呈するに止まる、況や一般の讀者に於てをや。批評家は紅露二家を併稱すと雖、之を時尚に係けて當代の中心作家を求むれば露伴終に紅葉の敵に非ざるなり。思ふに維新來文明史上の大事實たりし新舊思想の衝突は、社會の外面的生活即ち政治經濟界に於て既に調和を遂げ、其の内面的生活即ち思想界文藝界に於ても亦漸く相融和せんとす。是を以て從來小説家の描寫の對象たりし新舊分子衝突の『亂刺』、『浮雲』以來鋒銳漸く鈍り、當時正に形成せられつゝありし明治の新生活の忠實なる描寫之に代るに至れり。紅葉及硯友社派は恰も此氣運を代表せるに似たり。斯くて

人心漸く調和を感じ、餘裕を生じ、從て文學上の好尚粗笨を離れて精緻に趣き、諷刺のこちたきを選けて寫實の瀟洒なるを喜ぶに至りぬ。然れども其の調和や、未だ思を形而上に馳する程の安靜に到らず。其の餘裕や、未だ藝術の權威を認むる程の深厚に達せず。露伴が藝術の愛慕、其の權威の信仰等の思想が、到底當時の民衆に解せられざりし所以、亦恐らくは茲に存す。

蓋し露伴の作は信念の上に立ち、道念の上に立ち、文藝に對する熱愛を驅ひたる抒情詩なり。之を小説と言ふべくんば一個の理想小説なるべし。而も描く所は徹頭徹尾超絶的事象に非ずして、現實的事象と神秘的理想的事象との渾然融和せる者とす。斯くの如きは小説内容の一進轉歩にして、文藝鑒賞の資格ある國民が異日必ず一度味ふべき詩想に屬し、國民思想の調和一層進み、餘裕豊かなるに及べば、必ず這般深甚の意義を有する作物を要求すべきなり。畢竟是等は後來將に起らんとする小説界の一新時期に到る先驅にして、一般時尚に先つて此の詩的思想を鼓吹せし豫言的述作なり。げに此の豫言的特色こそ露伴の作をして、時尚の如何に係らず、文壇に重きをなさしむる者なりけれ。



紅葉には硯友社一派の諸衛星ありき。露伴は恰も彗星の限なき大空を辿るが如く、孤影孑然として特異の軌道を廻り、決して露伴一派なる者を有せざりき。されば露伴に關する叙述は茲に之を終り、筆を轉じて紅葉二家の圏外に立てる二三の小説家に言ひ及ばん。

#### 其の他の作家

『書生氣質』に新小説の端緒を開きし春の屋おぼろは、此期に於て亦二三の作を出せり。二十二年『國民の友』春期附録に載せたる『細君』の如きは、寫實的に完璧に近き點に於ては、短篇なりと雖、遙に前者の上になりと云ふべし。

當時の小説界に於て、竹の舎主人龔庭篁村は、亦看過すべからざる一方の將たり。篁村は江戸の人、夙に『讀賣』に入り、後『東京朝日』に入り、小説隨筆及劇評に筆を執る。其の小説の作、多くは短篇にして江島屋風の戯作に近し。其の『讀賣』『新小説』等に載せたりし者、二十二年『むら竹』と題する合巻の叢書として出版し、同年尙『新著百種』に掘出し物を出し、『國民の友』に『良夜』を出し、單行本として、『當世商人氣質』を公にし、翌年『新作十二番』に『勝鬨』をものし、其他雜誌叢書に載する者少からず。當年の批

評家筆路の輕妙を賞し、描寫の洒脫を讚し、觀察の奇警を美し、紅葉美妙以外、明治文壇に一旗幟を樹つる者と稱へ、遂には篁村宗の目を生ずるに至れり。蓋し、篁村は世人か馬琴春水の外小説家あるを知らず、鯉丈魯文の外戯作者あるを知らざりし。明治十年代の文壇に現はれ、八文字屋江島屋の戯作を涉獵して深く元祿の昔を味ひたる才筆を以て、『讀賣』を江湖に重からしめ、新泉居士太阿居士の名をして斯壇の異彩たらしめし者なり。當時未だ元祿文學の何なるを解せざりし世人は、漫然此の異装の文章を歓迎したりしが、幾くもなくして文壇元祿を呼ぶ聲漸く起り、美妙紅葉露伴の徒、復興の氣運を鼓吹するに方り、遂に其の興趣を闡明せられざりし篁村の文章、茲に其の由る所を明にせられて益其の聲價を増し、遂に盛名を一時に馳するに至れり。然り、篁村の價値は是のみ。江島屋八文字屋一流の諷刺文を模倣せりといふに止まる。之を稱揚すべくんば模倣の筆の巧妙を稱せんのみ。明治の文壇を飾る作物たるに至つては與り知らざるなり。此の點に於ては、『當世商人氣質』は蓋し其の傑作たるべし。總て商人は地道に稼かん者成功すべしといふ平凡なる思想を江島屋ぶりに述べたる所、模倣の上乗なり。故に篁村は飽くまで江



島屋ふりを以つて立つべき者にして、決して明治風を試むべきに非ず。若し世潮に連れて寫實小説の筆を執らんとする時は失敗を旋さず。彼の『堀出物』の如き或は篁村の傑作と稱し、或は紅葉の『色懺悔』に勝ると褒する者ありと雖、其趣向の平凡なる、其の人物の舊型を出てざる、到底新時代の描寫たるに堪へず。加ふるに文章亦平素の輕妙を缺きて著しく稚氣を帯び總體の調子其破風の清楚を棄て、馬琴風の繁縷に陥る。畢竟篁村は舊思想の人、過去を知れる頭腦を以て舊思想の支配せる社會を観察すべき、戯作者にして、現在及未來を知る眼光を以て新思想の支配せる社會を観察すべき小説家に非ず。其の諷刺の筆を向くる所は『浮雲』の如く新舊分子の衝突又は明治の新人物に在らずして、明治の御代に殘存する舊時代の遺物遺習に在り。而して此の特色を最明瞭に發揮せる者を『むら竹』に收めたる百餘の短篇となす。要するに篁村は舊文學の殿將、元祿時代諷刺家の面影を今日に示し、者に過ぎず。之を文壇の一異彩とするは可なり。然れども之を激賞して舊文學の筆致よく新時代を寫せりと言ひ、或は美妙紅葉に多く譲らざる小説家なりとなすか如きは、蓋し其眞を失ふといふべし。

舊文學の系統を引ける作家の中、正直正太夫即ち齊藤綠雨は著しき特色を有する者なり。正太夫文才早熟、十三四歳の頃既に戯文を草し、俳諧を作りて新聞に投書せりしが、當時盛名ありし魯文の滑稽と諷刺とを歎美し、其門に入りて後日諷刺家たるべき素地を養へり。十七年『都新聞』の前身たる『今日新聞』起るや、魯文に従うて入社し、いたく社主小西義敬の愛する所となりき。此時より綠雨は豪華を喜び、瀟洒を尙ふ都人士となり、江東みどりの號を以て單純なる人情話を綴り、四六駢體詩歌發句を綯ひ交せ、濃艶華麗七五の馬琴調を恣にせり。後二十三四年の比に至り、正直正太夫の名を以て諷刺家として現はれ、『讀賣』などを舞臺として特色ある批評諷刺の奇才を遺憾なく發揮し同時に小説作家として現はれ、『かくれんぼ』『門三味線』『油地獄』の傑作を出し、盛名一時に世に布けり。前者は二十四年頃『文學世界』の第六卷として出で、一小篇に過ぎずと雖、簡淨流麗精練の致を極め、綠雨作中の代表的逸品なり。中者亦苦心の作にして最成熟せる感想と筆力とを見るべく、後者は同しく二十四年の作にして比較的苦心を経ずして成り、而も世評最噴々たりし者なり。總じて之を見るに、彼か作の内容は必しも大なる價值ある者に非ず、描寫の



對象は下層社會に限られ、取材範圍は江戸の町家東京の狹斜に限られ、人物は若旦那、舞妓等に限られ、總て狹隘にして一種の特色ある部分にのみ其銳利なる觀察眼を向けたり。是を以て概ね同工異曲、舊文學の習氣を脱せず。其精髓は上述何れか一篇に盡きたりといふべし。唯形體即文章に至つては綠雨の價値の主なる部分にして、或は巧綴、烹練の限を盡し、或は進んで清淡瀟洒の境に入り、機鋒潑刺として才氣溢るゝか如く、亦一代の文章家たり。

吾人は又森岡外漁史の名を忘るべからず。岡外は固と翻譯家又は評論家として重要な地位を占むべき者なるも、創作家として亦棄つべからず。三十三年「國民の友」に掲げたる「舞姫」、『柵草紙』に載せたる「うたかたの記」及翌年「新著百種」に載せたる「文使」の如きは、着想文章共に作者が私淑し精通する獨乙文學の面影を移して、清新幽高の趣致に富む。三篇共に天涯客寓の日本青年と薄命可憐の獨乙少女との關係を描き、同情に富める本邦青年か少女の困厄を救ふに端を發し、熱烈なる愛情を懷ける少女が衷心の感謝を表はすに局を結ぶ。特に「舞姫」『空象の記』の二篇は、青年か留學生なる事、少女が藝術に關係ある逆境の兒なる事、少女が青年に對

る感謝の念終に發して熱烈なる戀愛に變ずる事等、殆ど其の軌を一にす。脚色かくの如く變化なしと雖、着想は純然たる新時代の者にして、確に明治思想の一面を傳ふるに足る。唯「空象の記」『文使』聊か本邦青年の思想生活に縁遠く、寧ろ西洋短篇の翻譯を見るの思あり、且小説よりも寧ろ抒情詩的趣致に富めりと雖、「舞姫」は全く之を擺脫し、心理描寫、性格發揮の一點など當年寫實小説の間に伍して十分重きをなすに足る。憾むらくは其の文章、品位餘ありて情熱足らず、委曲餘ありて勢力足らず。然れども情景並至りて清楚比ひなき所、一新文體を斯境に寄與して後來流行の源泉となりし功亦没すべからざる者あり。

上述諸家の成人らしきに對し、矢崎嵯峨の舍主人(おむろ)は青春の情感漲り溢れたり。二十一年「大和錦」に小篇「薄命のすゝ子」を掲げ、次で「都の花」に「初戀」の佳作を出し、より既に美しき夢の如き幼時の追想に無限の美感を懷き、可憐純眞の情趣を描きて幽玄の境に入る者あり。其の好んで描寫せる女性は無垢稚嬌天女の如く、之に配せる男性は陰鬱にして一種の悲觀を抱ける狷介の人なりき。彼の北邙散士の名を以て「國民の友」に掲げたる「流轉」の如きも亦此の陰鬱なる觀念と純眞な

矢崎嵯峨  
の舍



る情緒との發露せる者、當年の傑作として「初恋」と共に懊惱の詩人たる彼の面目を遺憾なく表示せり。其他『涙の谷』及『都の花』所載の「腐玉子」「婿選み」等より二十四年『國民の友』に掲げし『夢幻境』に至るまで、獨特の大作あるに非ず、篇什の豊富なる者あるに非ずと雖、筆意一脈の情熱を帯び、高潔なる觀念を含みて、明晰直截、能く青年の肺腑を刺す。類を以て分たば、露伴と同じく理想小説と呼ぶべく、寫實の野に生じたる一異草として、性格世相の忠實なる描寫以外、情緒發動の一部を描いて、天真流露、殆ど抒情詩の境に入る。而も其の抒情詩的色彩は、露伴の如く高遠にして、理想的なる者に非ずして、熱烈にして哀觀を湛ふる者なり。露伴を以て、陽春白雪の詩を歌ふ者とすれば、彼は即ち月下相思の詩を賦する者なり。彼は又新體詩抒情文の作家として、當時に重きをなせるを併せ見れば、斯かる詩的情緒の特色の由來甚遠きを知るべし。

當年の文壇に多少の作を出し、小説家には、尙『鐵鷲』の作者、田邊花圃、女史、露子、姫』の作者、石橋忍月、其他宮崎三昧、須藤南翠、前田香雪、高橋太華、堀紫山人、渡邊霞亭等あり。或は『國民の友』『都の花』『新小説』『柵草紙』『日本の文華』等の雜誌に、或は『新著百

種』小説群芳』新作十二番』聚芳十種』文學界』等の合巻に、或は諸新聞に、或は單行本に、皆多少の創作を出せり。又滑稽趣味を以て現はれたる作家には、南新二、幸堂、鈴木得知等あり。戯作者の滑稽方面を傳承して、多少其品格を高めたり。明治の滑稽文學を導く先驅として、必しも棄つべきに非ず。

#### 關外翻譯家としての

終に臨みて翻譯小説の概觀を述べべし。曩に新文學の曙光を論するや、思軒の英文翻譯と二葉亭の露文翻譯とを以て之に擬しぬ。爾來小説の翻譯は詩歌戲曲等他方面の翻譯と共に徐々として現はれ、森鷗外、内田不知庵、原抱一庵、小金井喜美子、若松賤子等の翻譯家を見るに至れり。就中關外獨乙文學の紹介者を以て立ち、二十二年以來の翻譯壇を双肩に荷うて二葉亭の後繼となりぬ。

關外素と醫家の出、其獨乙語學に於ける、因る所有るなり。彼は語學の智識を媒介として、深く獨文學の精髓に參し、兼て彼國美學並に文藝批判の精神方法を學び、翫賞の餘、進んで評論に従ひ、更に又筆を翻譯に染めたり。而して譯する所、小説を始として、劇詩抒情詩に及び、多くは『國民の友』及『柵草紙』によりて世に出せり。劇詩



抒情詩は之を後節に譲り、特に小説に就て觀察するに、其原作を選ぶや、リットン、ユーゴ、ツルゲネーフ等一二作家に限らるゝ事なく、比較的廣く諸國諸種の作家を探れり。今二十六年の比に至るまでの譯筆を列擧すれば、『戰僧』みくづ、『綠葉歎』は佛のドーデーより、『黃綬章』、『二夜』は獨のバックレンデルより、『惡因縁』、『地震』は同クライストより、『浮世の波』は同スタルンより、『福西館』は露のトルストイより、『該撒』は同ツルゲネーフより、『新浦島』は米國アルキングより、『洪水』は同フレットハートより、『玉を抱いて罪あり』は獨のホッフマンより、『埋れ木』は同シビンより、『女丈夫』は同フレンチルより、『ぬけうり』は露のレルモントルフより來りし者にして、悉く收めて二十五年出版の『水沫集』と三十年出版の『かけ草』との中に在り。然れども獨乙以外の作物は悉く其の獨乙譯より重譯せる者なれば、之を以て直に各國文學の面目を紹介したりと稱し難く、讀過一番して獨文學の色調の横溢せるを見る。而して集中の作『埋れ木』を除くの外、皆短篇小品たるに過ぎずと雖、『二夜』、『地震』、『該撒』等、尺幅尙寶惜すべき者なきに非ず。『埋木』に至りては藝術家を題材とせる幽趣眼なき名作にして、天才煥發、キオリンの精藝時人を驚かしたる二十四歳の青年樂手グザフン、ザイレンを

『水沫集』

『埋れ木』

主人公となし、之を周るに落魄の記者デリレオ、之か子なる可憐の少女アンネット、身天才あるに非ずして好運よく名利の俗念を満足するを得たりし、ピアノ弾きステルニイ及バ里モンマルトン街に住める數多浮浪の伶人文士を以てし、斯くして、かの空想ありて實行なく、自家の才能を過信して生涯何事をもえ遂げさる一種の性格を名殘なく寫し出でぬ。主人公グザ誠に斯道の天才、自負自信の念強烈にして美しき妄想を未來に馳せ、胸中滿幅の妙譜、紙に寫さば手に從つて成るべく、不朽の名忽ち一世に高かるべしと思ひ上りぬ。然れども藝術家に通有なる倦怠病は彼の希望をしてはかなき妄想に終らしめたり。彼が神興に乗して事に從ふや恰も熱を病める者の如く、數日の間萬事を抛つて之に凝る。されど感興の天馬一たび彼を搖り落さば、想像の糸忽ち斷絶して倦怠身を襲ひ、加ふるに曲譜瓊瑾百出嫌厭の情堪ふへからざるに至る。斯くて此の天才の作は僅にダンテが『地獄篇』の譜に面影を止めて他は悉く倦怠病の墓穴に烟の如く消え入りぬ。而も此曲は彼の戀人、許嫁、所有寶にも代へ難きアンネットと共に陋劣なるステルニイに奪はれたれば傷心の極遂に癡狂となり、空しく行末の成功を夢みながら、一代の天才、あはれ埋れ



木の花咲く時に遣はずして老い朽ちぬ。斯くの如きは近代歐洲に於ける著しき現象にして、所謂世紀末の病的期間には特に其勢を逞うする者なり。國外閑雅の筆、譯し來りて感興深く、正に是れ、本邦藝苑に起らんとするウ。ル。テ。リ。ズ。ム。の豫言とも見らるべし。

國外の譯文は其の得失共に彼が創作の文に似たり。否創作の文體却て翻譯の筆に出でたり。思ふに彼の創作は思想形式共に外國文學に學べるを以て、之を二葉亭に比するに、二葉亭は翻譯も猶創作の如く見ゆるに反し、國外は創作も猶翻譯なるか如き感あり。運筆悠々として迫らず、悲壯を描くも優麗を寫すも、等しく高雅なる擬古調を以てし、温藉ありて激越に缺くる處、曩に創作に就て述べし所以の者又移して茲に言ふべし。然れども、國外固と深遠の學識を具へ、一定の審美見を抱くを以て、落想若筆一に其典據に依り、決して一點一劃を濫にせず、立案慎重注意周到、彼の多作濫作の聲をして走り且僣れしむるの概あり。

當時の翻譯小説には尙二十六年の『世界文庫』あり。田山花袋はトルストイの『コサフク兵』を内田不知庵は同『めを』を松居松葉はセルバンテスの『鈍機翁』を譯せり。

されど概ね抄譯又は梗概譯に過ぎず、特に重きを置くに足らず。

### 第三節 傳奇小説の興廢

春の屋二葉亭以來寫實小説の潮流天下に瀾漫し二十年より二十六年頃に至るまで、一代の文壇を被うて其全盛を誇りぬ。特に二十二、二十三兩年は斯界無前の盛觀を呈し、名家の輩出、名作の出版、前後相望み中にも『色懺悔』『胡蝶』『細君』を始め『むら竹』『當世商人氣質』『露子姫』『堀出物』『風流佛』『殘菊』『墨染櫻』『流轉』『舞姫』『一口劍』『新作十二番』『葉末集』『空象の記』『夏瘦』『伽羅枕』等、此一期間に於ける名篇の殆ど全部を産出しぬ。勿論是等は、今日より之を見れば、其の質に於て必しも優等なる者に非ずと雖、少くも歴史的價値に於て輕からざる地位を有する者なり。げにや此の二箇年は曾に寫實小説の類のみならず、傳奇小説、韻文、各種の翻譯亦競うて起り、雜誌叢書も連りに刊行せられ、特に評壇の花新に咲き出て、高等批評の端緒開かれ、總て文學界の所有方面に於ける活動頗る目覺しかりし年なりき。寫實小説は實に此の文壇の順潮に乗じて進歩の先頭に立ち、以て一代の文運を支配せる



なり。

一五〇

須藤南翠

斯かる間に本邦小説の他の一種たる傳奇小説は如何に成り行きしか。曩に馬琴の勢力失墜して元祿文學復興せるより、傳奇的趣味を帯べる總ての小説は、新に勃興し來れる寫實的小説に壓倒せられて一時其の聲息を潜め、僅かに前期政治小説の系統を引ける鐵腸龍溪南翠等の作、及時代物の作者たる學海篁村三昧等の作によりて其の命脈を繋きたりき。南翠は巧に時と推移し、或は政治小説を作り或は歴史小説をもし、更に進んで寫實小説に指を染め探偵物に手を下さんとす。

矢野龍溪

前期以來『改進黨新聞』に據りて俗流に愛讀せられ、此期に入りて『臘月夜』『照日葵』『雛黃鸝』、『ばれ松葉』等を出して一部讀者に迎へられたり。鐵腸は専門文學者に非ずと雖、此期に於て又『南洋の大波瀾』等を出して政治家の空想を小説に寓したりき。

依田學海

龍溪は政治家中の學者にして、既に前期に於て國民政治思想の漸く發達せんとするを見るや、『經國美談』を作りて之を鼓吹し、此の期に至りて學術思想弘布の必要を見るや、科學應用の冒險小説たる『浮城物語』を著して科學者の空想を小説に寓したりき。依田學海は漢學者より出て、小説の批評、演劇の評判に筆を執り、兼て小説

脚本の創作を試みし者にして、其小説は『楠木』『十津川』等、主として南北朝時代の事蹟を綴りたる時代物なりき。篁村は江島屋風を本領とするも、時に又時代物の作『勝鬪』の如きあり。されど筆路の輕妙を見る外取り出て、言ふべきなし。三昧の『桂姫』『塙圍右衛門』等亦世話物作者の手に成りし時代物たるを免れず。要するに當代の傳奇小説は事件の爲に人物を作る弊に陥り、其の人物は悉く無理なる結構に操らるゝ傀儡の如き者、其の量に於て到底寫實小説に及はざると共に、其の質に於ても亦紅葉露伴の作に匹すべき者あらざりき。唯一篇の長短に至つては、寫實小説の概ね短小なるに反し、傳奇小説に屬する者は比較的長大なるが故に、傳奇を揚ぐる者、往々其雄大の風姿遙に寫實小説の規模狭小なるに勝ると稱す。然れども傳奇物の雄大は、少くも馬琴の域に進まざれば、以て識者を動かすに足らず。内容空虚にして何等人生と相關する事なき者、徒に外形の大を以て誇るも、到底寫實小説に加ふる能はざるなり。故に教養ある社會の同情は大抵後者に注かれ、重なる評論家即ち春の屋、鴈外、悉月、不知庵、美妙等連りに心理的小説を鼓吹せり。勿論是等評家は、皆一方にては寫實小説の作家なりと雖、以て當代教養ある讀者社會を代表



せしむるに故障なきなり。天下は依然寫實小説の天下たるを失はず。然れども勢窮まれば則ち返る。世の好尚は移りぬ、紅葉一派の寫實小説は漸く倦厭せらるゝに至りぬ。全盛は二十三年に止めて翌年よりは著しく衰へ、『聚芳十種』『文學世界』『小説百家選』の諸什は片々たる小品に過ぎず、紅露二家さすがに『三人女房』『三人妻』『五重塔』等の名作ありて斯派の爲に光輝を揚げたりと雖、知名の作家或は隨筆に隠れ、或は諷刺文に通れ、或は評論に移り、創作寥寥、一般の風潮は遂に前年の繁榮を持續する事能はざりき。思ふに國民新奇を追ふ性質は、獨り物質界に存するのみならず、藝術界に於ても亦著しき者あり。春の屋か模寫小説を唱へ出で、より斯派の流行かくの如く盛なりしは、馬琴春水の末輩、一九三馬の末流の陋猥なる戯作に比して遙に卓越せる品格と價值とを有するに因る事論を俟たずと雖、一には又舊時代千篇一律の勸懲乃至駄洒落に嫌きて、明治小説の新奇なる色彩を喜べりしならずや。且文學の讀者は必しも教養ある識者ならず、彼等の好尚必しも識者の其れと一致するを保せず。勿論識者の指導よく一般讀者の趣味を左右する事少からずと雖、當代の評論家か寫實小説に謳歌せるを見て、直ちに一般讀者

か之に對する意見嗜好を斷ずるは少しく輕卒に過ぎたり。されば當年の批評家即ち教養ある讀者を代表すへき人々が、尙寫實小説を捨てざるに際し、既に其の盛運を經過し去りしを見れば、一般讀者の之に對する倦厭漸く起りしを知るべし。人心既に罅隙あり、新奇の作物に對する翹望爰に起り、乃ち此罅隙を充し、此の翹望に應ずる小説界の新潮は、從來屏息したりし傳奇的方面に起りぬ。國民好奇の念に投じ寫實小説に嫌きたる人目を一洗せんは、唯傳奇物のみ之を能くすへかりしなり。村上浪六の遊俠小説、黒岩涙香の探偵小説は即ち此要求に應じて現れし者なりき。蓋し當時の寫實小説は假令教養ある讀者に捨てられざりしと雖、其裡おのづから凋落の素因を藏せざるに非ず。夫れ寫實小説は固く自然を宗とし、一切の私心を去り、自我を解脱して世相の眞を寫す者なり。されば其の究竟は實世間を觀察して褒貶なく、黜陟なく、所有作者の主觀を排して逍遙か所謂沒理想の域に入り、以て世態人情の眞相を披瀝するに在り。故に其至れるや、大自然を尺幅に縮め、大造化を壺中に收めて、渾成無瑕、之を探れば愈深く之を索むれば愈杳かに、恰も彼の逍遙か寓言に見わたる「底知らずの湖」にも似たり。然れどもかくの如きは



總ての作家に望むべきに非ず。假令觀察自我を解脱するも、觀察力其物の鋭鈍、其力の及ぶ範圍の廣狹は固と天分に出づ。故に其眼睛に映する世相は自己に親しき世相なり。觀察に上る人情は自己に近き人情なり。捉へ得たる材料の上には敢て褒貶の私見を狹まずと雖、材料其物は既に主觀的選擇を経たるを如何せん。要するに意識的には能く沒理想純客觀の描寫を試み得へきも、無意識的には其根本に於て主觀の影、即ち作者の采丰を帯びざるを得ず。故に其の下れるや、自己の管見に出でたる一種の世態人情を寫し出づるに止まる。且寫實の手法や、其眞を得んとするの極、巧拙共に往々寫美の約束を破り、描寫の對象動もすれば美の域外に逸する事あり。斯くの如きは寫實小説の凋落する素因となるべき者にして、其傾向の強弱は直に作物の價值を高下するに足るべし。當時の寫實小説は正に此の則を以て律せらるべかりしなり。

二十三年逍遙は『讀賣』紙上に『小説三派』を論じて主事派固有派、性情派、折衷派、人間派の目を設け、當時の小説を評して悉く性情派の初歩なる者となし、主事派なる舊作家以外に新旗幟を樹てたるも、性情を活寫するを主としながら、尙之を寫すに方

りて偏に事件に依らんとする所未だ性情派の境を出でずと稱し、人間派に至りては當今の文壇絶て無しと言へり。『桐草紙』の隅外之を批判してハルトマンの類想、個想、小天地想を配當し、性情派を以て正しく個想派なりとせり。げに當代の新家は性情派個想派に屬して而も未だ至らざる者なりき。性情の活寫や、世相の觀察や、固より主事派の如く類型的ならずと雖、因て來る根本が狹隘なる小主觀に存するを以て、其の弊や同一範圍内の世相人物を描寫するに止まる。故に當時の小説を讀んで彷彿し得へきは、唯東京の中流乃至下流社會の中、特に作者周圍の一部分に於ける世態人情のみ。加ふるに元祿文學復興の結果、利弊共に之を承け、形より入りて遂に神をも傳へ、動もすれば沃艶なる色魔界を寫して其實相を得んとし、野の花の如く美しく自らなる人情の發動を斥けて、一向きに彼の魔界の趣味に養はれつゝ粹よいきよと曲りくねりたる人情の發動を描き、其極往々寫美の域を脱して醜猥に陥らんとす。斯かる作物の社會に於ける壽命は決して長かる能はず。寫實小説を回護し助長したりし識者社會と雖、爰に至りて嫌焉たらざる者幾何ぞ。茲に於てか小説の理想を問ひ觀念を論じ、當代小説の今少し深く且廣からん事を



村上浪六

求むる傾向批評家の間に盛に起り、作者に在りても、從來辭句の鍛鍊文體の選擇に苦心し、狹隘なる主觀に限られたる局部小説を以て能事畢れりとなせる者、反省し考慮して恣りに製作に逸らす。既に名を成せる者、將に名を成さんとする者、齊しく默想の裡に沈みて、茲に一般小説界の不振を來しぬ。此の趨勢は彼の恒心なき俗衆の倦み易く厭き易きと相扶けて、大勢遂に寫實小説を見捨てぬ。

此の時に方りて浪六か遊俠小説世に現れぬ。浪六は思軒の下に『報知新聞』に在り、其の『叢談』に原抱一庵村井弦齋運塚麗水等と執筆せし後進作家にして、二十四年『三日月』を出版するや、奇矯の筆、善く市井の遊俠三日月次郎吉を寫し、『俠客傳』にも見るべからざる生采の奕々たる者ありしかば、一代の讀書社會は翕然として之に就きぬ。次て『井筒女之助』『奴の小萬』出で、皆愛すべき遊俠を描きて成功したりしかば、後進の浪六一躍して大家の列に入り、先進作家をして一時後へに墮若たらしめたり。爾來三十六七年の交に至るまで、『鬼奴』『破太鼓』『夜嵐』『深見笠』『髯の自休』『安田作兵衛』等、作る所皆過去の歴史に於ける三日月一流の人物を描いて江戸時代中流以下の社會に於ける粹と俠との理想を發揮し、其の主人公は宛ら此の思想の

權化の如く、脚色事件、總て傳奇的色彩を帶び、以て寫實に倦みたる一般の時好に投じぬ。是に於てか、傳奇小説の反動的流行を小説界に見るに至れり。

げに此反動は寫實小説の失勢と民心の倦怠とに根ざし、新奇を好む一般傾向に出たりと雖、特に浪六に至りて其の盛を極めしは別に故あり。蓋し浪六の作は主事派類想派に屬する點に於て南翠龍溪等の作品に異なる無しと雖、讀者を動かすへき一種の魔力を有する點に於て大に趣を異にす。而して其の魔力たるや、一に小説主人公の性格と國民性との契合、及之を描くに恰當なる奇矯の筆致に在す。夫れ三日月一輩の性格を形作る俠と粹との二特質は、江戸時代國民の間に醗酵し來りし一種の氣象にして、假令往々笑ふべき不自然没人情の屈曲ありきとするも、既に三百年間中流以下の理想となり、明治の今日に傳へて尙其の胸臆を充せる者なれば、任俠風流の行動直に讀者の肺腑を衝き、加ふるに描寫の筆力亦之に添ふ所ありしかば、讀書社會は茲に新なる形式を以て復活したる俠客傳を得て、歡喜措く能はざりしなり。

然れども浪六に取るべき所唯是のみ。題材と筆力と共に『三日月』『女之助』に盡



きて、爾來唯千篇一律、奇構も奇に慣れては興なく、索然として情味共に失ふ。文章亦舞文弄筆に流れ蘊蓄なく研究なきの致す所時に杜選に過ぎ孟浪に失し、到底紅露一輩の精練なる文章に倣すべきに非ず。内容の空虚は之にも勝り、彼の管見的人生觀を寓せりと非難せられし寫實小説に較ぶるも、尙數等の下に在らんとす。是を以て觀衆の隨喜讚歎するに係らず、識者夙に之を却け撥鬚小説の名を與へて小説界墮落の一現象とせり。要するに撥鬚小説は主事派類想派の劣等なる者なれば、性情派個想派たる從來寫實小説を壓して獨り隆盛の域に上る事あらば、小説界は明に後退せるなり。斯かる間に、倦み易き看衆は、内容形式共に變化なきに嫌きて復浪六に同情せざるに至りぬ。

物滞れば必ず腐る。西南の妖雲去りて國家事なき、最早二十年に垂とし、十七年朝鮮の變亂は深く國民を刺撃するに足らず、二十三年國會開設の事一時人の耳目を側てしめしと雖、尙太平の氣象海内に充ちたりしかば、民心茲に倦怠の色を現せり。倦怠は延て文壇に及び、文學思潮革新の活動ありてより十年の今日、斯界の意氣又當初の如くならず。罅隙百出撥鬚小説を喚起して茲に墮落の端を發き、幾も

なくして之を棄つるや、停滯又停滯、墮落は進んで探偵小説の流行を來すに至りぬ。探偵小説は恰も當時劇壇に起りし壯士芝居の如く、疑獄の始末を以て骨子となし之に人情の糸を搦みたる者、欺騙、邪淫、殺人、強盜等所有犯罪の秘密と、之を偵知する探偵社會の苦心の秘密とを描いて好奇の俗衆に投するなり。多くは西洋物の抄譯又は翻案にして一時の盛榮に乘じ、出づる者甚多く、遂に其の發書すら見るに至りぬ。涙香小史は實に是等作家の代表者なり。

墨岩涙香

涙香は通俗新聞文學者として成功せる者の一にして、西洋探偵小説を翻するや唯其の意を取りて自家藥籠中の者となし、俗衆の智識本邦の事情を以て了解し得へき範圍に於て之を平易精細の文章に綴り出せり。『鐵假面』『非小説』『大金塊』『死美人』『人耶鬼耶』等は一時讀書界を風靡したる者にして、其の探偵的興味は讀む者をして巻を描く能はざらしめぬ。然れども其の興味たるや、畢竟探求的にして、恍惚觀照の文學的畛域に甚遠き者なるは言を俟たず。

彼も一時此も一時、操守なき俗衆の嗜好は、推移する事走馬燈にも似たり。二十四五年以來不振に陥りし小説界は卑俗なる浪六涙香小説によりて漸く命脈を維



さし、二十六年に及びては其も亦廢れて今や不振の極に達しぬ。小説不振の我文壇は如何なる者を要求せしか。抑も讀書社會に如何なる好伴侶在りて小説を捨てたりしか。逍遙は當時小説不振の因縁を尋ねて、史傳の流行宗教熱の昂上等を數へたり。げに當年文壇に起りし人物評傳、歴史評論と哲學宗教の問題とは人心をして小説を離れしむるに力ありしと共に、又小説を離れし人心を收めて此が好伴侶たるに適したりしなり。宗教界の活動はかの國粹運動勃興の際に萌し二十五年有名なる宗教々育衝突の大問題起るに及んで狂騒を極め、且哲學及神學の研究漸く盛にして思想界多事なりき。然れども純文學に對する此事象の影響は必しも重大なる者に非ず。吾人の注目すへきは即ち史論評傳の側に在り。思ふに史傳の流行は二十二年頃既に其の萌芽を發し、民友社博文館等の奮肆か連りに内外豪傑の傳記を出し、より始めて、二十四年田口鼎軒が雜誌『史海』を發行せし頃、に及んで斯界の活氣大に加はり、人物の評傳史實の評論相次て出で、論争一時の問題たりし者少からず。續て二十六年民友社の諸文士が『十二文豪』を發行せし頃に至り、文壇の嗜好は一轉して之に向ひ、小説に嫌らざりし讀書界は相率ゐて之に歸しぬ。

史傳流行の勢力は一方に於て小説の讀書を奪ひ、作者を屏息せしめつゝある間他の一方に於ては小説其者に影響して、爰に新なる小説を喚ひ起しぬ。讀書社會に於ける過去願望の情感は、新奇を追ふに疲れたる社會の現状と相縁りて爰に歴史小説の渴望となりぬ。『小説神髓』以來一切の過去を抛つて革新を稱道したる識者社會は、國民文物に對する過去の歷程、即ち歴史の權威を感じ、劇部に於ける時代物と園菊の演技との遂に除くへからざるか如く、歴史小説亦捨つへきに非ざるを知り、且其の師表とする泰西騷壇に於ても、歴史小説の一派、優に世話小説に對立するを見て茲に自覺を生じ、今更に馬琴の精力に驚き、其荒唐の過、勸懲の失以外、別に歴史小説家としての價值を認め、更に進んで斯かる過失なき優秀なる歴史小説を現今の文界に得て、以て墮落の極に達したる斯壇を廓清せんとするに至りぬ。二十六年『讀賣』新聞が賞を懸けて歴史小説を募集せしは、即ち此渴望の一端を表はす者にして、高山樗牛の『瀧口入道』は之に應じて出てし者なりき。其他運塚麗水村井弦齋塚原造柿園後の斐洲等の作家は皆此氣運に乗じて世に用ゐられたり。



然れども當時歴史小説に對する渴望は、唯渴望に止まりて遂に充さるゝに至らざりき。上述諸作家の篇什、唯勸懲の臭味荒唐の弊套を脱せるのみにて、別に從來の主事派的時代物に優る所なく、其分量を以てするも、成功の度を以てするも、到底紅露一派の敵に非ず。唯澁柿園の筆力稍望を屬するに足る者ありきと雖、麗水菘齋漸次に方向を轉じ、歴史小説勃興の氣運遂に去りぬ。斯壇に於ける成功は暫く之を後の世の大才に俟たさるへからず。

#### 第四節 新體詩及戯曲

##### 新體詩

『新體詩抄』が詩界革新の運動を起してより既に五年の星霜を閲したりと雖、斯界之に續く勇者なくして空しく十五年の故態に停りぬ。小説界の革新を遂げたる『小説神髓』は後れて起りしかども、硯友社一派差し次きて煽起し、寫實小説の大旆文壇を風靡し、詩界の寂寥を餘所に見て獨り進歩の道程に上りぬ。思ふに『新體詩抄』の諸篇は文學史上の位置を以て論すれば、正に小説界の『書生氣質』に相當すれども、其

内容實質に至りては恰も、織田純一郎等の翻譯小説政治小説と相若くの觀あり。嚴格に言へば新體詩界の『書生氣質』は未だ起らざりしなり。況んや『浮雲』をや、況んや『夏木立』『二人女房』『風流佛』をや。蓋し『詩抄』の詩篇は聲調新なりと雖、其きを免れず、用語自由なりと雖、蕪雜なるを避け難く、思想の廣濶は可なるも爲に散文的に陥り、表現の法明瞭なるは可なるも爲に露骨に過きたり。されば格調用語の雅醇ならん事にのみ熱中する歌人乃至國學者等の之を嗤笑せしは勿論、一般文藝界に於ても亦其の崇拜者甚多からざりき。曙光を十五年に發して今に其繼續者なく、唯徒に學童の傳唱して軍歌の代りとするに任せたるは、斯かる事情に基く事少からざるなり。然れども新時代の思想感情は到底在來の形式を以て表現する能はざるを以て新體詩は遂に没すへからず。果然此の圓融自在なる形式に充用するに比較的雅醇なる詩語を以てし、以て一面には、勉めて卑野と蕪雜と散漫と露骨とを避けんと試みたる一派の詩人を輩出せり。

落莫たる詩界は、二十年美妙紅葉九華か『新體詩選』を刊行し、湯淺半月(吉郎)が時々小品を『國民の友』に掲げ、二十一年落合直文(孝女白菊の歌)を『東洋學藝雜誌』に出し、三



十二年福外等、新聲社の人々譯詩「面影」を『國民の友』に載するに及んで漸く面目を改めたり。就中、美妙齋の軍歌は今も兒童の口に誦はれ、白菊の歌は井上巽軒の漢詩を翻譯せる長篇、當時の呼物として忽ち數箇の雜誌に轉載せられ、「面影」は福外喜美子直文器堂等が獨英諸家及明の高青邱の詩を和譯若くは漢譯し、或は原意のみを取り、或は字句韻法をも辿りて譯出せる長短十二篇を集めたる者にて、獨のギョ、オテ、シヨ、フル、バイネ、ホフマン、レナウ、英のバイロンを主として其他二三作家の小篇を交へたり。爾來翻譯創作兩なから起り、二十三年に入りて作家の輩出少からざりき。

此方面に於ても『國民の友』は隠然たる保護者なりき。『於母影』も同年、既に可行懐郷淺水疎影、詳郷等の名を以て、ゲート、シルレル等獨乙諸名家の短章を譯せる者、及美妙齋の創作小篇を收め、翌年更に矢崎北邨、散士、嵯峨の屋、宮崎湖處子、中西梅花道人等の作を收め、斯壇の中心となれり。是より大西操、山、戸川、殘花、磯貝、雲峰等の新作家を出し、『日本評論』、『文庫』等の文學雜誌、皆新體詩を以て誌上の飾りとするに至れり。就中、美妙湖處子、梅花の三者最勉め、恰も當時の詩壇を代表する觀ありき。

山田美妙

美妙は創始の才ある人なり。新小説の作家として、言文一致體の研究家として

宮崎湖處子

又文界評論家として、既に其の才名を成し、が、今又新體詩の作者、韻文の研究家として現はれたり。二十三年、『國民の友』に掲げし『醉沈香』を始め、長短の創作及翻譯を同誌に出し、者少からず。或は瀟洒或は妖艶なる小説的詩想を詠出し、且つ深く詩形に留意して洗練の語句を行き。湖處子は小説を作り、又美文をもつし、常に純潔天真なる抒情詩の思想を表せり。二十三年世に問ひし『歸省』の一篇の如きは、作者が一夏歸省の二週日間の感想録に過ぎずと雖、理想の清高、情感の純潔、共に青春の氣象を帯びて恰も萌え出てたる若草の如く、文章亦英文の脈調を以て和漢の語句を驅使し、想と形と相俟つて優に新散文詩の境に入る。されば新體詩の如きは、最力を用ひ、同年以後、『國民の友』誌上に其什を見ざる事稀なり。而して其の作風は、勿論『歸省』に類似し、詩材亦田園の趣を帯び、自然の描寫に富み、美妙が寧ろ人事を懸へるに對し、好箇の對照をなせり。梅花道人は樂天詩人なり。飄逸にして奇氣を負ひ、性情流露して天真覆ふへからざる趣あり。二十四年、『國民の友』に出でたる十九の姫等、前年よりの作夥しく、遂に同年、『新體梅花詩集』を刊行するに至れり。此集固より片々たる小冊子なりと雖、『新體詩抄』以來最初の詩集にして、且つ唯一作

中西梅花



家の創作をのみ集めたる新體詩集の嚆矢なり。其他嵯峨の屋は其の小説に於けるか如く、情感の激越を以て優る。西詩反譯の如きは、口語を用ゐて能く詩趣の饒なるを得たり。

上述新作家の用ゐし詩形は概ね『新體詩抄』の採りし所に從へりと雖、用語は『詩抄』の詩人が漢語俗語併せ用ゐて羈束する所なく、其の弊や蕪雜に陥り乾燥に失し、詩の成立の要素たる言語美を没却して顧さらんとせるに反し、著しく雅醇の度を増し、用語を古文學に取り、句調を和歌に學びたりき。勿論嵯峨の屋の如き、言文一致體を詩に試みし者無きに非ざるも、美妙齋の如き散文に於ける言文一致の勇將も韻文に於ては雅語雅調を主張せる程なれば、一般の風潮は『詩抄』の用意と方向を異にせりき。是れ一は當時復興の勢凄じかりし古文學の影響にも因るなり。此の時に方りて、一般評論界の活動につれて、新體詩も亦斯壇の問題となり、韻文論詩論は小説論と共に評家論争の好題目となりき。而して之に活氣を興へたりし者は亦美妙齋なりき。二十三年末より翌年に亘り、一篇の長論文を『國民の友』に連載し、題して『日本韻文論』といふ。此論の主とする所は勿論新韻文の形式に在

りて未だ其内容に及はざりきと雖、詩歌研究の端緒之より開け、不知庵忍月鵬外等交々之を論じ、辯難應酬甚盛なりき。此論争や當時の新體詩に直接影響する所さまで大ならざりしかども、從來詩歌に對する蹈襲的習慣を破り、大に研究的精神を養ひし一條は没すへからざる功績なり。

前記作家に引續き、國文家歌人の徒か、世潮につれて筆を新詩形に染めし者少からず。『白菊の歌』の作者落合直文は二十六年『騎馬旅行』の長篇をものし、其他中村秋香大和田建樹、佐々木信綱、小中村義象、黒川真頼等あり。然れども此等皆擬古體長歌體を取り、詞章雅醇を極むれども、詩想格調共に陳腐にして、美妙等か清新に比ぶべくもあらず。

斯かる間に美妙梅花の統を引き、清新の思想聲調を謳ひ出てたる一團の詩人現はれたり。雜誌『文學界』の同人即ち明治學院の諸詩人は是なり。北村透谷は之か主領にして『透谷全集』收むる所の數篇、概ね二十六年の作に屬す。透谷夙に詩に志あり、二十二年既に『楚囚の詩』といふ長篇をものし、強て七五調に依らざる變調を以て國事犯の新囚を詠じたりしが、事によりて世に出さざりきと雖、詩界の未だ存せざ



りし新體の者にて、創始の詩才頗る見るへし。爾來『文學界』等に出し、者少からざりし中に、『行きたをれ』『螢』『双蝶の別れ』『眠れる蝶』等、片々たる短章に過ぎずと雖、一種の幽韻當代の珍とすへき者あり。若夫れ、長篇『蓬萊曲』に至つては、泰西劇詩の體裁を借りて奔放の詩想を披瀝せし者、三韵八場より成り、長句短句錯綜して必しも七五五七等の節奏に依らず。世を憤り戀人を捨て、尙足らずして己の滅びを願ふ憐れの塵の子が内界に於ける神人二性の戦に備みて蓬萊原にあくかれ歩き、危巖削立雪崩大地を動かす靈山の絶巔に攀ちて大魔王に遭遇し、其の嘲罵に反抗して物皆滅びよと叫び、憤悶遂に死滅を呼び巖頭身を踴らして千仞の壑に投ず、是此曲の脚色なり。章句散漫にして渾成の詩體に遠く、間を甚しく散文的にして全體の詩調を破る事ありと雖、其内容に至りては想像奔逸情緒熱烈、透谷が多恨の一生と心界の煩悶とを最よく代表し、二十七歳の秋に於ける悲惨の最後を豫言する者の如し。思ふに斯かる人生問題の煩悶を懐く者、嘗に透谷一人のみに非ず。所謂世紀末の思想界往々かゝる神經質的煩悶を湛ふ。特に當代青年の一部に於て、泰西哲學思想の傳播と、其の文學思潮の浸潤との結果、從來實利の一方に偏倚せる國民の間に

到底見るを得ざりし一種悲痛の觀念を養成したりき。勿論其の苦悶懊惱や、決して深刻偉大なる者に非すと雖、兎に角從來思想界に於ける厭世觀と著しく趣を異せにり。『蓬萊曲』は即ち此思潮に觸れたる好箇の紀念にして、透谷は正しく當代思潮の一部を代表し、將に來るべき横流の先聲をなし、者といふべし。『文學界』の詩人には尙、戸川殘花、島崎藤村あり。作多からずと雖、多望なる前途はの見えたり。以上諸家の詩之を今日に見れば深く言ふに足らずと雖、詩界草創の當時、『詩抄』の乾燥なる散文的思想の後を承け、擬古派一流の陳腐なる和歌的思想の間に介し、清新の詩想を歌ひ、幽韻ある趣味を鼓吹したるは、假令其聲調に於て擬古派に劣る所あるも、詩想發展の上に没すへからざる功績を残し、斯壇第二の革新を遂けたりといふべし。此點に於ては、美妙湖處子、梅花及透谷の如きは正に新體詩界の『浮雲』『夏木立』たり。然れども國語の智識猶不十分にして、語格措辭の完きを望み難く、思想に於ても猶器局狹小、思索に乏しく觀察に粗にして、未だ明治詩壇に誇るべき創作を見ず。翻譯の如きも片々たる斷章のみにて、到底泰西詩宗の面影を偲ふに足らず。詩界の紅葉露伴未だ出てず。總ての發展を擧げて次期に委ねたり。



戯曲の發達は新體詩に比して一層後れ、未だ明治新戯曲の曙光すら見る事を得ざるなり。此の期に於ける斯壇は將に新曙光を見んとする時代にして、之を新文學の條下に序るは少しく備を失ふの感あれども、年代の順序上、暫く劇界の遷轉期に在る戯曲を検せん。

坪内逍遙

混沌たる當時の戯曲界に一道の光明を興へ、後年起るべき新戯曲の先驅をなし、は、吾人再坪内逍遙を推さるへからず。十六年逍遙は『シニョリアス、シイザア』を淨瑠璃體に翻譯し、『奇談自由太刀餘波銳鋒』を題して世に出しぬ。是實に西洋戯曲の面影の我文壇に紹介せられし嚆矢にして、明治の戯曲界は此時を以て過渡時代に入りなき。是より先依田學海小永井少舟等の『新評戯曲十種』等ありしも、皆單に文章の評釋にして、戯曲としての研究に非ず。『歌舞伎新報』の如き劇部雜誌出てしも、梨園の消息狂言の筋書を載するのみなりき。『該撤奇談』出でし頃劇壇の刷新及改良の事朝野の注目する所となり、演劇の改良を唱ふる者漸く多く遂に十九年演劇改良會の成立を見るに至れり。改良論や固より劇の全部に關し

劇場俳優技術等を議する事少からざるも、特に脚本改良に重きを置けるを以て、將來の戯曲脚本に影響する所頗る夥しかりき。

維新の變動は社會組織を一新すると共に、演劇の觀客と嗜好とに著しき變化を興へたり。從來の觀客は専ら中流以下に屬し、從て劇其物の社會的地位甚低かりき。然るに維新以來從前の觀客たりし中流以下の士分の人は風雲に際會して顯官に上り紳士となり、一躍上流の列に入りしより、演劇も亦上流社會の娛樂となり上りぬ。且泰西交通の結果、彼國に於ける劇部の消息のいたく我國と異なるを知りしかば、當時比較的進歩せる思想を有せる彼等新觀劇家は、在來の演劇に不滿の點少からず。茲に於てか改良論は先づ是等新觀劇家の口より唱へられぬ。然らば則ち彼等は如何に改良せんと欲したりしか。思ふに彼等は維新當初の思潮を形作りし社會の有力分子にて、從つて概ね實利思想を以て滿ちたる人士なりしかば、自然の傾向より荒唐を斥けて實歴を尙び、夢を喜はずして現を重んずるを以て、演劇に對する嗜好も著しく實歴的となり、荒唐夢幻的なる在來の劇の如きは最好まざる所なりき。而も彼等は社會の上に大勢力を有する人士なりしを以て、忽に



社會の嗜好を一變し、爲に從來中流以下の好尚にのみ媚び來りし座主俳優及作者をして、營業の必要より其の改良論に聽くに至らしめぬ。劇壇の改良刷新是に始まる。

改良は總ての方面に亘り、劇場の構造より始め、百般の機械的設備は勿論、技藝の上にも及びぬ。就中脚本に關しては座主守田勘彌、俳優市川團十郎、作者河竹默阿彌、相提携して先づ寫實的傾向を史劇に加へ、特に默阿彌、團十郎の長所を看、時流の赴く所を察し、從來得意の世話物を棄て、一種の考古的史劇を作しぬ。所謂活歴物は是なり。當時改良論者の説く所は、舊劇脚色の滅裂、趣向の陋猥なるを難するに在りしは勿論、殊に時代物の荒唐無稽、甚しく史上の事實に反れるを非するに在りしかば、活歴物は最よく此の嗜好に投じ、二十一二年の比盛りに行はれたるなり。而して、此等改良論者の中、最有力なる者は紳士社會の學者派とも言ふべき人々にして、就中末松青萍、藤田鳴鶴、外山、山等は具體的の改良意見を公にし、作者に於ては依田學海、川尻實岑、最熱心に此の運動に與りぬ。今當時の改良意見を綜合して其の主張を検するに、大約次の二條に攝するを得。一は即ち舊劇の陋猥と殘忍とを除き

て高尚優雅となさんとする一種の理想論にして、他は即ち脚色人物の本より衣裳臺詞の末に至るまで、勉めて事實に模せんとする一種の寫實論なり。前者は舊劇一面の弊を説き得て中れり。然れども論者往々極端に走せて、道德と美術との交渉につきての見解を誤る。後者も亦舊劇の他面の弊を衝て妥當なり。然れども是亦極端に馳せて往々國劇特有の美點を閉却し、總ての樂劇的要素を除き、脚色事件の空想に出づる者をも斥けんとするに至れり。

改良論には斯かる缺點あるを免れざりきと雖、兎に角上述二面より着手せんとし、青萍主唱の下に前に記し、演劇改良會を組織せり。會員には前掲二三子の外、矢田部尙今、矢野龍溪、福地櫻痴、等其他洋行歸りの學者連を網羅し、贊成員には朝野の名士を集め、會の目的として舊來の陋習を改良し、好劇を實演せしむる事、脚本著作を榮譽ある事業たらしむる事、及構造完全なる一演技場を建築する事の三條を標榜したりき。次で岡野紫水等、新に演藝矯風會を設け、二十二年演藝協會と改名し、文藝委員には學海、半峰、逍遙、美妙、默阿彌、籃村、思軒、鴈外、紅葉、實岑、南翠等、文壇の名士を網羅し、技藝委員には俳優、樂家等、百般の技藝家の優者を收め、以て新脚本を創作



又は選擇し、之を場に上せて演劇の品位を高うせんとし、創作は篁村南翠主として是に當り、篁村は『朝日』に南翠は『改進』に掲げたり。

此時に方り、囑外評論家として文壇に立ち、一定の審美見を以て演劇を談じ併せて當時の改良論を評しぬ。彼は機關誌『柵草紙』に於て、或は演藝協會の演説に於て其意見を發表し、改良論者が劇場構造の末に走り極端模實の弊に陥らんとするを警め、從來の作者か座主俳優に迎合し、俗衆の嗜好に阿附するを難して、戯曲は本演伎は未なる所由を説き、深く戯曲演藝の根本問題に論及せり、此等の論議は逍遙が劇に向て人情描寫の自然ならん事を要求せしと等しく、當代斯壇に對する好箇の警醒にして、後來必ず實現せらるべき新思想の萌芽なりき。惜いかな、當時の好尚を距る事餘りに遠かりき。

改良論の聲大にして呼ぶ事疾き上述の如かりしも、其の實効は遂に擧らざりき。協會の規模徒に大に名聲徒に高きも、選んで以て場に上すを得し新作は僅に宮崎三昧の作一篇に止まり、劇部と新文學者との間に於ける鴻溝は容易に除くべからず。會合遂に中絶して贏ち得たる結果は、劇の社會的地位の昂上と活歴の流行と劇場

の改良との瑣末事に過ぎざりき。されば歌舞伎座の大劇場は歐風を參酌して宏壯なる建築新に成り、團十郎之に據りて頻りに活歴を演じ、且つ俳優の社會的地位は劇其物の地位と共に進み、川原乞食一躍して演藝家と稱せらるゝに至りしかども、根本的の重大事は依然舊態を存せりき。

斯の不振の作劇界に在りて最新作に勉めたりしは學海なり。學海は當時の學者派の評論家にして且つ作家たる者、夙に舊劇の卑猥殘忍背實を厭ひ嘗て『吉野拾遺名歌譽』を作りて模本を示し、卷尾に附記して曰く、此戯曲は男女の情態を描きて情義二ながら得しむるを主となし、傍弓馬衣冠の故實を示し、又言語を述ふるに雅にして耳に遠からず、俗にして野鄙猥褻に入らざるを旨とす。又殺伐殘刻なる形を示さず、又悲痛哀歎に過ぎて衰弱狼狽の狀を現さず、哀むと雖勇壯奮烈の意を寓し、武勇を示すと雖酷薄粗暴の所爲を見する事なしと。當時遍く行はれし理想論と寫實論との奇しき混和なりと言ふべし。彼は此主義を以て二十二年又『文覺上人勸進帳』と『拾遺後日連枝楠』を作れり。共に寶岑との合作にして、前者は全篇盛衰記に據り、特に勸進帳と院宣との二齣は純然たる正史なり。此年場に上り、座附